

片島古墳群・片島遺跡 発掘調査報告書

— 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XVII —

1 9 9 5 . 3

兵庫県教育委員会

片島古墳群・片島遺跡 発掘調査報告書

— 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XVII —

1 9 9 5 . 3

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は、兵庫県揖保郡揖保川町片島、龍野市南山にまたがって所在する片島古墳群、片島遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、日本道路公団が建設する山陽自動車建設事業に伴う緊急発掘調査であり、同公団の依頼を受けて兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、昭和53年度に確認調査を、昭和55年度に全面調査を実施した。
4. 整理作業は、平成6年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。
5. 本書の執筆は、山本三郎、岡田章一、上山雅代が担当し、各執筆分担は目次に示した。
6. 片島1号墳の葺石の石材同定については、姫路工業大学教授石井健一氏に依頼し、所見を掲載した。また、埴輪の胎土分析については、橿原考古学研究所員奥田尚氏に依頼し、分析結果と原稿をいただき掲載した。
7. 本書の編集は山本が行った。
8. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の25000分の1地形図および龍野市発行の2500分の1都市計画図を使用した。
9. 発掘調査で出土した遺物および記録としての図面・写真類は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
10. 発掘調査および報告書作成に際し、以下の方々に指導および助言をいただいた。記して感謝申し上げます。(敬称略)
加藤史郎、岸本道昭、酒井龍一、志水豊章、須藤 宏、高橋克壽、藤原 学、松本正信、和田晴吾

本文目次

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯	(山本三郎)	1
第2節 調査の経過と組織	(山本)	3
1 発掘調査		
(1) 1978年度の調査(確認調査)	(西口和彦)	3
(2) 1980年度の調査の経過	(山本)	5
(3) 調査日記抄	(岡田章一)	6
2 整理調査	(山本)	12

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置	(山本)	15
第2節 歴史的環境	(山本)	16

第3章 発掘調査の成果

第1節 片島古墳群の構成	(山本)	19
第2節 片島1号墳の調査		
1 墳形と規模・外部施設	(山本)	21
2 埋葬施設	(山本)	28
3 出土遺物		
(1) 埴輪	(上山雅代)	29
(2) 須恵器	(山本)	41
第3節 片島2号墳の調査		
1 墳形と規模・外部施設	(岡田)	45
2 埋葬施設	(岡田)	51
3 出土遺物		
(1) 埴輪	(上山)	51
(2) 須恵器	(山本)	57
第4節 片島3号墳の調査	(岡田)	58
第5節 片島遺跡の調査——高地性集落の調査		
1 遺跡の位置	(山本)	59
2 遺構	(山本)	59
3 出土遺物	(山本)	70
4 小 結	(山本)	71
第6節 南山遺物散布地の調査	(岡田)	74

第4章 片島1・2号墳出土の埴輪砂礫	(奥田尚)	77
第5章 まとめにかえて		
第1節 片島1・2号墳の埴輪について	(上山)	83
第2節 揖保川地域の高地性集落について	(山本)	85
第3節 揖保川流域における古墳の動向	(山本)	88

挿図目次

第1図 調査地点位置図	2
第2図 片島1号墳 確認調査時の墳丘土層図	3
第3図 1978年度の墳丘測量図と調査トレンチ設定図	4
第4図 遺跡の位置	15
第5図 片島古墳群の周辺の遺跡	17
第6図 鉄ヤリ実測図	19
第7図 片島古墳群 調査区設定図	20
第8図 片島古墳群 墳丘実測図	22
第9図 片島1号墳 遺構図	23・24
第10図 片島1号墳 前方部葺石断面図	25
第11図 片島1号墳 後円部墳丘断面図	26
第12図 片島1号墳 前方部墳丘断面図	27
第13図 片島1号墳 基盤成形時の地形図	28
第14図 片島1号墳 築造時の墳丘ライン	28
第15図 片島1号墳 樹立円筒埴輪の法量分布図	30
第16図 片島1号墳 円筒埴輪実測図(1)	31
第17図 片島1号墳 円筒埴輪実測図(2)	32
第18図 片島1号墳 円筒埴輪実測図(3)	33
第19図 片島1号墳 円筒埴輪実測図(4)	34
第20図 片島1号墳 円筒埴輪実測図(5)	35
第21図 片島1号墳 円筒埴輪実測図(拓本)	36
第22図 円筒埴輪底部形態分類図	36
第23図 円筒埴輪突帯分類図	37
第24図 円筒埴輪透孔分類図	37
第25図 円筒埴輪口縁部分類図	38
第26図 片島1号墳 形象埴輪実測図(1)	39
第27図 片島1号墳 形象埴輪実測図(2)	40

第28図	片島1号墳	須恵器実測図(1).....	42
第29図	片島1号墳	須恵器実測図(2).....	43
第30図	片島2号墳	墳丘断面図(C-C'ライン).....	46
第31図	片島2号墳	墳丘断面図(D-D'ライン).....	46
第32図	片島2号墳	墳丘断面図(E-E'ライン).....	46
第33図	片島2号墳	遺構図.....	47・48
第34図	片島2号墳	円筒埴輪配置図.....	49
第35図	片島2号墳	周溝内遺物出土状況図(1).....	50
第36図	片島2号墳	周溝内遺物出土状況図(2).....	50
第37図	片島2号墳	円筒埴輪実測図.....	53
第38図	片島2号墳	形象埴輪実測図(1).....	54
第39図	片島2号墳	形象埴輪実測図(2).....	55
第40図	片島2号墳	形象埴輪実測図(3).....	56
第41図	片島2号墳	須恵器実測図.....	57
第42図	片島3号墳	墳丘実測図.....	58
第43図	片島遺跡	遺構図.....	60
第44図	片島遺跡	土層断面図.....	61
第45図	片島遺跡	1号住居址実測図.....	63・64
第46図	片島遺跡	2号住居址実測図.....	66
第47図	片島遺跡	2号住居址土層断面図.....	66
第48図	片島遺跡	段状遺構・土壌1実測図.....	67
第49図	片島遺跡	土壌実測図.....	68
第50図	片島遺跡	段状遺構・土壌1土層断面図.....	69
第51図	片島遺跡	弥生土器実測図.....	70
第52図	片島遺跡	石器実測図.....	71
第53図	南山散布地	遺物実測図.....	74
第54図	南山散布地	グリッド配置図.....	74

図版目次

- 図版1 片島古墳群・片島遺跡
（上）南上空からみた遺跡の景観
（下）南西上空から遺跡と揖西平野を望む
- 図版2 片島古墳群・片島遺跡
（上）南上空からみた片島古墳群・片島遺跡
（下）上空からみた調査後の片島1・2号墳
- 図版3 片島古墳群
（上）上空からみた調査後の片島1号墳
（下）上空からみた調査後の片島2号墳
- 図版4 片島1号墳
（上）調査前の状況（北から）
（下）調査前の状況（南東から）
- 図版5 片島1号墳
調査後の片島1号墳の側面の状況
- 図版6 片島1号墳
（上）南からみた片島1号墳の墳丘構造
（下）前方部と後円部の埴輪樹立の遺存状況
- 図版7 片島1号墳
（上）前方部の埴輪の出土状況（1）
（下）前方部の埴輪の出土状況（2）
- 図版8 片島1号墳
（上）後円部の埴輪列と上段葺石の関係（1）
（下）後円部の埴輪列と上段葺石の関係（2）
- 図版9 片島1号墳
（上）前方部葺石とくびれ部の状況
（中）前方部葺石
（下）前方部の葺石除去後の状況
- 図版10 片島1号墳
（上）後円部上段の墳丘盛土の断面
（下）後円部上段の墳丘盛土の断面と葺石
- 図版11 片島1号墳
（上）墳丘構造と流出土の関係
（中）後円部の墳丘構造と流出土の関係
（下）前方部の掘割断面と葺石と後世盛土の関係

- 図版12 片島1号墳
（上） 前方部掘削の土層断面
（中） 前方部の土層断面と葺石（1）
（下） 前方部の土層断面と葺石（2）
- 図版13 片島1号墳
（上） 前方部掘削内の須恵器出土状態（1）
（下） 前方部掘削内の須恵器出土状態（2）
- 図版14 片島2号墳
（上） 墳丘と周溝
（下） 墳丘の埴輪樹立の遺存状況と周溝内の埴輪出土状態
- 図版15 片島2号墳
（上） 周溝内埴輪の出土状態（1）
（下） 周溝内埴輪の出土状態（2）
- 図版16 片島2号墳
（上） 墳丘土層断面（1）
（中） 墳丘土層断面（2）
（下） 樹立埴輪の掘り方
- 図版17 片島遺跡
（上） 遺跡と遺構の配置
（下） 竪穴住居址の配置
- 図版18 片島遺跡
（上） 1号竪穴住居址
（下） 1号竪穴住居址の弥生土器出土状態
- 図版19 片島遺跡
（上） 2号竪穴住居址
（下） 2号竪穴住居址の土層断面
- 図版20 片島遺跡
（上） 2号竪穴住居址の壁体の矢板痕跡（1）
（下） 2号竪穴住居址の壁体の矢板痕跡（2）
- 図版21 片島遺跡
（上） 2号竪穴住居址の弥生土器と蛤刃石斧出土状態
（下） 土壙1と段状遺構
- 図版22 片島1号墳 円筒埴輪（1）
- 図版23 片島1号墳 円筒埴輪（2）
- 図版24 片島1号墳 円筒埴輪（3）
- 図版25 片島1号墳 円筒埴輪（4）

- 図版26 片島1号墳
 (上) 円筒埴輪 (5)
 (下) 形象埴輪 (1)
- 図版27 片島1号墳 形象埴輪 (2)・須恵器 (1)
- 図版28 片島1号墳
 (上) 須恵器 (2)
 (下) 須恵器 (3)
- 図版29 片島2号墳 円筒埴輪 (1)
- 図版30 片島2号墳
 (上) 円筒埴輪 (2)
 (下) 形象埴輪 (1)
- 図版31 片島2号墳
 (上) 形象埴輪 (2)
 (下) 形象埴輪 (3)
- 図版32 片島2号墳・片島遺跡
 (上) 須恵器
 (下) 弥生土器

表 目 次

- 第1表 埴輪胎土一覽表
- 第2表 埴輪の表面に見られる砂礫 (1)
- 第3表 埴輪の表面に見られる砂礫 (2)
- 第4表 埴輪の表面に見られる砂礫 (3)
- 第5表 樹立円筒埴輪の形態・法量・調整の関係

第1章 序 章

第1節 調査に至る経緯

国土開発幹線自動車道建設法に基づく山陽自動車道は、大阪府吹田市を起点とし兵庫県、岡山県、広島県を通り、終点山口県山口市を結ぶ総延長距離約426kmの高速道路である。その内、姫路市～広島県佐伯郡甘日町間の基本計画が決定されたのが昭和46年6月8日である。

昭和47年6月20日には姫路市から備前市間の整備計画を決定し、同日付をもって建設大臣から日本道路公団に施行命令が発せられた。同年12月13日に道路公団が路線発表を行った。

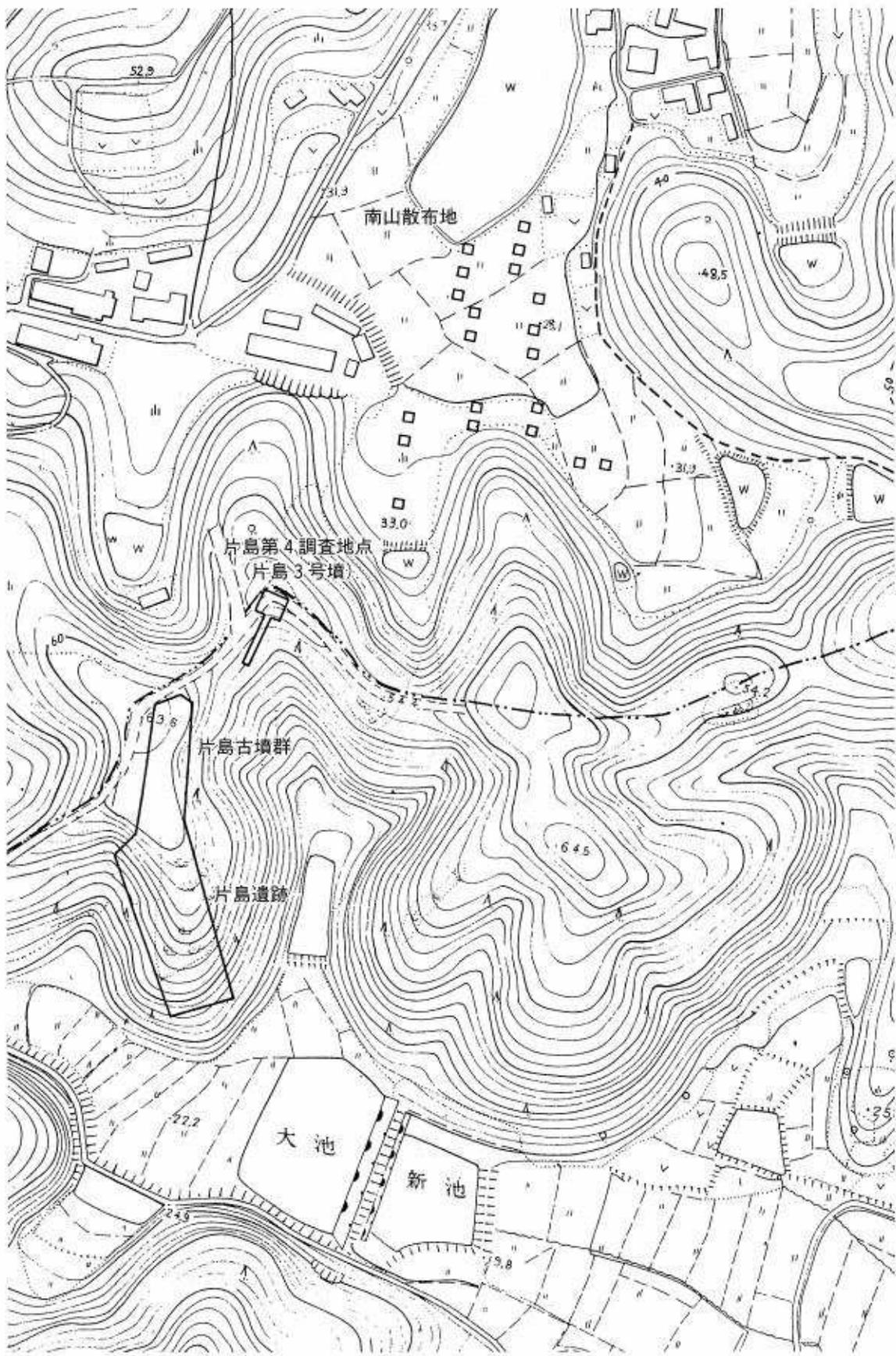
埋蔵文化財の事前の保存協議については、基本計画が発表された段階から始まっており、この年度に幅約200mの基本計画範囲内の分布調査や周知の遺跡の立会調査等を実施し、学術上、歴史上重要な遺跡が路線外に保存されるよう協議を行っている。このとき、古墳の出現を解明する上に重要な養久山墳墓群が所在する養久山山塊がまるまる基本計画の範囲内に入っており、埋蔵文化財担当者を驚かせたが、協議を行い養久山山塊の最も北側に路線をもっていくことで養久山墳墓群のほとんどが保存されことになり事なきを得た。なお、路線発表の前に埋蔵文化財の取扱いの事前協議を行っている。

路線発表後の具体的な埋蔵文化財の取扱いについては、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき道路公団と兵庫県教育委員会が事前の保存協議を行うとともに、その基礎資料となる詳細分布調査は昭和50年度以降にいくつかの区間を分けて実施してきた。分布調査は県教育委員会が県内研究者の協力を得て実施した。

今回の調査対象遺跡は、姫路市から備前市間の中でも最も早く供用開始を設定としている竜野西～備前インターチェンジ間のうち、龍野市、揖保川町、相生市の市町域の遺跡である。

揖保川町にある片島古墳群は周知の遺跡で『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』第1集（昭和43年3月刊）に、円墳6基で構成される古墳群として掲載されている。6基の古墳のうち調査の対象になるのは、片島4・5・6号墳である。とくに4・5号墳は高宗牧場（現在は南山牧場と通称）の造成時に大きく破壊され、埴輪や須恵器が採集されている。破壊を受けたところは龍野市域の部分のみであり、揖保川町域の部分のみが辛うじて残った。相生市・ツブレ池遺跡と龍野市・南山遺物散布地は、山陽自動車道予定地内詳細分布調査により新たに発見された遺跡である。

昭和53年度、用地取得等の条件が整い遺跡の確認調査を開始したのは、片島4・5・6号墳の3基と南山散布地およびツブレ池遺跡である。ツブレ池遺跡は遺構・遺物は検出されなかった。また、南山散布地（西地点）も若干の須恵器や土師器の破片の出土をみたが遺構は検出されなかった。片島古墳群では詳細分布調査の時点で、4・5号墳が前方後円墳になる可能性の指摘を受けていたが、墳丘測量や確認調査の結果から前方後円墳であると確認されたので、片島4・5号墳を1号墳と、片島6号墳を2号墳と名称を変更した。昭和55年度は、当初、片島1・2号墳の全面調査と南山散布地（東地点）の確認調査に入った。調査の進展とともに2号墳から南にのびる尾根上に弥生時代の集落跡を確認し、また、4・5号墳の北東の尾根上に半壊されていた古墳らしき高まり（第4調査地点）を認めたので道路公団とその取扱いの協議を行い、今回の調査に追加して発掘調査の対象とすることにした。



第1図 調査地点位置図

第2節 調査の経過と組織

1 1978年度の調査（確認調査）

(遺跡名)	(所在地)	(遺跡の種類)
1. ツブレ池遺跡	相生市陸字横尾	古墳状隆起
2. 南山西遺跡	龍野市南山字土師	遺物散布地
3. 片島古墳群	揖保郡揖保川町片島 龍野市南山	古墳

1. ツブレ池遺跡の確認調査

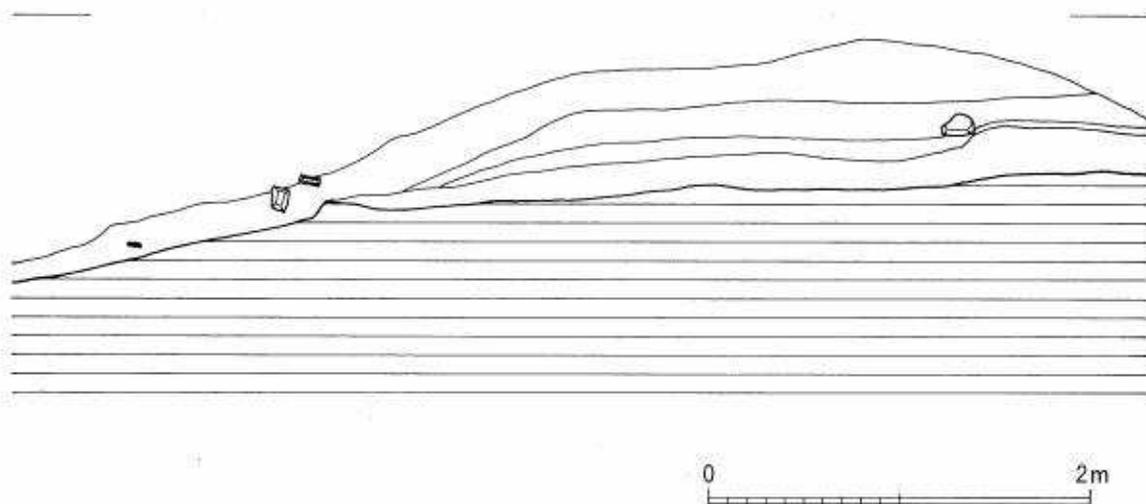
この遺跡は昭和50年度の分布調査で発見された。分布調査では、尾根上に径10mほどの古墳状隆起と称する高まりを2ヶ所認められ、古墳の可能性が高く、ツブレ池1・2号と仮称していた。

確認調査は2ヶ所の古墳状隆起の地点を中心に幅1mのトレンチを尾根上に5本設定した。長さは79m、44m、18m、10m、8mである。土層はどのトレンチも上層から順に表土層（腐食土層）、土壤化層（風化土層）、基盤層（洪積層、いわゆる地山層）と堆積しており、遺構、遺物はまったく認められなかった。調査の結果、古墳状隆起の高まりは自然の基盤層の高まりであることが明らかになった。

2. 南山西遺跡の確認調査

この遺跡昭和50年度の分布調査で発見された。分布調査では、須恵器と土師器の散布が認められた。遺跡は山麓の標高26m前後の山麓に立地し、現況は南山牧場の牧草跡地となっていた。

確認調査は遺物散布地の範囲を中心に、2×2mのグリッドを13ヶ所設定して行った。基本的な土層は上層から耕作土（第1層）、灰褐色（第2層）、黄褐色粘土の基盤層（第3層、いわゆる地山層）で



第2図 片島1号墳 確認調査時の墳丘土層図

あった。第2層には第3層の黄褐色粘土のブロックが多くのグリッドで認められた。遺物を検出したのは2, 3, 4, 7, 11の5ヶ所のグリッドであるが、いずれも細片の須恵器、土師器等で数量も僅かであり、プライマリーな包含層といえる状況ではなかった。また、遺構はいずれのグリッドからも検出できなかった。

3. 片島古墳群の確認調査

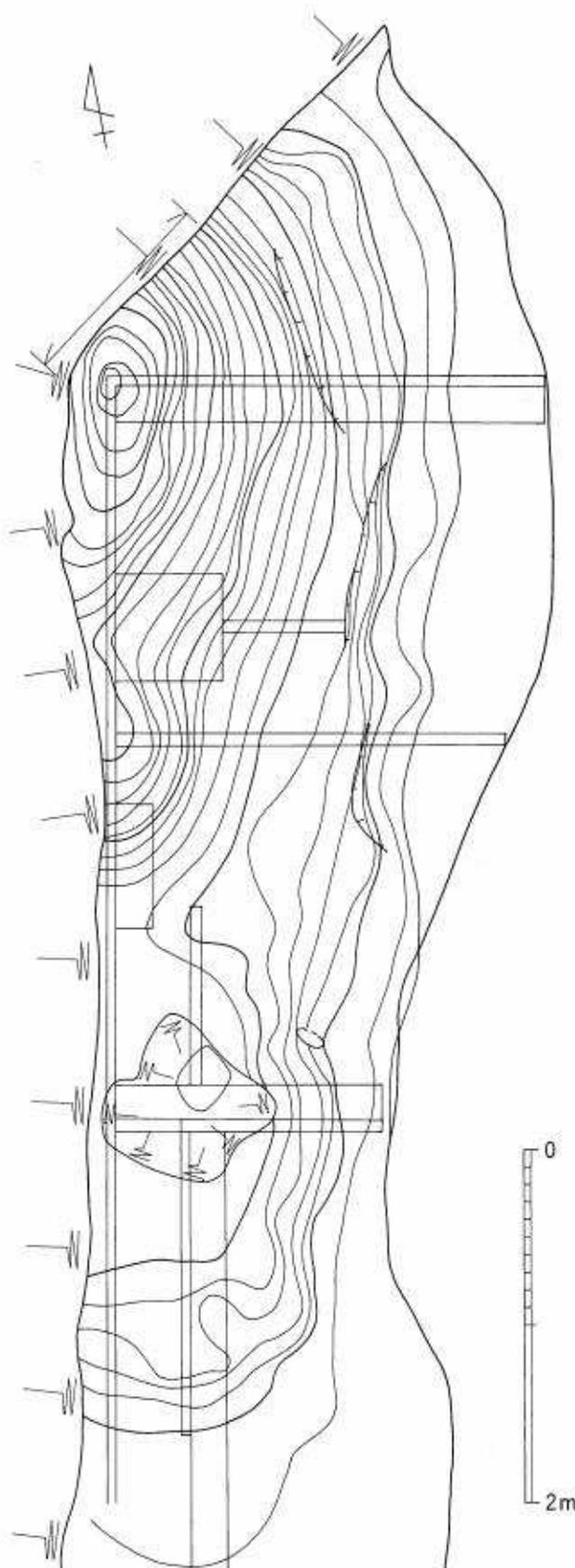
今回の、調査対象は円墳3基であったが、雑木伐採や墳丘測量を行うと5・6号墳が前方後円墳であることが明らかになった。そこで5・6号墳を1号墳、4号墳を2号墳と呼称を改めた。

調査は先ず1号墳にトレンチ5ヶ所を設定を設定して行った。各トレンチとも埴輪片を検出し、特にくびれ部付近に集中している状況がみられたが、原位置を保っているものはなかった。次いで、樹立埴輪や葺石を確認するために、墳丘全体の表土をはいでいくという調査に移った。その結果、後円部に樹立状態を保った埴輪が検出し、また、埴輪列の内側に葺石の一部も検出した。前方部のトレンチでは、須恵器片が出土した。

2号墳はその中央にあたるところに大きな盗掘坑があり、埋葬施設は破壊されているものと推定された。確認調査は2号墳に3ヶ所のトレンチを設定して調査を行った。各トレンチからは埴輪片を検出、周溝の存在も確かめられた。

確認調査の結果は、1号墳は全長約21mの前方後円墳、2号墳は径11mの周溝をもつ円墳で、いずれも埴輪を採用している古墳であることが判った。

なお、樹立埴輪の埋め戻しを行い、確認調査を終了した。



第3図 1978年度の墳丘測量図と調査トレンチ設定図

2 1980年度の調査の経過

1. 調査の経過

今年度の発掘調査は、当初の予定では、片島1・2号墳の全面調査と南山西遺跡の確認調査であったが、調査の進行の過程で、片島1号墳の南西の尾根上に古墳状隆起を認め、また、片島2号墳の南側にのびる尾根上に弥生時代の集落跡のあることがわかり、これらの確認調査と全面調査も実施した。古墳状隆起を片島3号墳、集落跡を片島遺跡と呼称しておきたい。なお、片島3号墳はこれまで片島第4調査地点遺跡と仮称していたが、本報告書で改めておきたい。

調査対象遺跡と所在地、調査面積は以下のとおりである。

(遺跡名)	(所在地)	(調査面積)
・片島1・2号墳	揖保川郡揖保川町片島 龍野市南山	480m ²
・片島3号墳	揖保川郡揖保川町片島	63m ²
・片島遺跡	揖保川郡揖保川町片島	2,000m ²
・南山西遺跡	龍野市南山	80m ²

現地の発掘調査は4月14日から開始した。14・15日は発掘器材の運搬や現場事務所のプレハブの建設などの調査準備を行った。発掘調査はまず片島1・2号墳から開始することとし、16日から片島1・2号墳の調査区設定の杭打ちと墳丘測量を始めた。1・2号墳の調査が一応の目途がたち、人手がそれほどいらなくなった4月25日から南山西遺跡の確認調査を始め、1・2号墳の精査と併行して行った。

ここで、片島3号墳と片島遺跡の発見の経緯と発掘調査に至る経過を述べておきたい。

片島3号墳は現場事務所から片島1・2号墳の現場に行く通り道にあたる場所にあり、毎日、目にしているとどうも古墳のように見え、かってここから須恵器の細片を採集したという情報もあり、トレンチによる確認調査を行うこととした。トレンチ調査の結果、幅約70cmの周溝が検出したので遺存している古墳の全面調査を行った。

片島遺跡は南山西遺跡の確認調査も終わり、片島1・2号墳も精査や実測などが主な作業としてのこの段階になり、調査中から地表面に人工的に手をいれられたかも知れないと気になっていた片島2号墳の南側にのびる尾根上に幅1mのトレンチを設定し、確認調査を行うことにした。片島遺跡の確認調査は5月23日から始めた。トレンチの延長は約55mにおよび、竪穴住居址や土壙などの遺構と弥生時代中期の土器が出土し、弥生時代の高地性集落になることが明らかになり、全面調査が必要になった。全面調査の面積は、尾根頂部の2,000m²の範囲が対象になるが、今回の発掘調査に引き続き行うこととし、発掘調査期間を延長して行った。

片島遺跡の全面調査の期間中、2号竪穴住居址から出土した弥生中期の器台形土器と蛤刃石斧が盗難に遭うという事件が起きた。状況は2号竪穴住居址を精査し、ほぼ完形の器台形土器と蛤刃石斧が出土し、清掃して部分写真を撮影した段階で、土・日曜の現場の休みになり、次週から調査のためにシート等で遺構の養生を行い現場を離れた。事件は7月前半の土・日曜日の何者かによって盗難に遭い、その事実を発見したのは、月曜日であった。すぐに上司と報告し、被害届を警察に出すかどうかを相談した

が、天日のもとでオープンに調査していること、土日に警備員の配置のないことなど教育委員会の現場管理体制も充分でなく、その時点でこれ以降それらの条件の整備を求められても教育委員会や当時の発掘調査のおかれている状況がそれらを可能にする条件がないなどのことを勧告して断念したが、地元教育委員会の文化財担当者や関係者に事情を話し、その探索に努めたが遺物はとうとう出てこなかった。いずれの遺物も骨董的価値があるものとはみられないので、その犯人もそれ程悪質な者とも思えないと言う教育的配慮も被害届を出さなかった理由のひとつでもある。

そのような事件もあったが、とりあえず現地の発掘調査は8月1日に無事終了した。

2 発掘調査日誌抄

4月15日(火) 天候 曇り時々晴れ

昼前にプレハブ設置開始。

4月16日(水) 天候 晴れ後雨

机、ロッカー着。プレハブ内の整理。午後より杭打ち及び地形測量開始。

-100cmラインを測量後雨のため作業中止。

4月17日(木) 天候 晴れにわか雨

午前中地形測量。正午前雨のため作業中止。一昨年のトレンチ調査の残土が捨てられているため元の地形の復元が難しい。

4月18日(金) 天候 曇り後晴れ

古墳周辺の道作りバルコン・ゼネレーターを設置。テントの設置。

4月22日(火) 天候 晴れ

各グリッドの設定。墳丘の表土はぎ作業。円墳輪列の検出。午前、北側の前方後円墳を片島1号墳、円墳を同2号墳と仮称し北側よりⅠ～Ⅲ区、円墳の東Ⅳ区西側をⅤ区とする。Ⅱ区から表土はぎを開始する。Ⅱ区では円筒埴輪が廻りその上に列石が廻るのが確認された。また、Ⅲ区では墳丘裾で埴輪片と須恵器の細片がかたまつて検出された。(祭祀跡か)。2号墳でもⅣ区・Ⅴ区で埴輪列が検出された。

4月23日(水) 天候 晴れ

1・2号墳西側の崖面の草刈り。1・2号墳東側の残土処理。Ⅲ区の埴輪片・須恵器片の検出。Ⅰ区・Ⅱ区の埴輪列・列石の検出。Ⅰ区南端にセクションに沿うトレンチを設定し地山面まで掘り下げる。Ⅰ・Ⅱ区の円筒埴輪列及び列石の検出を行った結果、Ⅰ区でも列石が廻っていることを確認。

Ⅰ区は埴輪列と列石の関係を把握できた。列石から外側に平坦面を幅50cmをつくる。その外側に埴輪を接して樹立する。埴輪は連続の掘方で1番目タガ付近まで埋め込んでいる。さらに埴輪列から外側をトレンチで調査すると、流土の中に埴輪片が多く混入していることがわかった。埴輪片と土層をたよりに流土を除去すると地山に近い層が認められた。

4月24日(木) 天候 晴れ 西の風強し

1・2号墳東側の排土の除去。1号墳、Ⅰ・Ⅱ区の埴輪列下(東側)の流土の掘り下げ。1号墳Ⅰ区Bの埴輪の精査。Ⅰ・Ⅱ区の埴輪列より下側の流土を除去する。流土は埴輪列の東側に暗褐色土が堆積し埴輪片・須恵器片が多数含まれている。さらにその東側は黄褐色土(地山土)が堆積するが埴輪片等の出土は大変少ない。なお、Ⅱ区を北側よりC・D・Eの3区に細分する。D区では埴輪列が西側に廻るように樹立されており、流土を除去した結果いかんで1号

墳が前方後円墳か否かの結論ができるものと思われる。また、I区B南側の埴輪列の精査をした結果、列石と埴輪列の関係が把握できた。列石から幅50~60cmの平坦面を作りその外側に溝状の掘方を掘って埴輪を樹立している現在、埴輪は2段目のタガの部分まで流土によって埋没しているが地山面は1段目のタガの部分にある。

I区の南側セクションにて列石と平坦面及び埴輪の関係が把握できた。埴輪列の西側は2段目タガまで埋没し、埴輪の東側は1段目タガまで埋没している。このことは埴輪列の掘方の高さが埴輪列の東西で異なる結果を招いている。埴輪の視覚的なものとすれば理にかなった樹立方法である。I区II区とも昨日は1段目斜面と仮称した地山の土層に暗茶褐色層を呈する流土があり、この部分に細片となった埴輪片が多い。基本的な層位を示す。なお、II区の中央部(D区)には現在まで、II・III層とも埴輪はI区(AB区)II区(C区)程多く認められなかった。

4月25日(金) 天候 晴れ

前田池南側の水田の確認調査。午前、古墳の調査を一時中断し、前田池南側の水田の確認調査を行う。調査範囲は前田池南の水田5筆であるが、未買収地である1筆を除く4筆について2m四方の坪を設定。坪は公団設定の杭に平行に2列にはほぼ10m間隔で20箇所を設定し、内6箇所について掘削を行った。坪の層位は上層より耕土・床土・灰色土・暗灰色粘質土・青灰色粘土(地山)の順に堆積し、暗灰色粘質土中より須恵器・土師器の細片を出土している。

4月30日(水) 天候 雨

雨のため屋外作業を中止する。

5月1日(木) 天候 晴れ

南山散布地の確認調査。最も北側の前田池に

隣接する水田は水が入り込んで調査できない状態である。北側より2枚目の水田にグリッドを5つ設定し先週に引き続き掘削を継続する。

5月2日(金) 天候 晴れ

南山散布地の確認調査。北側より2枚目の水田に設定した5つのグリッドの掘削をほぼ完了し、4枚目の水田に設定したグリッドの掘削にとりかかる。第IV層に相当する黒灰色の粘土中より糸切り底の須恵器片・土師器片等を出土するが、古墳時代のものと思われる須恵器も含まれており、時期的にはかなりのばらつきがある。また、岡田・中村は片島1号墳I区円筒埴輪列の精査を行い、列石と埴輪間の平坦面及び埴輪の掘方上面までの検出を行う。

5月6日(火) 天候 曇り後晴れ

南山散布地の確認調査。午前、南山散布地の各グリッドにグリッドNoを記入する。最も北側の水田のものを1~6G、2枚目の水田のものを7~11G、4枚目のものを12~17G、5枚目のものを18~20Gとする。午前中に7~11Gについて清掃を終わり写真撮影に備える。午後、7~11Gについて西壁の断面を35mmモノクロ・リバーサルにて撮影する。

5月7日(水) 天候 晴れ

午前、昨日に引き続き7~11Gについては実測を、12~17Gについては写真撮影をそれぞれ行う。また14~16Gについてはまだ掘り足りない箇所があるので掘り下げを行う。午後、7~11Gについて断面実測を行う。層位は基本的には耕土・床土・黄褐色流土・黒灰色粘質土・青灰色粘土の順に堆積が見られ、8G・9Gでは黒灰色粘質土と青灰色粘土との間に灰色砂礫層の堆積が見られる。遺物を包含するのは黒灰色粘質土層で谷間にあるところから西側と東側では薄く、中央部では50cm以上にわたって厚く堆積



している。

5月8日(木) 天候 曇り後雨

南山坪掘りを継続。午前、14~20Gについて掘り下げを継続する。20Gについては上層より耕土・床土・客土(黄褐色土)・黒灰色粘質土・青灰色粘土の順に堆積し、他のグリッドでもほぼ同様の堆積が見られる。午後、12~17Gについて断面実測、写真撮影。18~20Gについては午前中に引き続き、掘り下げを継続。午後4時頃より降雨が激しくなり作業中止。

5月9日(金) 天候 雨

雨のため屋外作業は中止。

5月12日(月) 天候 晴れ

片島1号墳2区の精査と9区・10区の表土及び流土除去。南山散布地のグリッドの図面とトレンチの調査。

片島1号墳2区-D-aの埴輪列の検出及び流土の除去。埴輪の樹立状況はI区と変わらない。後円部から前方部に移るくびれの部分は以下の形態になると考えられるが不明なところも多い。なお、2区-D-aのI段目斜面の流土中に多く転落した埴輪の細片が多く含まれていた。また、2区-D-b・2区-D-cに須恵器、形象埴輪が多いのに対して2区-D-aに

はそれらが極めて僅かしか認められなかった。

流土は基本的に3層に分かれる。1層は現表土、2層は暗黄褐色、3層は暗褐色土(古墳築造後形成された表土面)。3層上面で比較的多く埴輪片の転落が認められた。

2区D-bの精査。前方部に葺石を検出した。なお葺石のb部の流土にも須恵器片が認められた。葺石下の流土から多くの須恵器及び埴輪片をなお若干の調査。

5月13日(火) 天候 晴れ

2区葺石の精査と2区-D-b、2区-D-cの流土除去。C形象埴輪出土状況写真。9区-D、1区-Cを岡田が実測。セクション除去南山散布地のトレンチ調査。

5月14日(水) 天候 晴れ

2区-Cの埴輪列の調査。2区-D-c、2区-D-bの葺石の清掃とくびれ部の流土除去3区-E・F(前方部)の調査。

3区-E、3区-Fの調査。II区の前方部で認められた葺石の一部が検出できると考えていたが、明確には検出できず、とりあえず流土を除去。須恵器・埴輪多数。なお、前方部の基底明確ならず。片島1号墳2区-D-a~cの精査、2号墳4~5区の表土はぎ作業。午前、南山散布地のAトレンチについては、掘り下げを継続する。基本的には第III層・第IV層の2層に分け遺物のとりあげを行う。1号墳2区a~cについては、墳丘上に堆積するバイラン土が墳丘の盛土であるのかあるいは後世の堆積か明らかでないため西側崖面をさらに精査。

5月15日(木) 天候 雨

雨のため現場作業は中止。

5月16日(金) 天候 曇り後晴れ

南山散布地Aトレンチの掘削。片島1号墳3

区の精査及び2号墳4～5区の表土はぎ作業。
片島1号墳の前方部に堆積するバイラン土については一昨日より墳丘の盛土かあるいは後世の堆積土か検討していたが、西側崖面を精査した結果、バイラン土下層の細かい砂層の上面で埴輪が検出されたため後世の堆積土であることが判明した。午後、3区についてバイラン土の除去を行う。2号墳4～5区については表土及び流土の除去。

5月19日(月) 天候 快晴

南山散布地Aトレンチの掘削。片島1号墳・2号墳の精査。片島1号墳3区の須恵器の散乱する部分について、西側については須恵器片の位置をそのまま残し清掃を行う。午後、2区-D-a～cの墳丘部の後世の盛土の除去を行う。また、2号墳6～7区の裾部の表土はぎ作業も平行して行う。

5月22日(木) 天候 豪雨

雨のため現場作業中止。

5月23日(金) 天候 快晴

南山2号墳南の尾根上に尾根に沿って東西にトレンチを設定。また、1号墳北の丘陵にも南北にトレンチを設定する。1号墳3区の須恵器群・埴輪群のとりあげ及びその下の流土の除去、2・3区境の畦南壁の清掃及び断面実測準備。1号墳北のトレンチは丘陵頂部溝状の落ち込みが見られる。1号墳3区の須恵器群・埴輪群の位置及びレベルを記録した後、とりあげを行う。午後、3区-B-a bの2箇所について流土の除去。また、3区と2区の境の東西畦について断面実測準備。

5月26日(月) 天候 雨

雨のため現場作業は中止する。

5月28日(水) 天候 晴れ後曇り

1号墳北壁(1・2区の境)の写真撮影及び断面実測。1号墳Cセクション東壁の写真撮影及び断面実測。

5月29日(木) 天候 晴れ

片島2号墳4・5区周溝の検出。片島2号墳6・7区周溝の掘り下げ。片島1号墳3・10区周溝の遺構面の精査。片島1・2号墳の周辺整備。片島2号墳中央の攪乱墳の掘り下げ。午前、2号墳4・5区の周溝の検出を行う。4区では周溝内に堆積する暗赤褐色の流土中より埴輪の出土が見られる。5区では北側に比べ南側には遺物の包含は少ない。6・7区の周溝内からも同様に埴輪片の出土が見られる。午後、2号墳に掘られた攪乱墳内にはバイラン土が多量に堆積し、深さは少なくとも1.5m以上に達するものと思われる。バイラン土中には全く遺物は含まれない。

5月30日(金) 天候 曇り

片島2号墳4・5区周溝内の埴輪群の検出。片島2号墳6・7区周溝の清掃。片島2号墳東西畦(東側)の写真撮影及び断面実測。片島2号墳南北畦(南側)の写真撮影。1・2号墳の周辺整備。2号墳中央の攪乱墳の掘り下げ。午前、昨日に引き続き2号墳4・5区周溝の掘り下げを行う。5区北側では埴輪・須恵器片を多量に含む暗赤褐色の流土の堆積が見られるが、南側には見られず埴輪片・須恵器片も殆ど見られない。写真撮影のため破片をそのまま残して清掃。午後、2号墳6・7区の周溝の清掃を行い清掃終了後、東西畦(東側)南壁の写真撮影・断面実測を行い、その後、南北畦(南側)東壁の写真撮影を行う。

6月2日(月) 天候 雨

雨のため現場作業は中止。

6月3日(火) 天候 晴れ

2号墳周溝内の埴輪の清掃。2号墳東西畦・南北畦の南側畦の断面図作成及び撤去。1号墳埴輪列の水洗い。北側畦については埴輪片の掘り出しを行い写真撮影のためこれを水洗いする。午後、1号墳埴輪列の掘り下げ、写真撮影に備えて水洗い。

6月4日(水) 天候 晴れ

2号墳南北畦の北側畦の写真撮影・断面実測及び撤去。2号墳墳頂部の堆積土の除去。これはやや赤っぽい褐色土で遺物は包含しておらず、恐らく後世に人為的に盛り上げられたものと思われる。この堆積土を除去した結果、墳頂部はかなり広い平坦面を呈していたことが分かった。明日の航空写真撮影に備えて1・2号墳の清掃実施。乾燥した土埃が地面に粉のようにふりかかり作業が捗らない。

6月5日(木) 天候 快晴

1・2号墳の航空写真の撮影。2号墳全景写真及び1号墳葺石の写真撮影。午前、2号墳南側の清掃を行う。10時半頃から約30分間にわたって航空写真を撮影する。午後、2号墳の清掃を少し行い、東側より2号墳の全景写真を撮影する。

6月6日(金) 天候 晴れ

1号墳の写真撮影。1・2号墳の実測に備えて割り付け。2号墳南側の尾根上のトレンチの掘り下げ。午前、2号墳尾根上に設定したトレンチの中央部より東側で円形に廻る住居址らしき遺構が検出された。覆土中には弥生土器片(4様式)が数片検出され、恐らく弥生の住居址であろうと思われる。このため、とりあえずトレンチを南側に住居址付近のみに限って拡張することにし、表土はぎ作業を行う。また、1号墳については、昨日準備したように、南側より写

真撮影を行う。午後、引き続きトレンチ拡張区の表土はぎ作業を継続。表土中からは数片の須恵器片を除いて殆ど遺物は出土せず。また、1号墳後円部の円筒埴輪列の一部(1・2区畦付近)を西側より写真撮影する。撮影終了後、実測用の杭打ち実施。杭は南北に5m間隔・東西に5m間隔でそれぞれ打ち込み実測の基準杭とする。

6月9日(月) 天候 雨後曇り

午前、雨のため現場作業中止。午後、1・2号墳の割り付け実施。先週設定した赤杭に従って1m方眼に割り付けを行う。

6月10日(火) 天候 曇り時々晴れ

2号墳南地区の掘り下げ。1・2号墳の割り付け。午前、先週2号墳南側の尾根上に設定したトレンチで弥生時代のものと思われる住居址が確認されたため、尾根の全面にわたって調査を行うことにした。本日より発掘区の設定及び中央付近に東西・南北方向にそれぞれセクションを残し掘削を開始する。表土中からは殆ど遺物は出土していない。午後、佐藤・三好・岡田の3人は昨日に引き続き1・2号墳の割り付けを行う。7時過ぎ、韓国中央博物館の韓氏・大阪市博の文殊氏・太子町の三村氏来訪。

6月11日(水) 天候 曇り後晴れ

1・2号墳の実測。2号墳南尾根の掘削。

午前、2号墳南尾根の掘削を継続する。調査区の全域にわたって表土はぎを行うが、遺物の出土は殆ど見られない。三好・佐藤・岡田の3人は1・2号墳の実測にとりかかる。三好・佐藤は1号墳前方部の葺石の実測を、また岡田は2号墳4・5区の周溝内の埴輪片の実測を行う。午後、午前中の作業を継続する。2号墳南尾根では今のところ遺構は検出されていない。

6月12日(木) 天候 晴れ

2号墳南尾根の掘削。1・2号墳の実測。午前、2号墳南尾根の表土はぎ作業を継続する。表土下より土器片が数点出土。また、1号墳北側の丘陵上に設定したトレンチで検出された溝状遺構は精査した結果、浅い落ち込み(深さ10cm程度)で遺物の出土は見られない。午後、佐藤・岡田は午前中から実測に専念。佐藤は前方部の葺石の実測を、岡田は2号墳周溝内の埴輪片の実測をほぼ終了する。本日、中村氏調査に参加。

6月13日(金) 天候 晴れ

1号墳前方部の葺石・埴輪列の実測。2号墳埴輪・周溝の実測。2号墳南側尾根部分の表土はぎ作業。11時頃姫路工業大学の石井健一氏、石材鑑定のため来訪される。葺石・列石に使用された石材は付近で採集されたチャート・砂岩等であるらしい。

6月16日(月) 天候 曇り後晴れ

1号墳葺石・埴輪列の実測(佐藤)。2号墳埴輪・周溝の実測(岡田)。2号墳南側尾根部分の掘り下げ(片島弥生遺跡)。午前中ではほぼ2号墳の実測を終了する。午後、1号墳の実測を継続する。図に示す通り発掘区を4区に区分しⅠ～Ⅳ区とする。Ⅱ区の東側部分の表土はぎ作業を中心に作業を進める。

6月17日(火) 天候 晴れ後曇り後雨

1号墳後円部葺石・埴輪の実測。

2号墳南側尾根(片島弥生遺跡) 1号住居址の掘り下げ及び1号住居址東側尾根の精査(遺構検出作業)。2号墳南側尾根で検出された住居址(1号住居址)の検出を行う。住居址は西側部ではかなり明確に範囲をとらえうるが、東側部では削られており明確ではない。覆土は暗黄褐色の粘質土である。ほぼ東西にセクションを

残し掘り下げる。午後、1号墳の実測を継続する。午前中の作業の結果に基づき、1号住居址の掘り下げを始める。南端部分で暗黄褐色の覆土中より埴輪片を検出する。上記の作業と平行して1号住居址東側部分(Ⅰ区)で遺構の検出作業を行う。その結果発掘区の南西隅で住居らしき遺構(住居址2)と土壌(土壌1)を検出する。両者とも覆土中に少量の土器片を含んでいる。

6月18日(水) 天候 雨

雨のため現場作業は中止。土器の復元などを行う。午後、雨があがったので、1号墳の平板測量を行う。1/100scale 20cmコンターで、ほぼ本日で1号墳の測量を終える。

6月19日(木) 天候 曇り後晴れ

2号墳南側尾根部(片島弥生遺跡)の1号住居址の掘り下げ。1号住居址西側部分(Ⅱ区)の表土はぎ作業。1号墳・2号墳の平板測量及びレベルの記入。2号墳の平板測量終了後、1/10scaleにレベルを記入する。

6月20日(金) 天候 雨

雨のため現場作業は中止する。午前、9時過ぎ頃から雨が一時小降りになったので、1・2号墳の埴輪のとりあげを行う。1号墳上段埴輪列では1番目タガより以下の土は埴輪樹立に際して埋め込んだらしくしっかりとしている。1段目タガ付近においてその上部と下部の土は相違する。上部は腐植土を含んだ暗褐色の土である。下部は明褐色を呈し埴輪樹立に際し、埴輪の安定のために埋めた可能性がある。また、埴輪の底部には小礫が付着している。1号墳埴輪列E22では1段目タガ下部に欠損のあるまま樹立されている。E21はE22よりさらにひどい状態で1段目タガ以下が欠損している。1号墳では底部に小礫付着する埴輪が大部分である。ま



た、掘り方の深さにもかなりの差異があり、溝状の掘り方に樹立したものか、個々に円形の掘り方を掘ったものか現在のところ不明である。

6月23日(月) 天候 曇り後晴れ

2号墳周溝内の埴輪片のとりあげ。弥生遺跡Ⅱ区の1号住居址の掘り下げ及び住居址西側部分の掘り下げ。1号住居址では、その北側で覆土中より土器片が出土している。住居址の西側部分では現在のところ遺構らしきものは見つからない。埴輪片は周溝内に堆積した暗赤褐色土中に含まれており、かなり厚く堆積している。また、2号墳の埴輪列No1については北側から断面写真を撮影するため東西方向に掘り方の断ち割りをを行う。

6月24日(火) 天候 晴れ

2号墳埴輪列No1の写真撮影及び実測。片島

3 整理調査

整理調査は、日本道路公団大坂建設局と兵庫県教育委員会が委託契約を行い、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成6年度に実施した。

水洗いとネーミングは終了していたので、接合・復元作業から初め、遺物実測、遺構図の補正、トレース、レイアウト等を行った。

整理作業は、主に整理技術嘱託員で行った。全般的な進行は、主任技術員の八木和子が行い、埴輪の

弥生遺跡Ⅱ区1号住居址の掘り下げ及びⅠ区の表土はぎ作業。午前、弥生遺跡Ⅱ区1号住居址の掘り下げを行う。住居址の北側部分で土器片を検出する。Ⅰ区の遺構の検出を行った結果、方形の住居址(2号住居址)を検出する。午後、2号墳埴輪列No1の掘り方を東西に断ち割り、断面の写真撮影及び実測を行う。

6月25日(水) 天候 晴れ

弥生遺跡Ⅱ区1号住居址の掘り下げ。Ⅰ区2号住居址の掘り下げ及び遺構の検出。午前、Ⅱ区1号住居址の掘り下げを継続する。住居址の南側部分に柱穴を検出。また、内側に周溝が認められる。平行してⅠ区で検出した2号住居址の掘り下げを進める。住居址の西端で土器片を検出。午後、Ⅰ区の遺構の検出を行った結果、2号住居址の東及び西側で住居址らしき遺構を検出する。西側のものは輪郭を現在のところつかんでいないが、東側のものはほぼ方形の住居址と思われ、東側部分は明瞭ではない。

6月26日(木)～8月1日(金)

これ以降現地の発掘調査は8月1日まで行っているが、調査日誌を亡失しており、具体的な発掘内容を報告できない状況である。これ以降の主な作業は1号墳の墳丘構築過程を調べる調査と片島弥生遺跡の調査を行っている。

整理、実測は日々雇用職員の上山雅代が担当し、弥生土器の実測は八木和子が、須恵器の多くの実測は岡村真理子が行った。トレースは図化技術員の小山みゆき、西海奈津子、井内ゆりが行い、他にも前山三枝子が行った。

この整理作業中の、平成7年1月17日、阪神・淡路大震災が発生し、当事務所の所在する神戸市とその周辺に甚大な被害を与えた。このため、当遺跡に関わる遺物・図面類にも若干の被害を受け、混乱したが、他の機関に比べれば激震地の中にありながら大した被害ではなかった。

職員や嘱託員の住居の損傷や交通機関の寸断という困難な状況のもと、主管課の日常業務を続行するようにという指示のもとにか割り切れないものをもちながら、整理作業は続行された。

4 調査の組織

昭和53（1978）年度 — 確認調査 —

社会教育・文化財課

課	長	林	五和夫
参	事	田	中 幹 雄
副	課	道	畑 實
		河	合 幸 一
係	長	堀	洋
係	員	山	崎 桂 子
課	長 補 佐	久	保田 幸 雄
埋	蔵文化財係長	村	上 絃 揚
調	整 担 当 係 員	山	本 三 郎
調	査 担 当 者	西	口 和 彦
		大	平 茂

昭和55（1980）年度 — 確認・全面調査 —

社会教育・文化財課

課	長	藤	和 重 喜
参	事	田	中 幹 雄
副	課	道	畑 實
		河	合 幸 一
係	長	堀	洋
係	員	山	崎 桂 子
課	長 補 佐 兼	池	田 義 雄
埋	蔵文化財主査	大	村 敬 通
調	整 担 当 係 員	吉	識 雅 仁
調	査 担 当 者	山	本 三 郎
		岡	田 章 一

平成6（1994）年度 — 整理調査 —

埋蔵文化財調査事務所

所	長	池	水 義 輝
副	所	渡	辺 清
副	所	三	木 正 則
主	任 調 査 専 門 員	大	村 敬 通
総	務 課 長	石	井 守
課	員	飯	尾 彦 人
調	査 専 門 員	山	本 三 郎
	(整 理 普 及 班 長)		
整	理 調 整 担 当 主 査	吉	識 雅 仁
整	理 調 整 担 当	甲	斐 昭 光
整	理 担 当		
調	査 専 門 員	山	本 三 郎
主	査	岡	田 章 一

第2章 遺跡の位置と環境

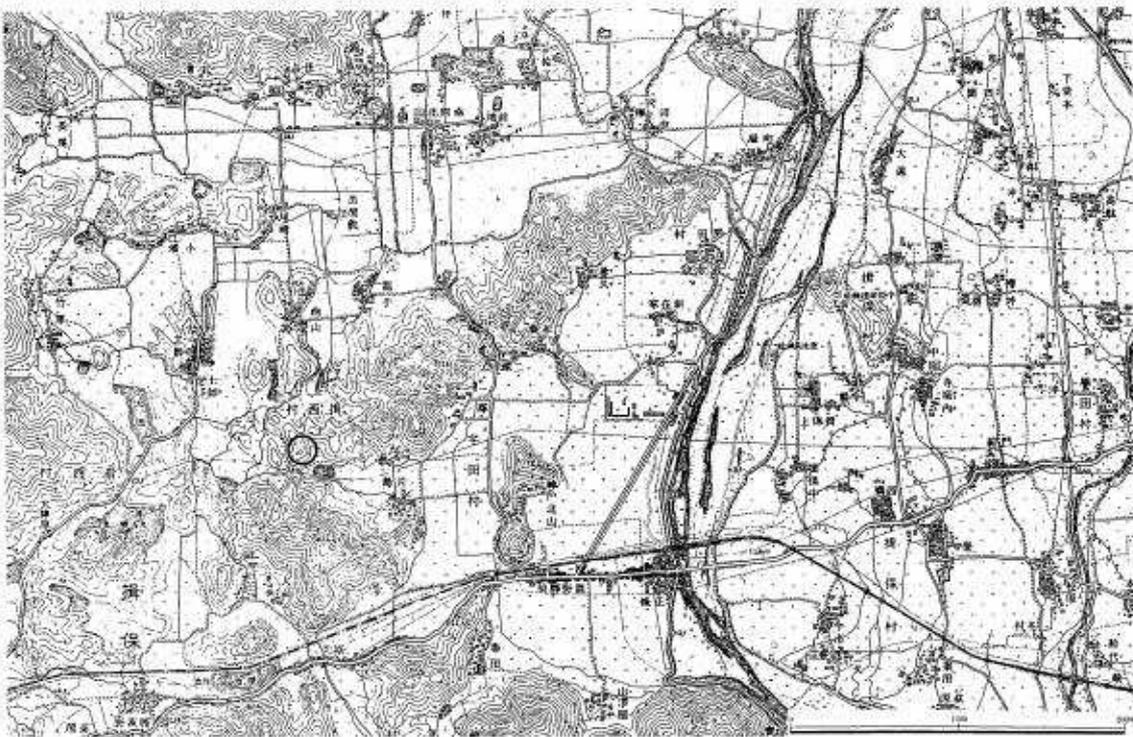
第1節 遺跡の位置

片鳥遺跡・片鳥古墳群のある龍野市・揖保郡揖保川町は、兵庫県南西部に位置している。現行政地名をみれば、片鳥遺跡が揖保郡揖保川町片鳥に所在し、片鳥古墳群は揖保郡揖保川町片鳥と龍野市南山にまたがって所在している。

地理的な環境からの視点で見れば、揖保川下流右岸域にあたる。近世には揖保川を境に揖東郡と揖西郡に分かれており、揖保川下流右岸は揖西郡にあたる。この郡には、南西から北東方向に走る起伏量100m前後の幾つかの丘陵によって平野部が区切られている様相を呈している。

当遺跡の立地する丘陵も揖保川と中垣内川の支流である古子川に挟まれた南西から北東方向に走る起伏量100m以下の小起伏丘陵の南西に位置する。この丘陵の北側が通称揖西平野と呼称され、南側に展開する平野を近世の半田村を借用して「半田平野」と仮称しておきたい。この丘陵には北東に養久山墳墓群・養久山古墳群が、中央には龍子三ツ塚古墳群が、南西に当片鳥古墳群が築かれている。いずれも、半田平野の集団が築いた墳墓群・古墳群とみられる。

古代律令制下では揖保川町片鳥は、「和名抄」の播磨国揖保郡神戸郷にあてられるとみて間違いないが、「播磨国風土記」のどの「里」に相当するかは明確にできないが、「萩原里」あるいは「浦上里」にあたるのではないかと推測されるが、「萩原里」の方が可能性が高いとみておきたい。



第4図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

片島遺跡は弥生時代中期後半の高地性集落であり、片島古墳群は古墳時代中期後半から後期初頭に築かれた古墳群である。以上を踏まえ、揖保川下流域の両時代の集団関係のことを概略していく。

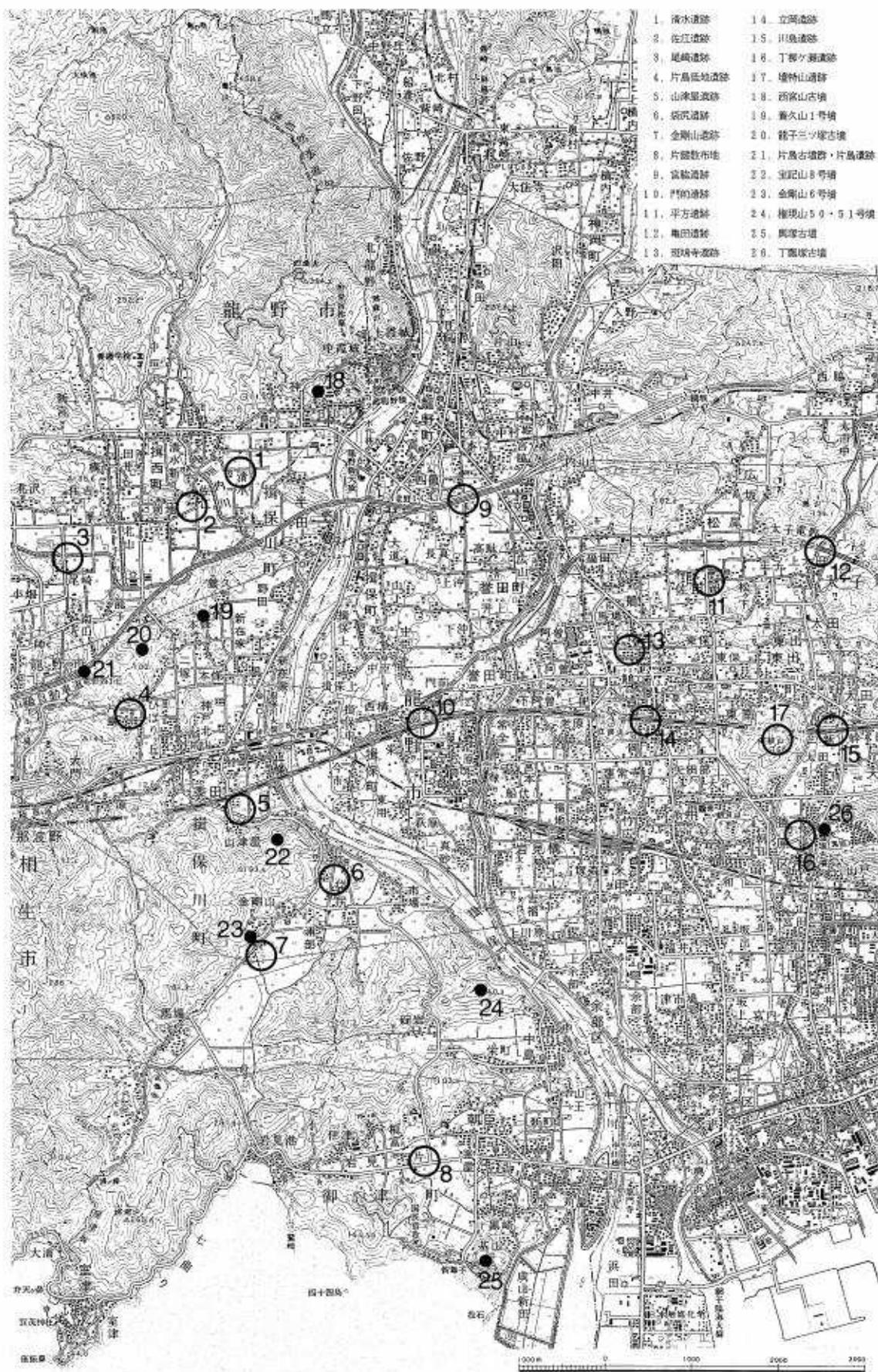
当遺跡は揖保川下流域右岸にある。下流域右岸の平野の単位を地形的にみれば、丘陵によって区切られる低地が4ないし5と捉えられる状況である。北からみれば、前述した揖西平野であり、その南にある半田平野である。その南に現集落でいえば揖保川町袋尻や浦部がある低地であり、「播磨国風土記」にいう「浦上里」の地域にあたるであろう。その南に礎岩や中島の集落がある低地であり、さらに南の御津町・朝臣の低地であり、この両者は「和名抄」にいう「余部郷」に相当するとみられる。この捉え方があたっていれば、この時代揖保川は今よりさらに東側を流れていた可能性が高い。この結果、自然的・地形的なまとまりでみれば4小地域の単位が読みとれる。

稲作を主要な生産基盤とする初期農耕社会である弥生時代の拠点集落は、低地おもに沖積平野に立地することが初期農耕の技術段階から基本形であると認識している。このように認識すれば、揖保川下流域右岸には、地形的条件から農業共同体的結合を成し遂げたとみられる集団が4地域設定される。

現在、これらの単位地域のなかで、弥生時代の拠点集落が窺い知れるのは揖西地域の清水・佐江両遺跡と半田地域の片島低地遺跡である。なお、半田地域は山津屋遺跡も拠点集落になる可能性がある。後の2地域の拠点集落は明確でないが、河内地域では袋尻遺跡や金剛山遺跡が、御津地域では片鍵散布地がその候補の遺跡となりえるかも知れない。

揖保川左岸地域は、右岸地域のように地形的なまとまりから基礎地域を指摘することは困難であるが、この地域も判明している弥生遺跡の実態から4つほどの基礎地域が認められる。下流からみれば、川島・丁柳ヶ瀬の両遺跡は揖保川という酒井龍一のいう広域システムの大規模な拠点集落と捉えてまず間違いないであろう。瀬戸内海路を通じた外からの文物はこの集落を経由してしか揖保川流域の各弥生集落にはいきわたらない地理的位置を有しており、遺跡内容がそのことを表している。次には、大津茂川と林田川に挟まれた斑鳩寺・立岡の両遺跡が拠点集落を形成しているであろう。これが左岸地域の2つ目の基礎地域である。その北に平方遺跡を拠点集落とする3つ目の基礎地域がある。この地域では亀田遺跡も拠点集落に成りうる遺跡の内容を示している。4つ目の地域は林田川と揖保川に挟まれた平野であり、官脇・門前両遺跡の範囲が示す地域、律令制下の揖保郡衙があったと推測できる地域である。

揖保川流域の古墳のあり方をみれば、播磨地域の中でも古墳時代前期の前方後円（方）墳が多く集中しており、なかでも前期前半の最古期の前方後円（方）墳が集中していることが特徴の第一に挙げられる。第二の特徴としては、中期の大型古墳が築かれていないことであり、第三の特徴としては下流域に有力な古墳が集中していることである。第一の中身をみると、100mクラスの丁瓢塚古墳を筆頭に、50mクラスの権現山51・52号墳、30mクラスでは養久山1号・金剛山6号墳・宝記山8号墳・吉島古墳等がヒエラルキシュな構成を採って出現している。前期後半にはこの関係が解体したとみられ、臨海性の奥塚古墳が外からの力で築かれると、前期後半の古墳としては30クラスの籠子三ツ塚1号墳が目立つ程度である。この地域に、再び前方後円墳が採用されるのは、横穴式石室を内部主体とする全長34mの西宮山古墳の後期中頃であり、片島古墳群はその間に築かれた古墳群と言える。



第5図 片島古墳群の周辺の遺跡

参考文献

- 角川日本地名大辞典編纂委員会編 『角川日本地名大辞典』28 兵庫県
吉田東悟 1980 『増補大日本地名辞書』(復刻版)
龍野市史編纂専門委員会編 1984 『龍野市史』第4巻
龍野市史編纂専門委員会編 1978 『龍野市史』第1巻
石野博信・榎本誠一・山本三郎ほか 1971 『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会
岡崎正雄・深井明比古・種定淳介ほか 1985 『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県埋蔵文化財調査報告書
第30冊 兵庫県教育委員会
近藤義郎・松本正信・加藤史郎ほか 1991 『権現山51号墳—兵庫県揖保郡御津町』権現山51号墳刊行会
岸本直文 1988 「丁瓢塚古墳測量調査報告書」『史林』第71巻第6号
近藤義郎・加藤史郎ほか 1983 『吉島古墳』新宮町教育委員会
梅原末治 1932 「龍子の三ツ塚古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第9輯 兵庫県
八賀 晋 1982 『富雄丸山古墳・西宮山古墳』京都国立博物館
近藤義郎・松平正信ほか 1985 『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会

第3章 発掘調査の成果

第1節 片島古墳群の構成

立地

片島古墳群は、揖保郡揖保川町と龍野市にまたがる養久山・三ツ塚山等と通称される山塊の南西端近くの尾根上に立地する。

この山塊は揖保川下流域の右岸にある起伏量100m以下の丘陵のひとつである。この丘陵は南西から北東方向に延びており、中垣内川の支流である古子川と揖保川にはさまれるような位置関係であり、この小起伏丘陵の南西位置にあたる尾根頂部に片島1号墳が築かれている。

古墳群の構成

片島古墳群の1号墳と2号墳は近接して築かれている。その基底部の距離は、僅か1.1mである。片島1号墳の主軸はほぼ南北方向であり、その前方部の南に近接して2号墳がある。

片島1号墳は標高63.6mの丘陵の一つの尾根頂部に築かれており、片島2号墳は一段低いところに築かれている。

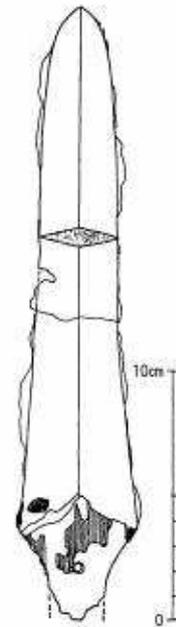
発掘調査時点で古墳状隆起と認められるところがあり、片島第4調査地点と呼称し調査した。その結果、周溝を検出したので、これを片島3号墳とする。片島3号墳は片島1号墳から鞍部をはさんで北東約50mの丘陵尾根頂部に築かれている。

なお、揖保川下流右岸のこの丘陵には養久山墳墓群、養久山古墳群、龍子三ツ塚古墳群などが築かれている。

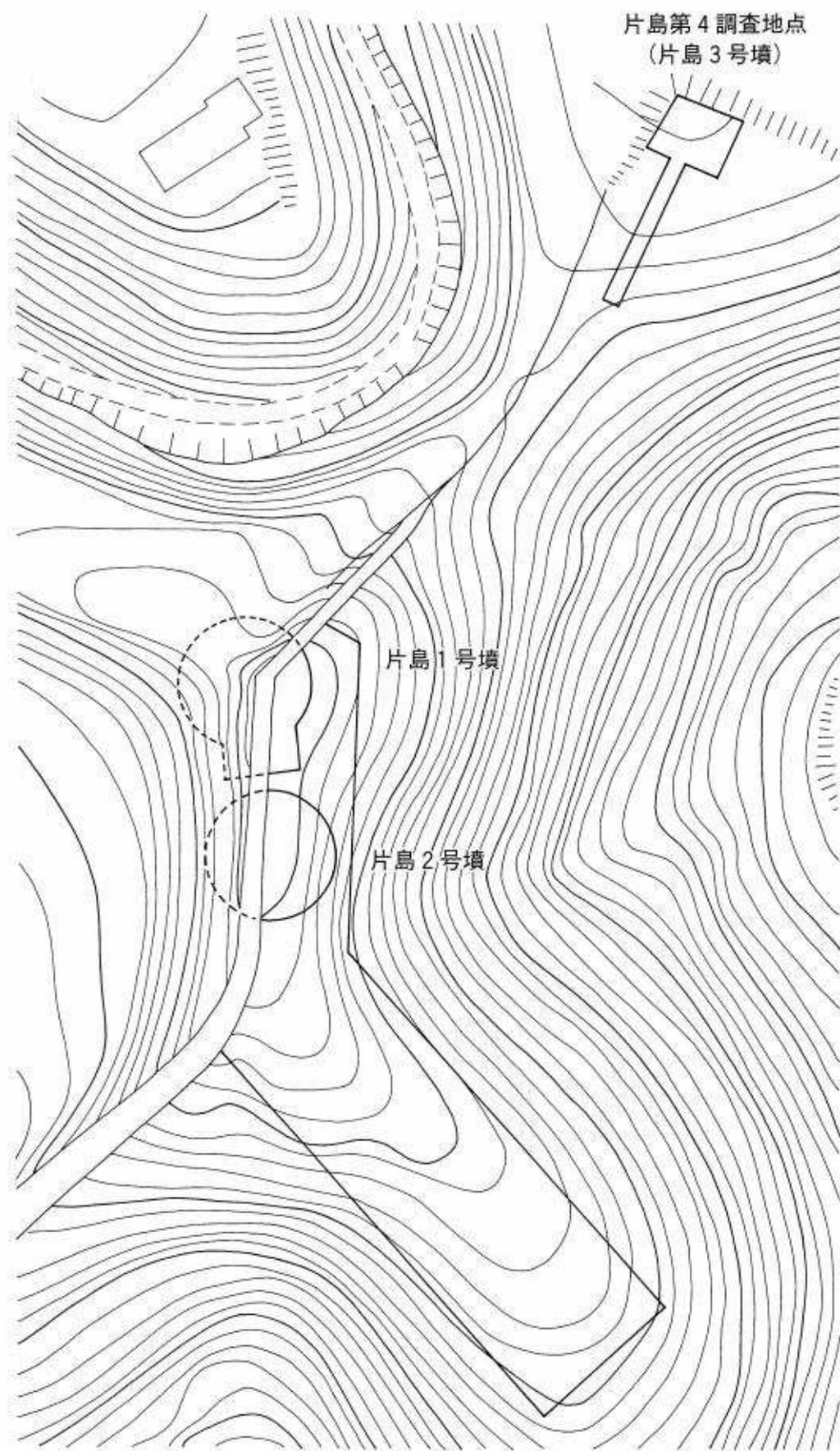
調査前の状況

古墳群の位置する丘陵は、1965年前後に南山牧場を造るため造成されている。そのとき、丘陵地の多くが削平され原地形は著しい改変を受けた。しかし、不幸中の幸いというべきか、古墳群のほぼ中央に龍野市域と揖保川町域の境界が設定されており、牧場が龍野市側のみを開発対象にしたため、揖保川町域にかかる古墳部分は残存するというかたちになった。

古墳群の調査前の状況を見ると、1号墳はその西側部分は大きく削りとられていた。削りとられた断面およびその流土から、円筒埴輪、須恵器が採集されている。また、残存する後円部の断面から鉄ヤリ（長さ24.6cm）が、過去に発見されている。2号墳も西側の墳丘一部は損失していたが、全体の半分強の墳丘は遺存していた。ここからも埴輪片が採集されている。なお、遺存する墳丘の中央に大きな攪乱坑があり、埋葬施設の遺存は期待しえない状況であった。



第6図 鉄ヤリ実測図



第7図 片島古墳群 調査区設定図

第2節 片島1号墳の調査

墳丘の大半はすでに調査前に大きく破壊を受けていたが、埴輪列や葺石の遺存から、前方部の短いいわゆる帆立貝式前方後円墳であると捉えることができた。しかしながら、墳形の全体的な復原を行うにしても、遺存した遺構資料からでは不確かなところものこした。また、埋葬施設も採土によって完全に壊されており、古墳の内容を十分に把握するにいたらなかった。

1 墳形と規模・外部施設

墳形1号墳は前方部が南面する全長21.6mの帆立貝式前方後円墳である。墳丘は前方部一段、後円部二段に築成されており、周濠はつくられていない。

墳丘断面図(第11図)に示しているように、後円部上段はほとんど盛土によって形成されているが、後円部下段、前方部には盛土はほとんどみとめられない。後円部下段、前方部の成形は、丘陵頂部に立地するという特性を生かし、自然の隆起部分を主に削り取ることによって墳形を整えている。第13図は盛土や葺石などを除去した基盤層(いわゆる地山)の地形図であるが、この段階ですでに帆立貝式前方後円墳の大まかな形に地山を成形していることが読みとれる。

墳丘の基底を明確にしている外表施設等をみれば次のとおりである。

葺石は後円部の下段の墳丘斜面には葺かれておらず、後円部の墳丘斜面と前方部墳丘斜面のみに葺かれていた。前方部の基底部は葺石によって確認できる。前方部東側面の葺石は良好に遺存していたが、前方部全面はその基底部を確認できる状態ではなかったが、溝状遺構によってその墳端が確認できる。

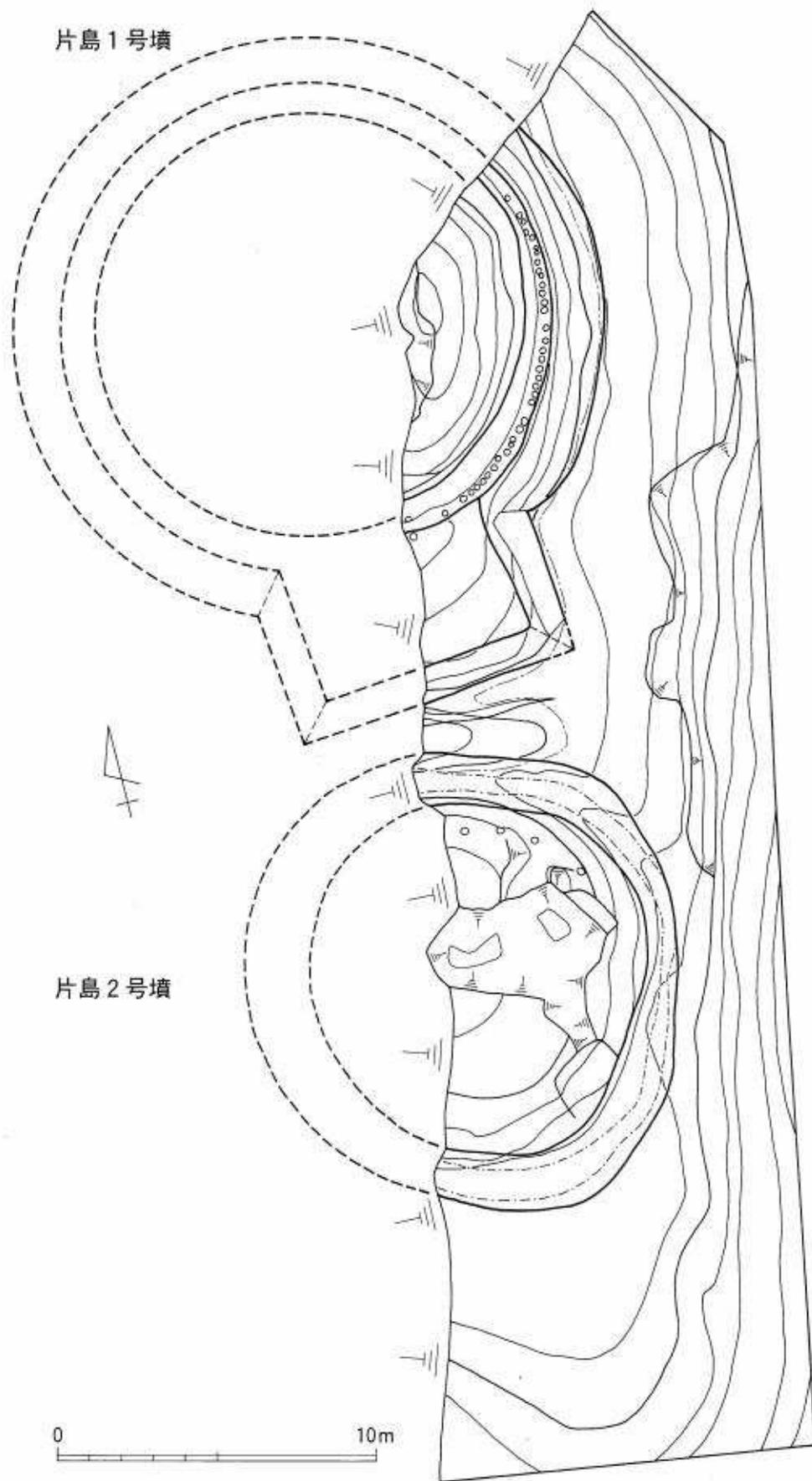
埴輪列は後円部のテラス面には埴輪がめぐらされていたが、下段の後円部の基底には、埴輪の樹立した痕跡はなく、風化土層を削り取ることによって、その形を整え基底部としている。そのため上段ほどその基底を表わす客観的な根拠を提示することはできないが、地山の成形跡や墳丘直上に転落した埴輪片の位置などから基底部を割り出している。

以上の調査結果の基づいて、全体の形状を復原したが、前方部の形状には不確かなところを残している。前方部前面と前方部側面が交差するところの角度が、前方部の形状を規定するのであるが、その部分の客観性が乏しい。しかし、前方部前面の周溝状の遺構や調査後の墳形実測のコンターに基づいて図示した形態をとると推定した。

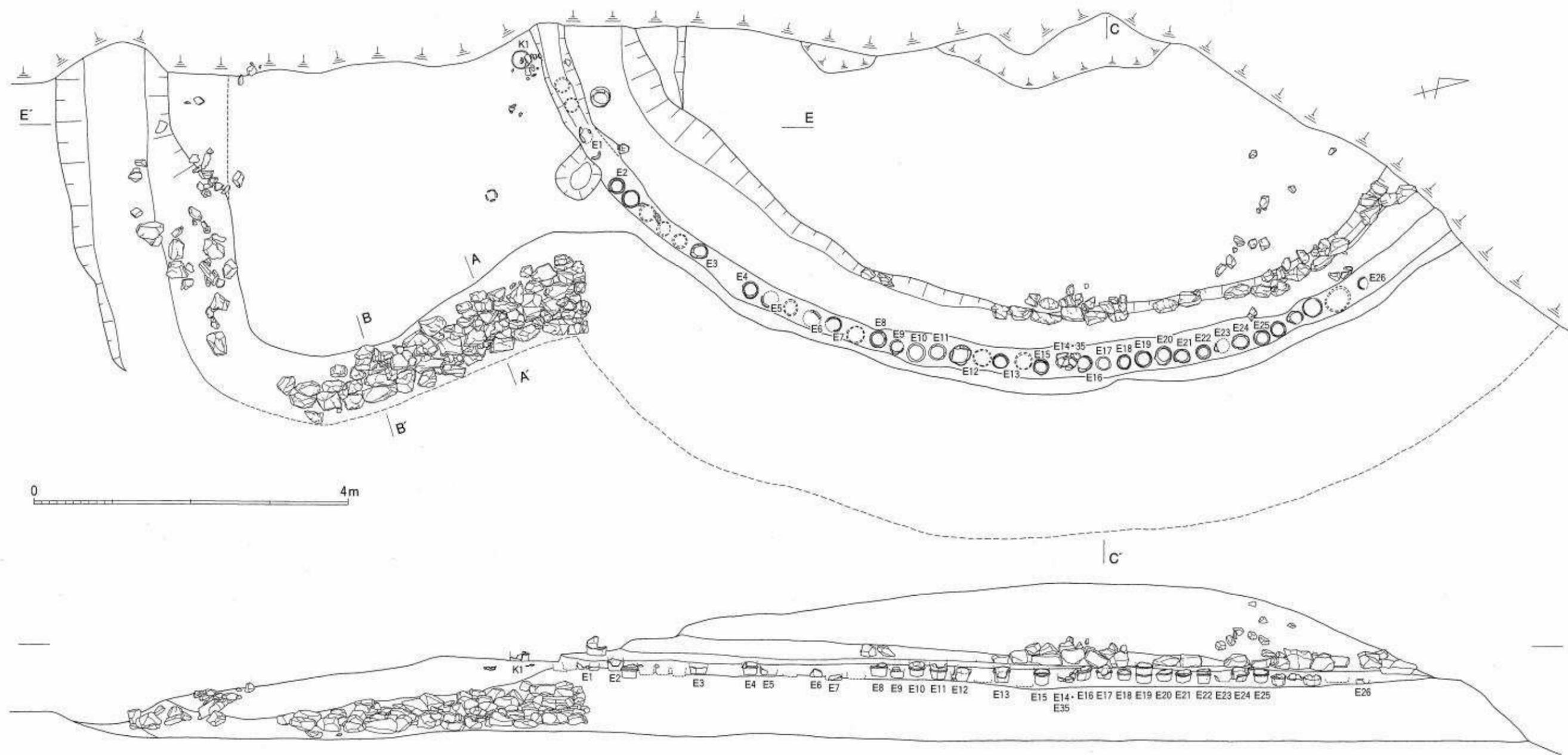
以上の観察に基づいて復元的な規模を記すと、全長21.6m、後円部下段径18.2m、後円部上段径13.5mである。

葺石 この古墳では前述しているように、葺石を施している墳丘箇所と施していない墳丘箇所があることが葺石の用い方の特徴として指摘できる。

葺石を施しているところは後円部上段斜面と前方部墳丘斜面である。葺石を施していないところは後円部下段斜面である。本来、後円部下段にも葺石が用いられてしかるべきであろうが、葺石を採用していない現象は葺石の簡略化と捉えていいであろう。このような簡略化の要因は奈辺にあるのだろうか。この古墳からみれば、後円部墳頂平坦面と前方部墳頂平坦面には埴輪と須恵器を用いた墳頂祭祀を実行



第8図 片島古墳群 墳丘実測図



第9図 片島1号墳 遺構図

している。そして、葺石は墳頂祭祀と直接つながる墳丘斜面のみに採用しているという事実が指摘できる。このことから葺石は、墳頂祭祀に伴う壮厳化のひとつとして必要最小限の箇所に施していると捉えることが可能である。このように捉えれば、葺石の主要な機能が墳頂祭祀に伴う壮厳化の役割を果たしている古墳の外表施設であると評価できるかもしれない。

後円部上段の葺石は、第9図に示しているように、その多くが転落して築造当時の状況を保っているところは僅にしか遺存していなかった。その状況をみれば、葺石下底の基石とも呼べる

石は大型の塊石（30cm～50cm×15cm～30cm）を用い、基石の上方には小角礫（20cm未満）を積み上げるという前期古墳以来の葺石技術を踏襲しているとみることも可能である。基石から遊離して斜面に遺存している葺石も小角礫である。

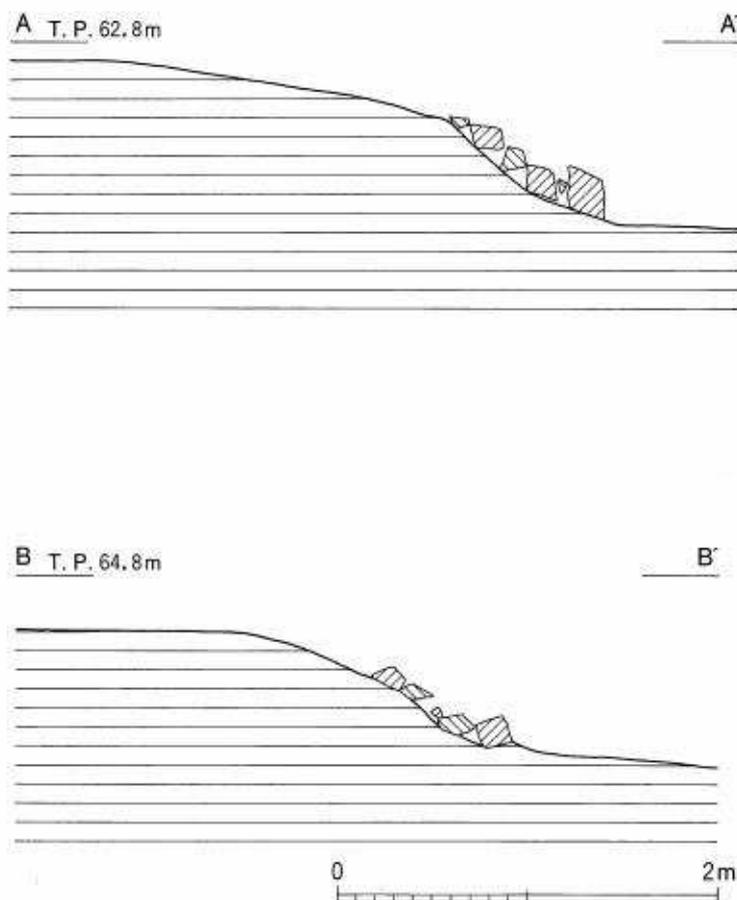
それに比較して、前方部東斜面の葺石は良好に遺存しており、基石に大型の塊石を選別して用いているとは認め難く、ほぼ同大の塊石で構成されているという違いをみとめることができる。この葺石を除去した状態を図版9に示している。これをみれば、葺石は地山にそのまま施しているのではなく、化粧土ともよべる土で表面を地ごしらえしてその上に葺石を葺き上げていることがわかる。

前方部前面に施された葺石は前二者よりも簡略で、基石とよべる大型の塊石はみられない。前方部前面の葺石のこのような状況は古墳前期の前方後円墳の葺石にもみられる現象である。

姫路工業大学の石井健一先生に葺石に使用されている石材の同定を依頼し、先生から頂いた所見は以下のとおりである。

『片島1号墳葺石に使用されている石は、いわゆる、古生層の砂岩、チャートその他、石英斑岩、流紋岩質凝灰岩である。これらの石の大部分は大きさが30cm×50cm～50cm×15～30cmのブロック石が多い。葺石には人工的な手を加えた形跡はなく、おそらく転石（ころび石）をそのまま使用したものと思われる。

付近の地質は泥岩を主とする古生層、相生層群とよばれる流紋岩質凝灰岩、および古生層を貫く石英斑岩脈からなっている。古生層の泥岩はほぼ層面に平行する破碎がすすんでおり、その中に上記の葺

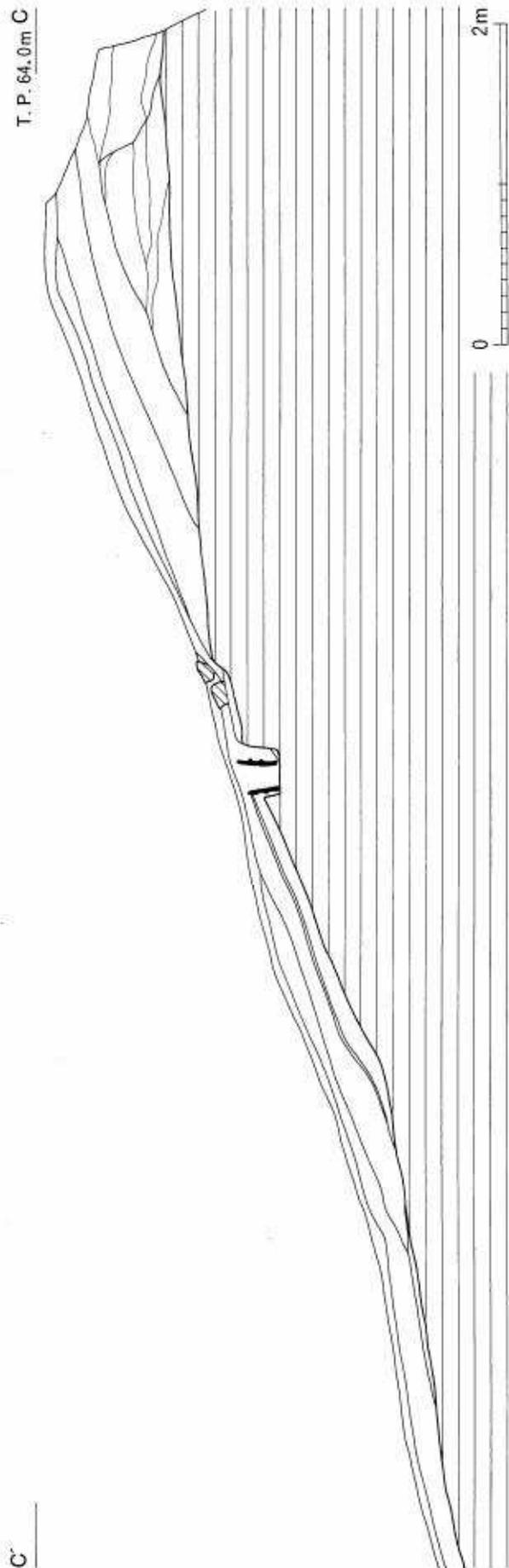


第10図 片島1号墳 前方部葺石断面図

石とはほぼ同じぐらいの大きさの砂岩、チャートのレンズブロックがはさまれている。泥岩は風化が烈しいため、風化に強い砂岩、チャートのレンズは風化帯表面でころび石となってあらわれている。同様に石英斑岩、流紋岩質凝灰岩も風化には強く、石砂、チャートのブロックと共に崩壊土の中や谷に転石となって古墳周辺によくみとめられる。したがって、葺石に使用された石は遠くから運んだものでなく、古墳をつくる時に、近くにころがっている手頃なころび石をそのまま使用したものであろう。』

埴輪 樹立していた埴輪は後円部テラス面と前方部墳頂平坦面に確認された。

後円部テラス面に樹立された普通円筒埴輪は、片島2号墳のように個々の埴輪に掘り方をもつ手法ではなく、テラスの平坦面を溝状に掘りくぼめ、そこに埴輪を据え置くという手法を採用している。溝状の掘り込みの位置は後円部葺石の基石の30cm外から掘り込みをはじめており、その幅は35~45cmで、深さは15~20cmである。この溝はほぼ墳丘が完成した後に掘られていることは、溝の掘方がテラス面の地山上の化粧土的な盛土から掘られていることから確かめられる(第11図)。葺石も同じ状況のもとで葺かれているが、その築造の順は葺石構築後に溝が掘られ、埴輪が樹立されたとみるのが妥当であろう。溝内に埋置された普通円筒埴輪はほぼ接して樹立されており、1mに付き4本の割合で埋置されて



第11図 片島1号墳 後円部墳丘断面図

いた。同じ割合で埋置されていたとすれば、後円部テラス面には180本前後の埴輪が使用されていた計算になる。この埴輪列に使用された普通円筒埴輪の種類であるが、整理後も円筒埴輪と朝顔型埴輪を区別する資料は得られなかったので、円筒埴輪のみで構成されていたのか、円筒埴輪と朝顔型埴輪がある間隔で配置されていたのかは判らない。なお、原位置を保っていた埴輪には須恵質埴輪はなく、いずれも黒斑のない土師質の埴輪であり、転落した埴輪の中に同タイプの朝顔型埴輪の口縁部の埴輪がほとんどみられなかったので前者である可能性が高いとみておきたい。

樹立していた埴輪の遺存状況をみれば、その多くが一段目籬までしか遺存していなかったことから一段目籬前後まで溝内埋土で埋められていたと推測できる。古墳上に現れていた部分は一段目籬より上部であろう。

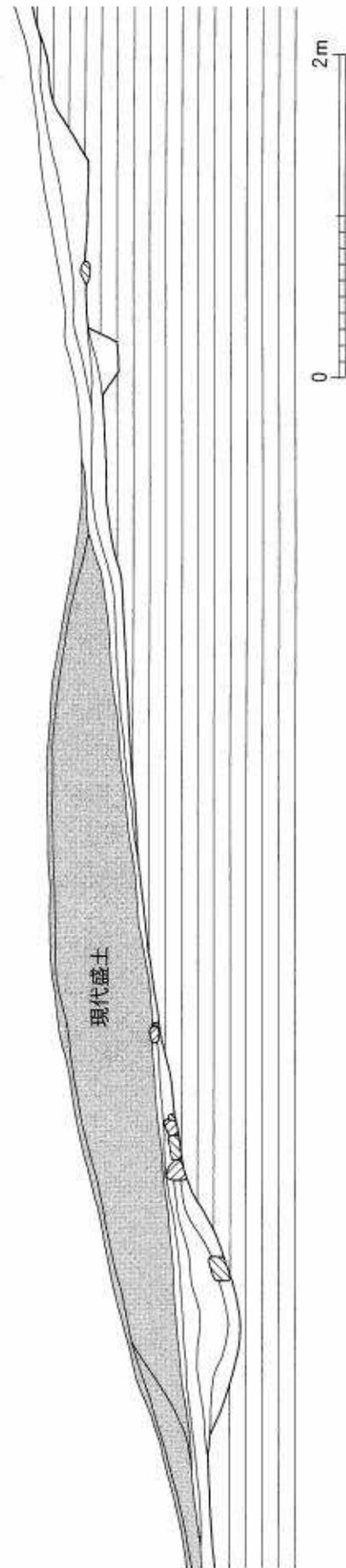
前方部では埴輪の基部が原位置を保っていたとみられる埴輪は2か所（第9図）のみである。他に厳密な意味では前方部ではないが、テラス面の溝内に埋置された埴輪列より内側の後円部よりのテラス面に埴輪の基部（第9図）が原位置を保って検出されている。いずれも形象埴輪の基部とみてよいであろう。なお、これらの形象埴輪には掘り方は認められず、前方部墳頂平坦面上に直接設置して埴輪祭祀を行ったことがわかる。

その内、K1は基台と足部分の一部が遺存しており、近くから美豆良とみられる破片も出土し、男性の人物埴輪とみてよいであろう。

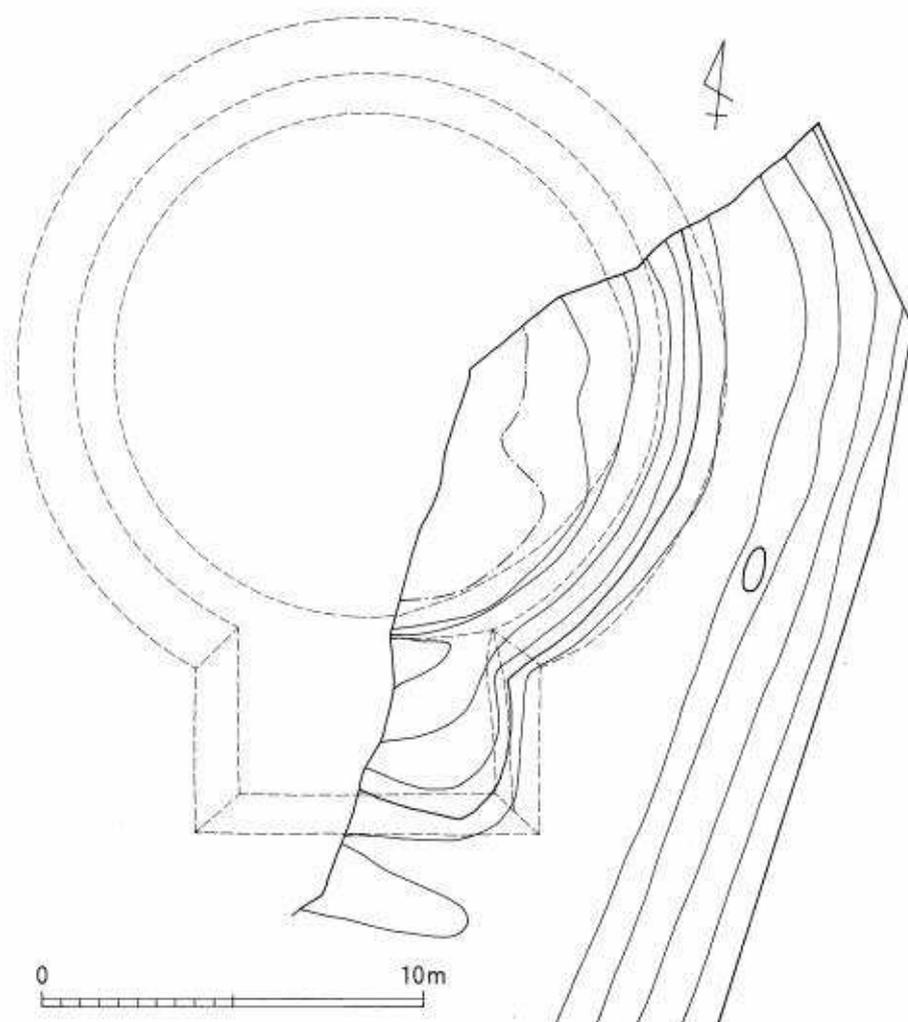
前方部からはこれら形象埴輪に伴って須恵器も検出されており、前方部には形象埴輪と須恵器を使用した祭祀が執行されたことがわかる。

なお、転落した埴輪の中には、後円部テラスの埴輪列の普通円筒埴輪とは質や規模が異なる一群の普通円筒埴輪を認められる。それは、須恵質の埴輪で、埴輪の規模も大きい一群のものである（第19図E27～E33）。このタイプの埴輪には円筒埴輪と朝顔型埴輪が認められる。これらの埴輪

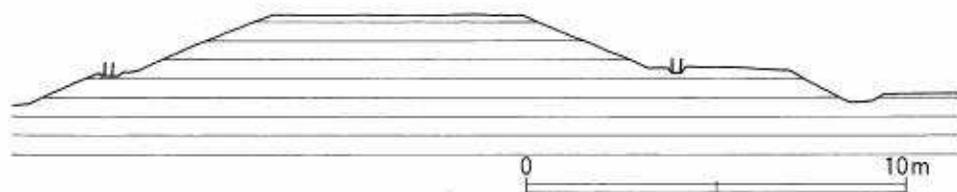
T. P. 63.8m E



第12図 片島1号墳 前方部墳丘断面図



第13図 片島1号墳 基盤成形時の地形図



第14図 片島1号墳 築造時の墳丘ライン

はおそらく後円部墳頂平坦面に樹立された埴輪とみるのが妥当であろう。そうすれば、この古墳において使用する普通円筒埴輪は後円部テラス面に樹立するものと後円部墳頂平坦面に樹立するものと区別して使用していたと捉えることができ、後円部墳頂平坦面の方が優品である。

2 埋葬施設

調査前に埋葬施設の位置する後円部墳頂平坦面のほとんどが破壊されており、今回の調査では埋葬施設に関する微細ないかなる痕跡も検出されていない。このことからみれば、この古墳の埋葬施設につい

てはなにも言及できないという状況であるが、以前に破壊された崖面から副葬品とみられる遺物が採集されている。そのときの状況は以下のとおりである。

今回の確認調査の1年前の1978年4月8日にこの古墳を踏査した志水豊章と岸本道昭が破壊された後円部崖面から鉄ヤリを採集している。その時の報文によれば、当時この古墳は前方後円墳と認識されており、そのときの状況を「古墳の現状は、……ちょうど墳丘の主軸に沿うように西側が削られ、崖面となっていた。踏査した時には、(今回の)発掘調査時よりも、もう少し墳丘残存度が良く、崖面は除々に後退していったようで崖下には崩壊した土砂が堆積している有様であった。鉄ヤリは、ちょうど後円部頂付近の崖面に水平に突きささっているような状況で発見した。」と記す。そして、「鉄ヤリは、先端部を北東方向に向け、半分以上が崖面から露出している状況である。その時、崖面や周囲を詳細に観察したが、他に遺物もなく、鉄ヤリが埋置されていた土坑、あるいは墓壇、埋葬施設といった遺構も確認できなかった。」と報告している。なお、この踏査以前にも岸本が「古墳墳頂部で青色のガラス小玉1個(現在行方不明)を採集した」と付記している。

このような状況から、これらの遺物は後円部にあった埋葬施設に伴う副葬品であったとみてよいであろう。そうすれば、後円部に埋葬施設があったことは確実であり、問題は竪穴式石室なのか、横穴式石室なのか、木棺直葬なのかというどのような種類の埋葬施設を採用していたということである。

副葬品採集時の踏査の所見でも、また、今回の発掘調査の所見からも石材の散乱している状況は観察されていないことからみれば、石材を使用した竪穴式石室や横穴式石室でないことは明らかであろう。このように古墳に残された状況証拠からでは木棺直葬という埋葬施設であった可能性が高いと言えるであろう。

この古墳から出土した後述する須恵器はTK208型式であり、この時期、播磨地域では横穴式石室はまだ導入されていないし、加古川市印南野2号墳、同カンス塚古墳や姫路市宮山古墳のような朝鮮半島南部の影響を受けたみられる播磨地域の中期後半タイプの竪穴式石室もTK208型式の時期には発見されていなく、この時期には衰退していると推測している。このような播磨地域のこの時期の埋葬施設の採用状況からも、前述のこの古墳が木棺直葬であったことを補強するものと思われている。

しかし、埋葬施設が木棺直葬としても木棺の種類やその構造までは言及できる資料は発掘調査からでは明らかにすることはできなかった。

3 出土遺物

(1) 埴輪

1号墳から出土した埴輪には、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪がある。これらの埴輪は、墳丘を巡って樹立されていたもの、あるいはそれ以外の場所で使用されたものである。

墳丘を巡るように樹立していたのは26個体であり、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪を区別することができない。いずれも基部を中心として残存しており、完形のものはない。

これ以外の埴輪には、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪の破片がある。形象埴輪には、人物埴輪の基部を始め、家形、馬形、蓋形、大刀形の破片などがある。

なお、樹立円筒埴輪は、南から順に1-E1~1-E42と番号を付けた。

A. 円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪

(a) 形態と法量

1号墳出土埴輪は、前述のように全形を知りえるものが少ないため、形態の分類を行うことは困難である。しかしながら、E19・E21は体部が比較的直立し、その他の殆どの個体については、外傾気味に伸びる体部をもつようである。

口縁部径は23~25cmに、底部径は13.6~18.4cmに集中するように、全体的に小型品が多いことが分かるが、中には口縁部径29~31cm、底部径23.2cmの大型品もある(第19図)。底部径13.6~15.0cmを小、15.6~17.0cmを中、17.6~23.0cmを大と分類する。

完形品がないため、器高を知ることはできないが、樹立円筒埴輪

の平均的な底径16.3cmから判断すれば、3条の突帯によって4段に区切られる小形のものが多くと推定される。ただし、口径30cm前後とやや大型の転落円筒埴輪については4条の突帯によって5段に区切られるものかもしれない。この推測が許されるなら、器高の異なる2種類の円筒埴輪が使用されていたことになる。

また、このやや大型の円筒埴輪にのみ須恵質のものが存在すること、基底部の残る樹立埴輪には須恵質のものが含まれないため、やや大型の円筒埴輪は、墳頂部での祭祀用であったと推定される。

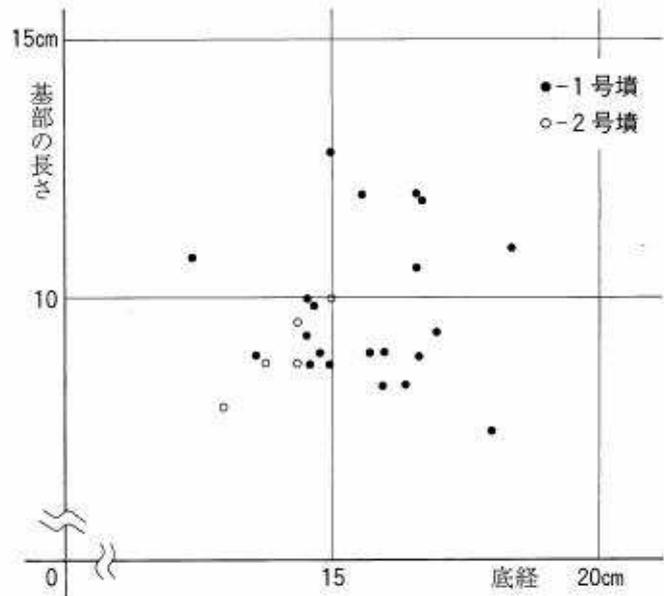
なお、円筒埴輪の段については突帯で区切られた部分を1単位とし、最下段を基部と呼び、突帯を挟んで1段上を1段目、順に2段目、3段目とする。

透孔はすべて円形であり、2段目もしくは3段目に配する。

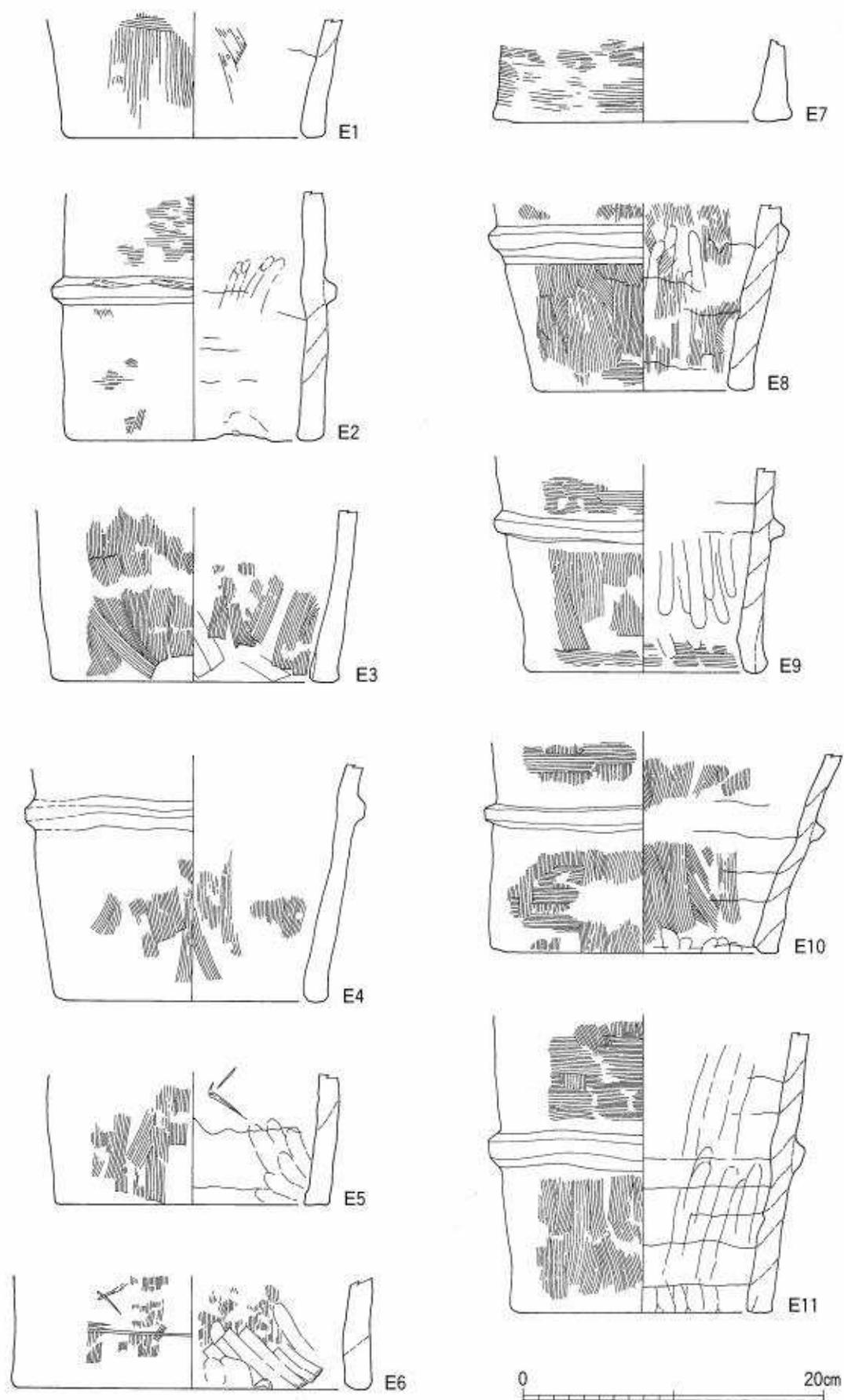
(b) 成 形

基部は、幅4.5~6.5cm程の粘土帯で作られている。1枚の粘土帯の両端を繋ぐものと、2枚の粘土帯を接合するものの2者がある。1枚のものでは、右回りに接合する場合と左回りに接合する場合があるが、右回りに接合する場合が8個体と圧倒的に多く、残る2枚接合のものは4個体、左回り接合のものは4個体を数える。

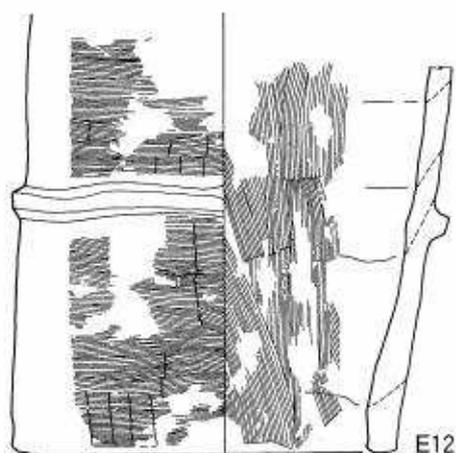
全ての埴輪は基部の上に、2.0~2.5cmの粘土紐を積み上げて作成されるが、その積み上げ痕は、内外面調整により、ほとんど消されている。その為、粘土紐の本数は確認し得なかった。通常、底面には板状、棒状の圧痕が残る。片島1・2号墳では明確に分かるものはないが、E10はその可能性がある。また、ハケで、雑に底部を調整しているものもある。



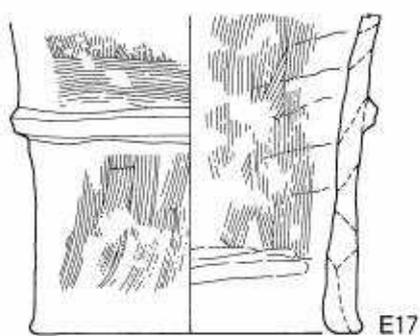
第15図 片島1号墳 樹立円筒埴輪の法量分布図



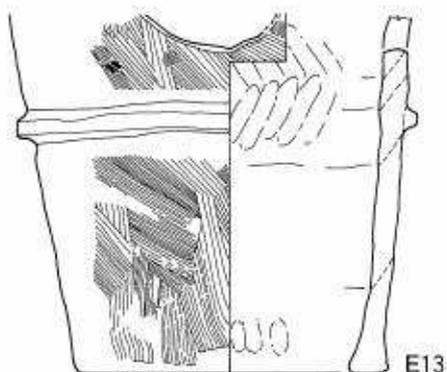
第16图 片岛1号墳 円筒埴輪実測图(1)



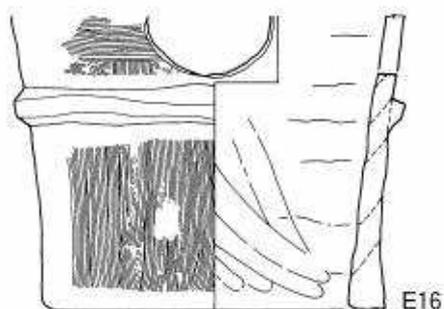
E12



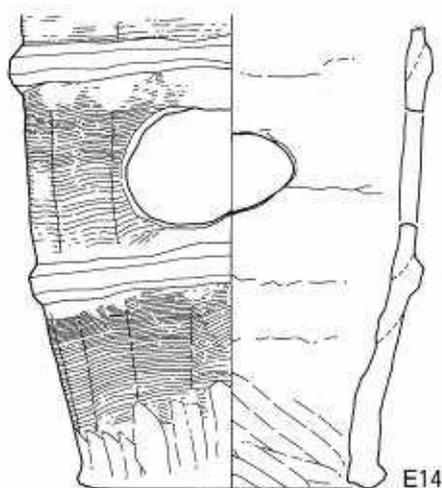
E17



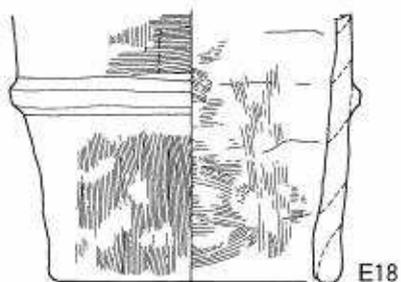
E13



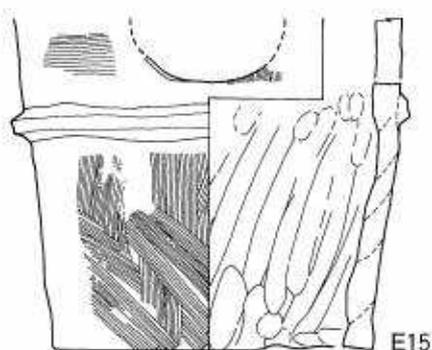
E16



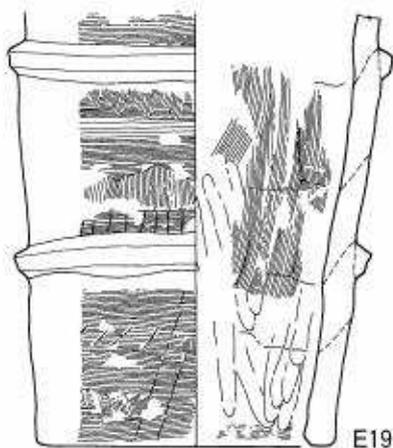
E14



E18



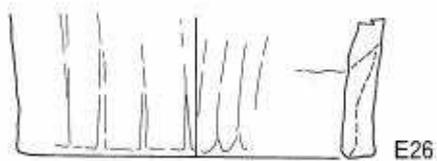
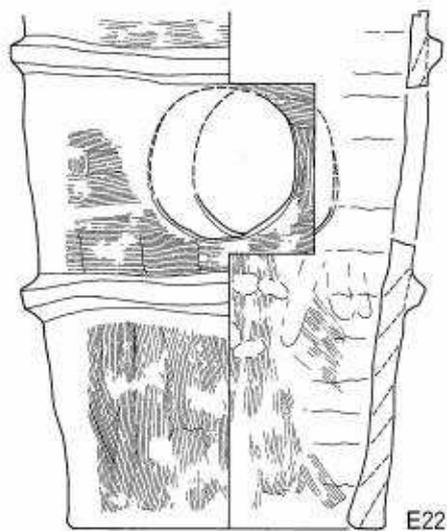
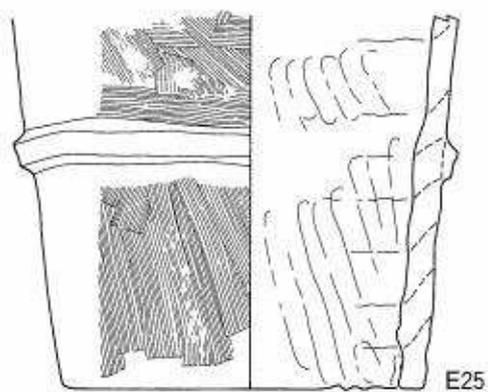
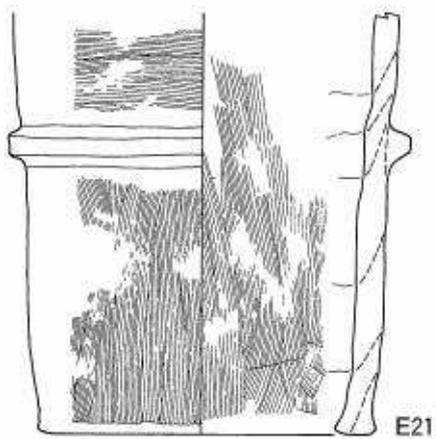
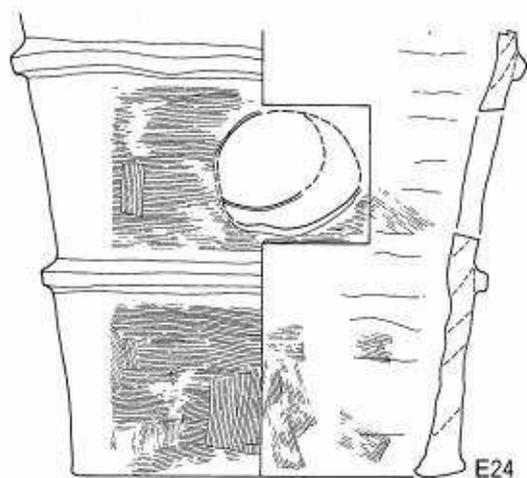
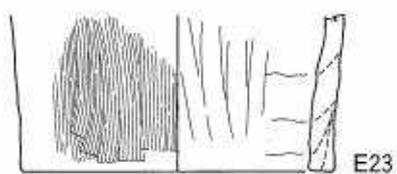
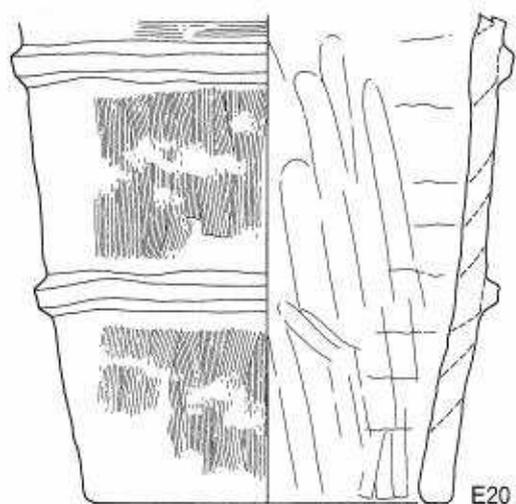
E15



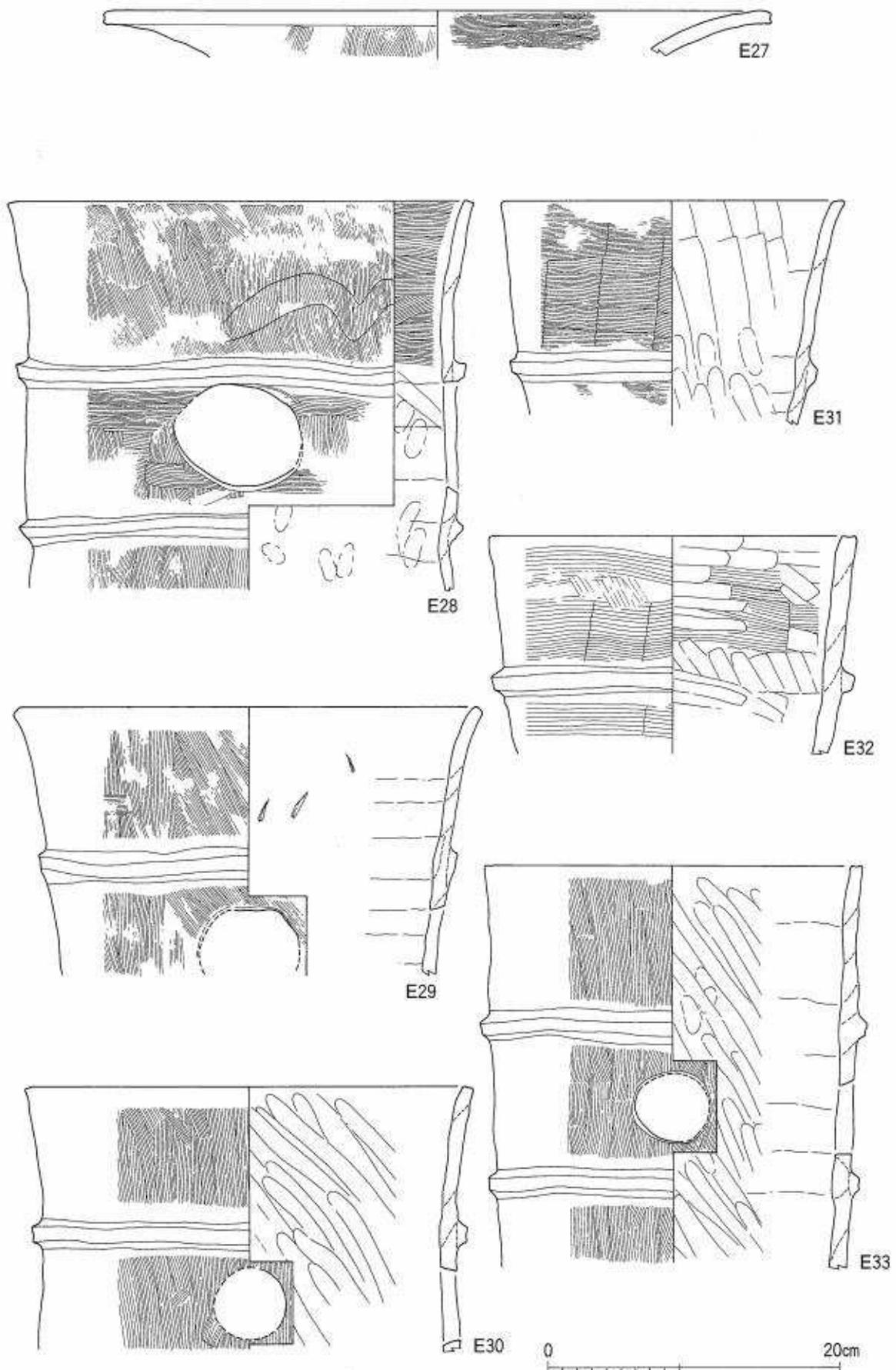
E19



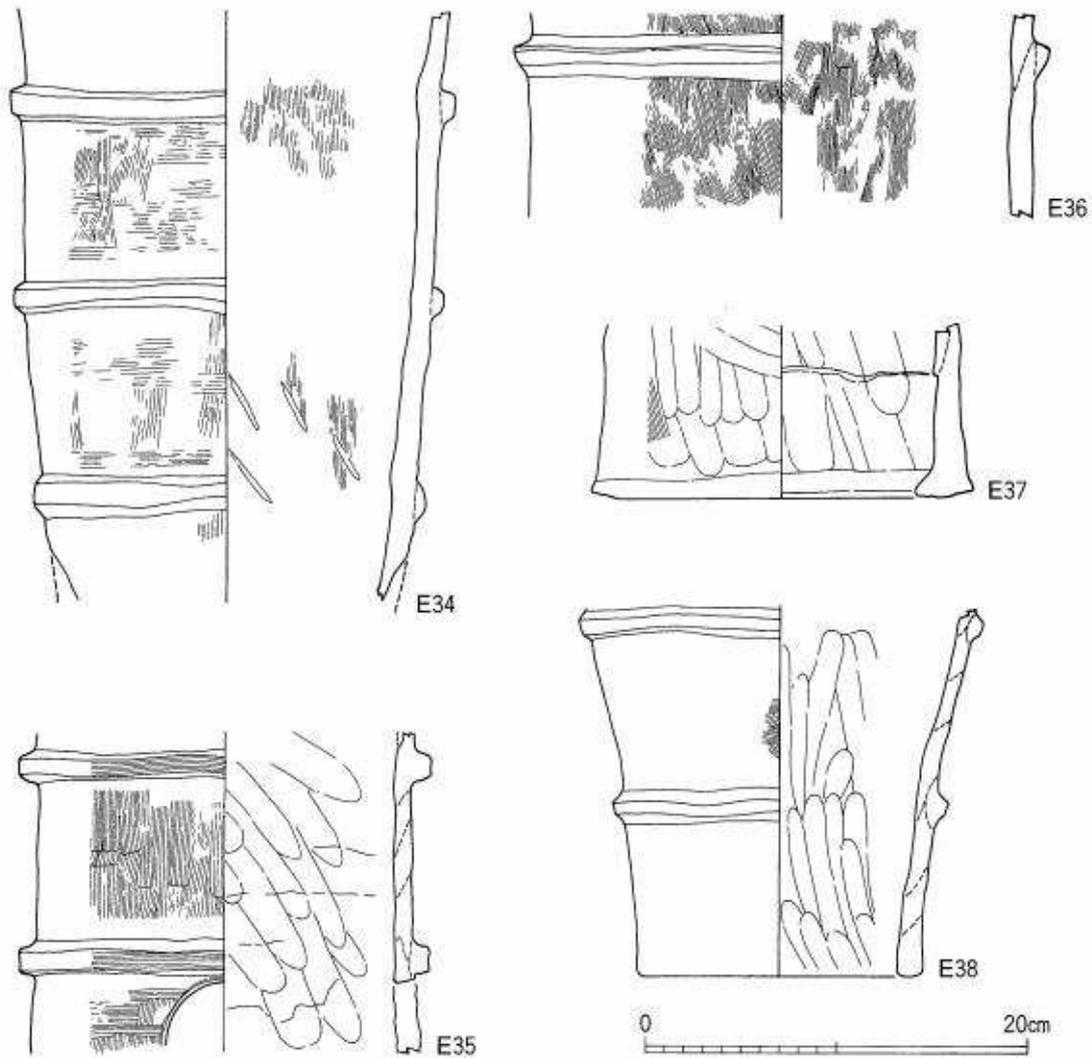
第17図 片島1号墳 円筒埴輪実測図(2)



第18图 片島1号墳 円筒埴輪实测图(3)



第19図 片島1号墳 円筒植輪実測図(4)



第20図 片島1号墳 円筒埴輪実測図(5)

粘土帯の接合部を次の3つに分ける。

- a. 粘土帯の2枚接合
- b. 粘土帯の1枚右回り接合
- c. 粘土帯の1枚左回り接合

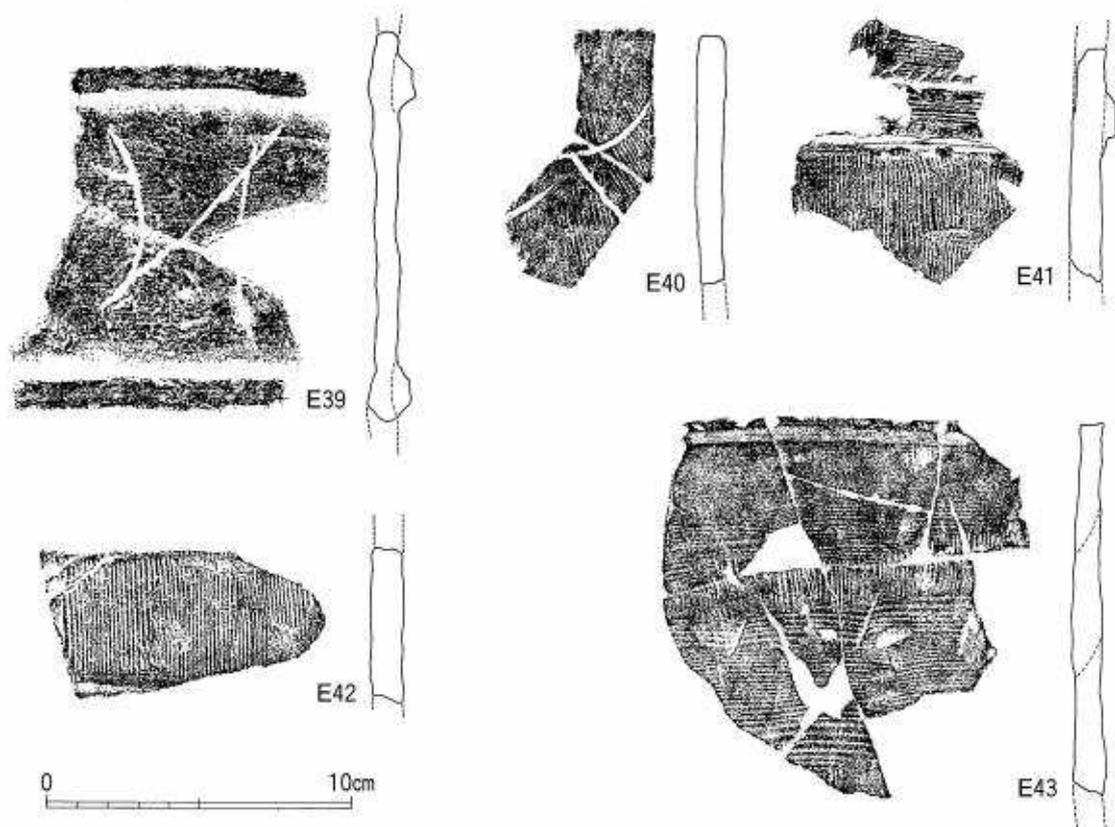
底部の断面形状と端部処理の仕方によって次の3つに分ける。

- d. 板上に正立させ、内面のみを下方方向のナデによって調整したもの。
- e. 正立させ、内外面共にヨコナデやヨコハケ調整を行う。基底部の断面形は「コ」字形を呈する。
- f. 内外面のナデ、ハケ調整後、底面もナデ調整を施す為、基底部の断面形は「U」字形である。

(c) 内外面調整

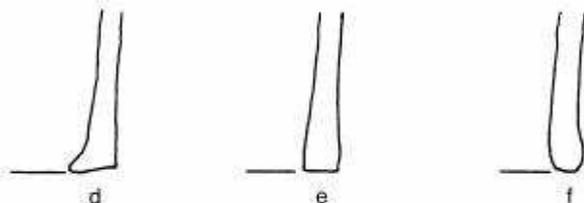
内外面調整には主に、ナデ、ハケが用いられる。

外面調整は、全個体とも突帯貼付以前(第1次調整)に、タテハケもしくは、ヨコハケを施し、突帯貼付後(第2次調整)、ヨコハケもしくは、ナナメハケを施す。タテハケは、下から上方向に、ナナメ



第21図 片島1号墳 円筒埴輪実測図（拓本）

ハケは、全て左上がりに施されている。基部の外面調整をタテハケのみで終える個体は半数以上を占める。また、第2次調整の半数を占めるヨコハケは、川西安幸のいうB種ヨコハケである。工具を器壁から離さず、基部は2～5cm、体部は4～6cm間隔で休止させるが、E21は7.5～10cmと間隔が広い。



第22図 円筒埴輪底部形態分類図

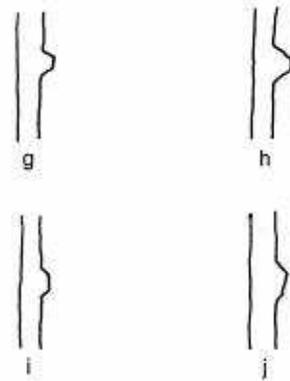
体部の外面調整は、タテハケ後ヨコハケ（B種ヨコハケを含む）を施す。タテハケのみの調整は、例外的にある。口縁部は、須恵質の円筒埴輪は全てタテハケのみで、他の3個体は、タテハケ1個体、5cm間隔のB種ヨコハケ2個体がある。

体部の内面調整には、ナデ、ハケ調整が用いられる。ナデは、指あるいは布をもった指によって施される。本古墳では、ナデ調整のみが殆どで、「タテハケ」「タテハケ、ナデ」の組み合わせも多い。ナデは主に右下から左上方向に施されるが、E16のみは、底面から幅5cm程、タテハケを切る形でヨコナデが施されている。突帯接合部の内面には、指オサエが施され、その後指頭圧痕の残る程度のナデ調整が施される。底部は、正立状態のまま強く粗い上から下へのナデ下ろしのみで、その他の調整はない為、底面は、自重と調整の圧力が加わって扁平な平面になっている。また、これに若干のヨコナデ調整を施

し「コ」字形になっているものがある。しかし、底面もナデ調整を行い「U」字形に仕上げているものがあり、これは半数を占める。

内外面の調整を以下のように分類する。

- a. ナデ
- b. タテハケ
- c. タテハケ後ナデ
- d. タテハケ後ヨコハケ
- e. タテハケ後B種ヨコハケ
- f. タテハケ後左上がりハケ
- g. 左上がりハケ
- h. 左上がりハケ後ナデ
- i. ヨコハケ
- j. ヨコハケ後ナデ



第23図 円筒埴輪突帯分類図

(d) 突 帯

円筒埴輪は3条か4条の突帯をもつ。第1次調整後に貼り付けられるが、突帯剥離面には、貼り付け前にはあらかじめの位置を示したヘラ状工具による沈線が施されるものがある。

内外面は殆どナデで仕上げられるが、例外としてE35の外面にはヨコハケが施されている。内面に、貼り付け時の指頭圧痕を残すものも多く見られる。

突帯は、断面形状と突帯幅により3つに分類する。

- g. 幅は 0.7cm、突出度が高く、台形を呈する突帯
- h. 幅は 1.0cm、突出度が高く、台形を呈する突帯
- i. 幅は 1.0cm、突出度が低く、扁平な台形を呈する突帯
- j. 幅は 1.3cm、上部の突出度が下部に比べ高く、三角形に近い突帯

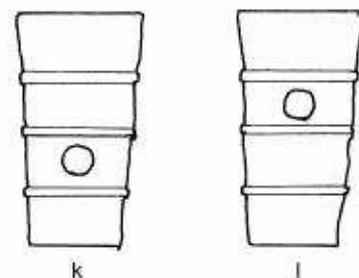
また、突帯間の長さを次の5つに分類する。

- A. 12.4cm / 11.8cm / 12.8cm
- B. 11.4cm / 11.0cm
- C. 10.4cm / 10.0cm
- D. 9.0cm / 8.8cm
- E. 8.0cm / 7.8cm
- F. 13.0cm / 13.8cm

(e) 透 孔

樹立円筒埴輪は、前述したとおり3条の突帯によって4段に区切られる小型の円筒埴輪が殆どであると考えられる。この円筒埴輪の穿孔箇所は、次の2つに分類される。

- k. 第1段に2孔
 - l. 第2段に2孔
- つまり、1固体につき円形の透孔が2個穿たれている。



第24図 円筒埴輪透孔分類図

透孔はヘラ状工具（鉄刀子？）などの鋭利な工具によって設けられている。穿孔した後、指オサエにより調整する際に若干の変形や、透孔の位置が中軸線上から大きくずれる例がある。

(f) 口縁部の形態

円筒埴輪の口縁部は、口縁部全体の断面形状と端部処理の仕方によって次の3つに分類する。但し、これら全て、転落埴輪（朝顔形円筒埴輪を含む）である。

- m. 端部内面にナデによる凹線の巡るもの
- n. 端部内面にナデによる凹線の巡らないもの
- o. 上半が外反し端部は底辺と水平方向になっているもの



第25図 円筒埴輪口縁部分類図

(g) ヘラ記号

須恵質のE28には、口縁部に2条に波線が施されている。その他、破片のE40は口縁部に曲線が刻まれている。軟質のE39に逆「N」字形の記号が刻まれている。器厚と体部の位置関係から考えるならば、第3段、つまり上段部分にある可能性が高い。須恵質のE42もヘラ記号をもつが、突帯部分を欠く為に、記号の場所を比較的上部にあると推測する以外にない。

資料が少ない為、記号についての分類は行わなかった。

(h) 焼成

全ての個体は黒斑をもたない窖窯焼成のものである。軟質の埴輪は半数以上を占める。また須恵質の埴輪が4分の1程を占める。須恵質埴輪の中には、底部にいくに従って軟質に変わっていくものもある。

(i) 胎土

4BNは、作業場と採取地が全く異なり、GもBNとはまた異なった採取地をもっている。NEは、同じ場所（作業場近接地の可能性が高い）で採取したと捉えても可能であることを前提に言及するならば、第1表のとおり4Nのようにその地で採集したものが半数を占めるが、残りの約半数は異なった地で採取し、運ばれ、その半数はそのままで使用され、残り半数はその地で採集したものと混ぜて使用されている。

つまり、円筒埴輪は、少なくとも異なる3地点から採取された土で作成されている。

第1表 埴輪胎土一覧表

図面番号	胎土の種類	図面番号	胎土の種類	図面番号	胎土の種類	図面番号	胎土の種類
E-1	4GN	E-11	4N	E-21	4N	E-34	4G
E-2	4GN	E-12	4BN	E-22	4N	E-35	4N
E-3	4N	E-13	4N	E-23	4BN	E-36	4E
E-4	4G	E-14	4N	E-24	4N	E-37	4N
E-5	4EG	E-15	4N	E-25	4N	E-38	4N
E-6	4N	E-16	4GN	E-26	4N		
E-7	4GN	E-17	4GN	4N : 17個体 4GN : 6個体 4G : 3個体		4E : 2個体 4BN : 2個体 4EG : 1個体	
E-8	4E	E-18	4N				
E-9	4G	E-19	4N				
E-10	4N	E-20	4GN				

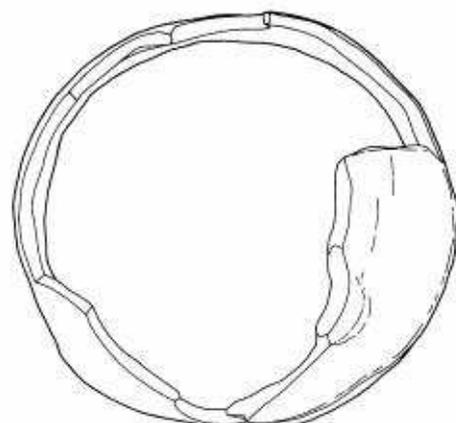
4: 流文岩/N: 角閃石、基石/E: 角閃石、基石、じけい/G: 砂岩、泥岩、チャート/B: 閃緑岩

B. 形象埴輪 (K1~K12)

1号墳で出土した形象埴輪は、人物埴輪、家形埴輪、大刀形埴輪、馬形埴輪、蓋形埴輪、靱があり、基台が残っているものは、人物埴輪のみで、他は上部の破片のみである。

(a) 人物埴輪 (K1・K6・K12)

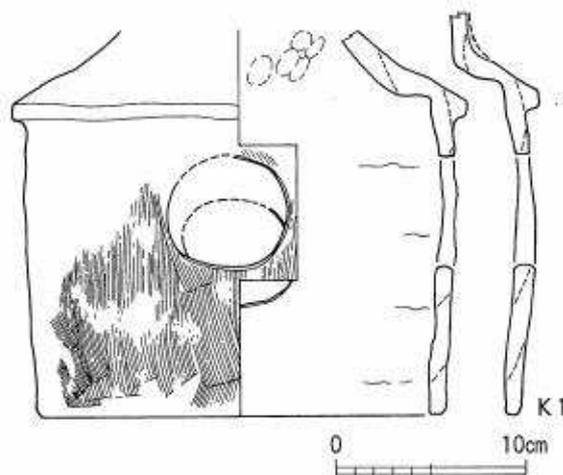
K1は、基台と足部分が若干残っており、図示したK1平面図の上方向につま先部分がくると思われる。外面には、下から上方向へのタテハケ調整が施され、内面調整は丁寧なナデ、基台と人物の接合部分には指頭圧痕が残る。透孔は2孔で、人物の真正面に穿孔している。美豆良が出土していることにより男性と推測される。



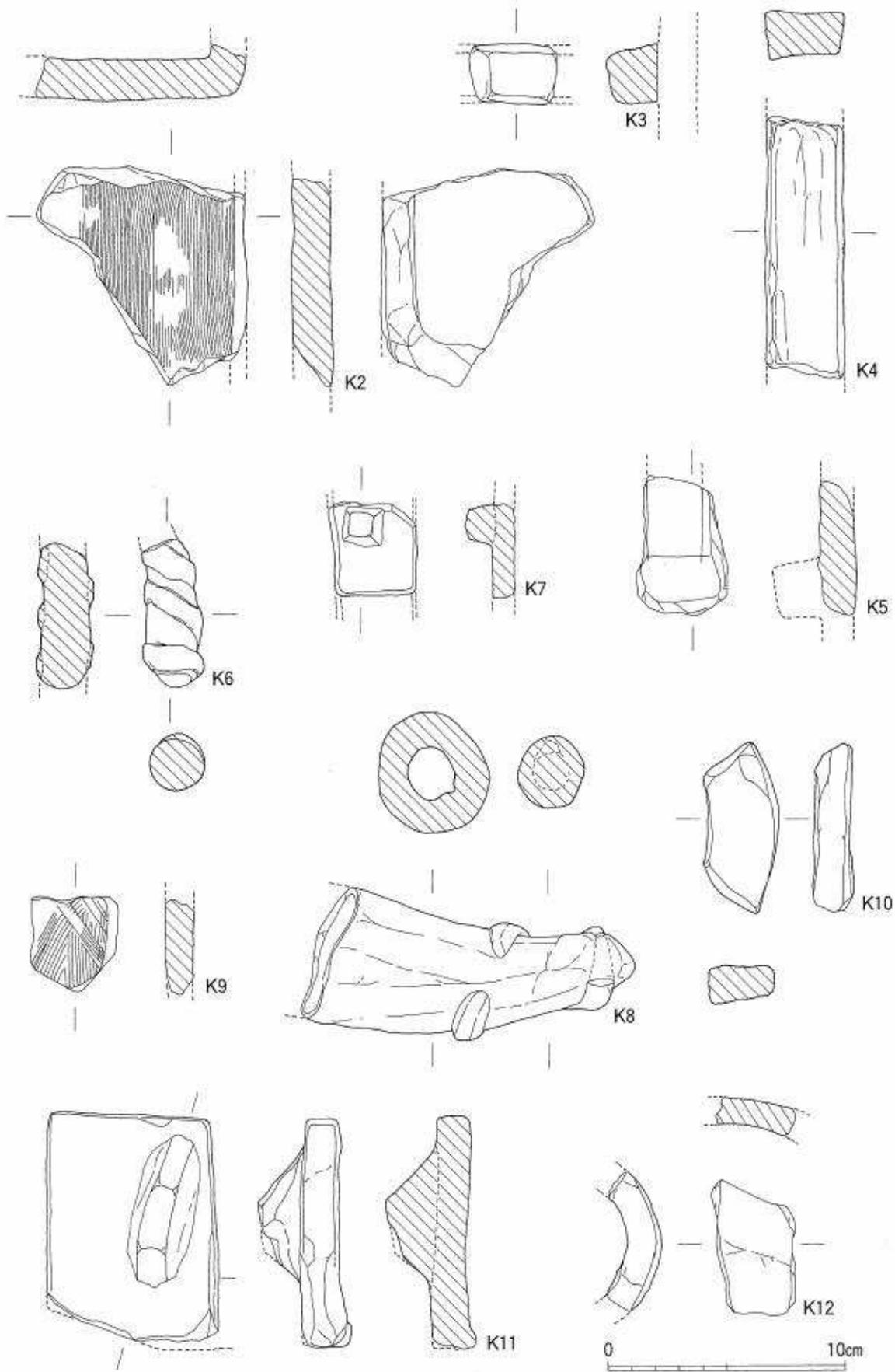
K1付近より、K6及びK12が出土している。これらは同一個体と考えられ、K12は足部分の破片と思われる。

(b) 家形埴輪 (K2・K3・K4・K5)

K2は、壁と壁のコーナー部分である。外面には、タテハケが施され、内面には丁寧なナデ調整が見られる。K3とK5は、一対になっており、基底部分をなしているが、K3は側板部分である。側板部分の壁と接する上2cm幅で、刻線が2本刻まれているが、内外面調整は不端は、下端部より外反しており、



第26図 片島1号墳 形象埴輪実測図(1)



第27图 片島1号墳 形象埴輪実測図(2)

側板は、やや下向きになる。K 5 は、K 3 が接する上端部分より上の端で、下端部より外反しており、側板は、やや下向きになる。K 5 は、K 3 が接する上端部分より明らかに上である。K 4 は、壁面に付随する柱と考えられる。これも内外面調整は不明であるが、貼り付け時の粘土は見られない。

(c) 大刀形埴輪 (K 7)

勾金の一部分と考えられるが、大刀関係の出土品は、K 7 一点のみである。

(d) 馬形埴輪 (K 8)

K 8 は馬の尾である。尾先の整形にあたり、幅 2 cm、長さ 7 cm の円柱状のものに 2 cm 幅の粘土紐を巻き付け、ナデ調整を行っている。長さ約 1.5 cm の尾先と尾体の接合部には、粘土紐の巻き付けは認められない。尾体は中空である。2 cm 幅の粘土紐を長さ 7 cm 程巻き上げていき円筒形の尾体を整形する。内面は粗いナデ調整を施し、外面は丁寧な指ナデを施している。この尾先の凸部分と尾体の凹部分を組み合わせて接合し、ナデ調整後幅 7 mm の粘土紐を尾全体に螺旋状に巻き付けている。馬の尾は通常、粘土紐の巻上げによって形成されるが、K 8 の様な尾先と尾体の接合の仕方は珍しい。

(e) 蓋形埴輪 (K 10)

K 10 は蓋方埴輪の立ち飾り部の鱗部分である可能性が高い。

(f) 靱形埴輪 (K 11)

向かって左部分のみが出土している。本来表現されていると思われる鉄の部分はみられない。また、幅 4 cm の突出部分は背中に付くものと考えられ、靱を背負う武人の埴輪であったのではないかと推測される。この突出部分は背との接合部ということもあつてか、雑なナデによって靱の本体と接合され、靱表面の丁寧なナデ調整とは非常に対照的である。

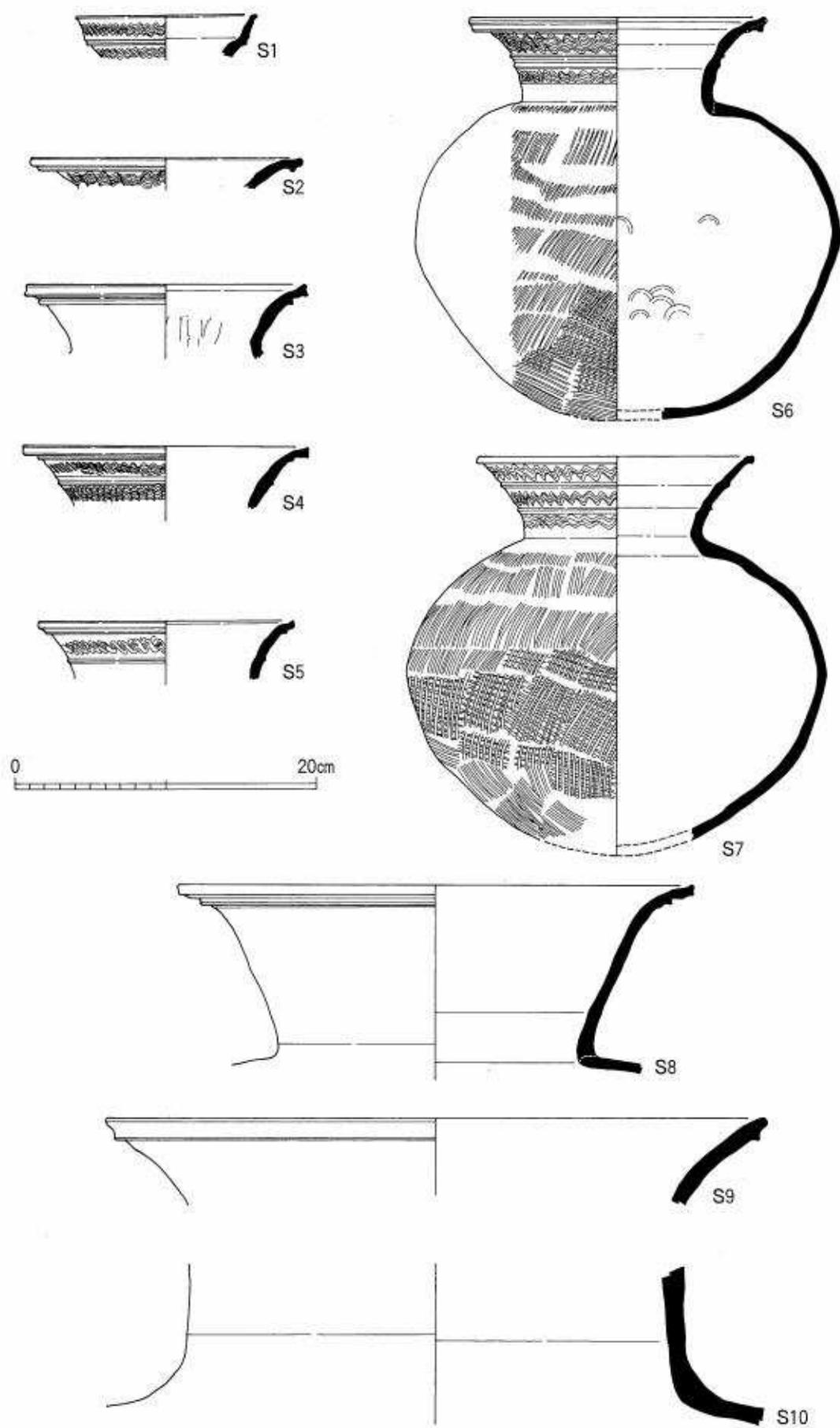
(2) 須 恵 器 (第 28・29 図、図版 27・28)

片鳥 1 号墳出土須恵器には原位置から検出したものがほとんどなく、その多くが墳丘盛土の流出土層内から転落した埴輪とともに出土している。前方部墳頂平坦面で出土した若干の小破片は、原位置に準じるものとみている。後円部墳頂からは須恵器を全く検出していないが、墳丘斜面に流出した出土位置から後円部墳頂平坦面上においても須恵器と埴輪を使用した祭祀を行ったと捉えている。

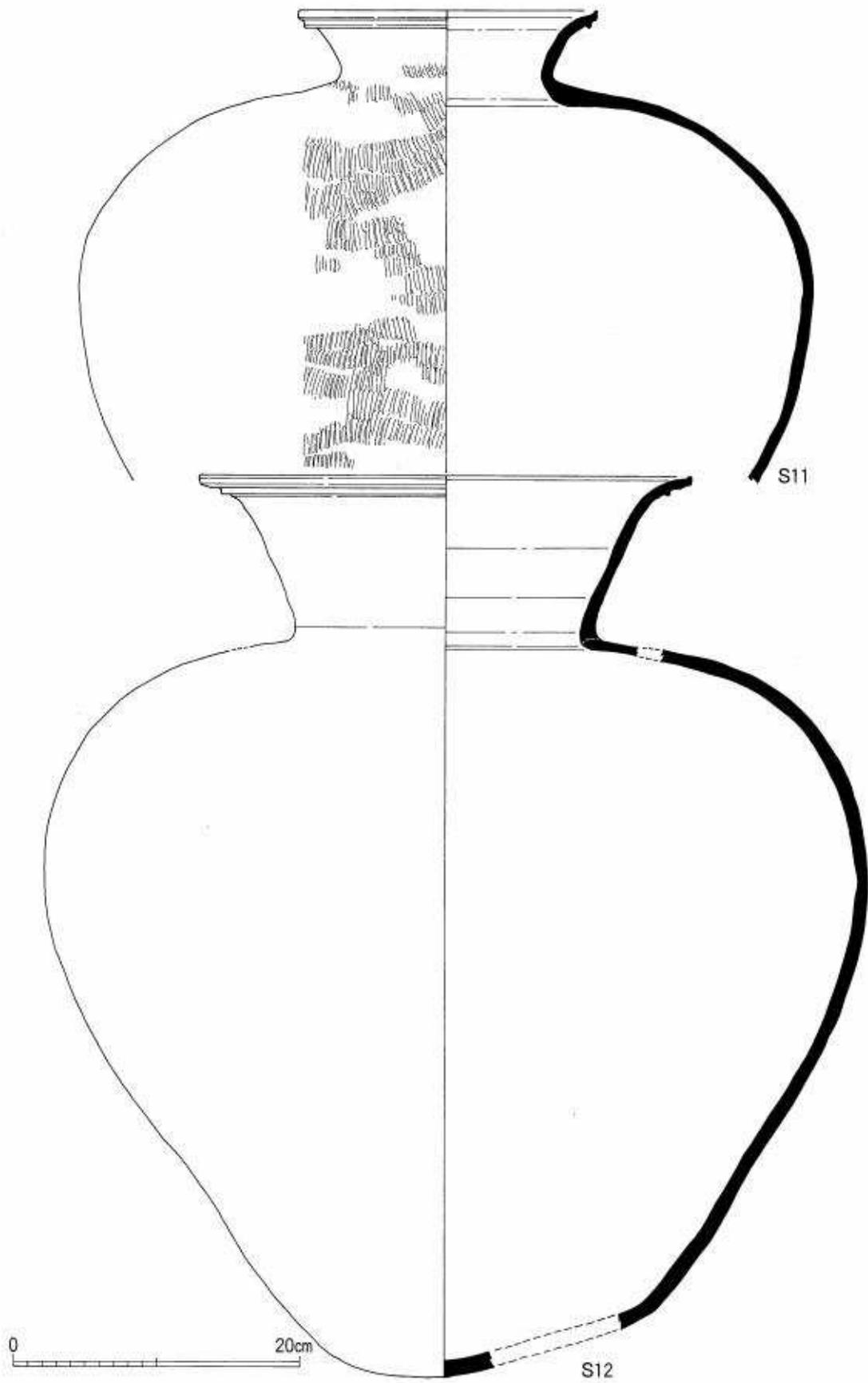
出土した須恵器の器種は甕と中型甕、大型甕が確認されるのみである。

甕はいずれも細片であり、図示したの 1 点のみである。第 28 図の S 1 は小型の甕で、口縁部と頸部の境界に摘み出しによる鋭い凸帯を巡らせ、その上下に櫛描き波状文を施すこの時期の典型的な甕である。ただし、口縁端部の内面に沈線を巡らしており、この特徴は陶邑古窯跡群にはない調整手法であるとの教示を受けた。口径は小片のため不確かなところも残すが復元口径 12.1 cm という数値を測った。図版 28 の S 13 は甕の胴部の最も張り出したところの破片で、その部位の上下に凸帯をめぐらし、その間に櫛描波状文を描き、円孔を穿っている。

中型甕は比較的多く出土しており、ほぼ完形に復元できた個体は 2 点あるが、いずれも細片を接合し



第28図 片島1号墳 須恵器実測図(1)



第29図 片島1号墳 須恵器実測図(2)

たもので、これは大型甕にもいえることであるが、故意に破碎したのではないかとみられる。口径はいずれも20cm未満で、S 7は口径19.4cm、器高26.8cmで、S 7は18.5cm、器高27cmである。口縁端部は上下に鋭い稜をもつもの（S 4、S 5、S 7）と口縁端部を丸味をもっておさめるもの（S 2、S 6）とがみられる。凸帯の位置は後者の方が口縁端に近くに巡らせている傾向をもち、古い特徴をとどめているといえる。大型甕の口縁端部の仕上げ方は中型甕と同じ傾向をもち、口縁端部の上下に鋭い稜をもつもの（S 8）と口縁端部を丸味をもっておさめるもの（S 9）があり、後者の方が古い特徴をとどめている。S 10とS 11は口縁端部に稜をもつが、どちらかといえば上方に拡張している。

S 2は小片で傾きや口径の復元には不安をのこす。復元口径は17.8cmで、口縁端部は丸くおさめ、口端近くに断面三角形のをめぐらし、その下に櫛描き波状文を施す。

S 3は中型甕としては頸部に櫛描き波状文を施さないもので、S 2と比べると断面三角形凸帯の位置が口端より離れていく。頸部内面に指ナデがみられる。復元口径18.4cmである。

S 4は口頸部2条の断面三角形をめぐらせ、その間および凸帯下に櫛描き波状文を施している。口端の断面三角形凸帯は口端より少し離れてめぐらせているのはS 3と同じである。復元口径は18.9cmである。S 5も口頸部に2条の断面三角形凸帯をめぐらし、その間に櫛描き波状文を施す。なお、この櫛描き波状文は2回以上重ねて描かれている。復元口径は16.8cmである。

S 6は口縁端部を比較的丸くおさめ、口端近くに断面三角形凸帯をめぐらせる。また、頸部中央にも2条一単位の凸帯をめぐらし、その上下に櫛描き波状文を施す。上の櫛描文の条数は12本であり、下のは7条である。体部外面には平行叩き目をのこしているが、体部上半の一部にはヨコナデで消されているところがある。体部内面は同心円文叩き目を消しているが、一部にその痕跡をとどめている。口頸部の内面には自然釉がみとめられる。

S 7の口頸部には3条の凸帯をめぐらし、凸帯によって3段に分けられた櫛描き波状文を施す。体部外面には平行叩き目と格子叩き目をのこしており、体部下半では格子叩き目の後に平行叩き目を施していることがその痕跡から読みとれる。体部内面は同心円文叩き目を消しているが、その痕跡が一部に読みとれる。体部上半には自然釉の付着がみとめられる。

S 8はS 12と同一の個体である。口径34.2cm、最大腹径57.6cmの大型甕に属し、口縁部端面は上下に稜をつくり、端部近くに凸帯をめぐらしている。体部外面には縦方向の平行叩き目がみとめられる。口頸部ヨコナデ調整で仕上げているが、その前に平行叩き目ほどこされていたことがその痕跡が読みとれる。口頸部内外面に自然釉の付着がみとめられる。

S 9とS 10は焼成や胎土等の特徴から同一個体とみられる。S 9の口縁部は歪み等のため復元口径に不正確さが残るが、その口径は40.8cmを測る。口縁端部は丸くおさめ、口端にきわめて近い位置に凸帯を巡らし、この時期としては古い特徴をとどめる大型甕である。口頸部内外面に自然釉の付着が認められる。S 10には自然釉が認められ、口頸部にヨコナデ、内面に斜め方向のナデが認められる。

S 11は最大腹径51.4cmという大きさに比較して口径20.8cmの口頸部の小さいな大型甕で、口頸部の高さも4.5cmとS 12と比べると低い。口端近くに凸帯1条をめぐらし、体部外面には縦方向に平行叩き目を施している。体部内面は叩きの種類のわからないほどナデ消している。

これらの須恵器はTK208型式に相当するとみてよく、この時期として一般的なものとしてはS 1の甕、大型甕では、S 11・12が、中型甕ではS 4・5・7などであり、S 2・9はTK208型式の範疇でも古い特徴をのこしている。

第3節 片島2号墳の調査

1 墳形と規模・外部施設

2号墳は1号墳の前方部の南側に近接して築かれており、その基底部間の距離は、僅かに1.1m程である。墳丘は1号墳同様、西側部分が大きく削り取られており、現状は東側半分が残存しているに過ぎない。墳形は円墳であり、幅約1.5m、深さ約0.2mの周溝をもっている。墳丘の規模は径12m前後、周溝を含めた規模は径14m前後である。

周溝は地山面を掘りくぼめて作られており、内部には暗褐色土が2層に分かれて堆積していた。周溝内からは転落した埴輪片、坏、壺などの須恵器片が出土しているが、それは2層に分かれる暗褐色土の内、下層に多く含まれており、上層から出土したものは少ない。また、遺物は周溝の北東から東側部分に集中しており、西から南西部分では検出されていない。その他、周溝内からは炭化物の出土も認められている。

墳丘は地山面を整形した後、その上面に厚さ10cm前後に暗褐色土を盛り、墳丘面を整形している。調査時点では暗褐色土上面に後世の流土（黄褐色土）が10cm前後堆積しており、さらに、上層に腐植土が堆積していた。流土中からは、12世紀後半代の須恵器碗の破片が出土しており、この時期に墳丘面がならかの形で再利用されていたことを窺わせる。

墳丘の頂面には、やや赤みを帯びた褐色土が、後世に盛土されており、本来の墳頂部は、かなり広い平坦面をもっていたことが確認された。

埴輪は大部分が抜き取られているが、墳丘の北西側部分で4本分が現位置を保った状態で検出されている。

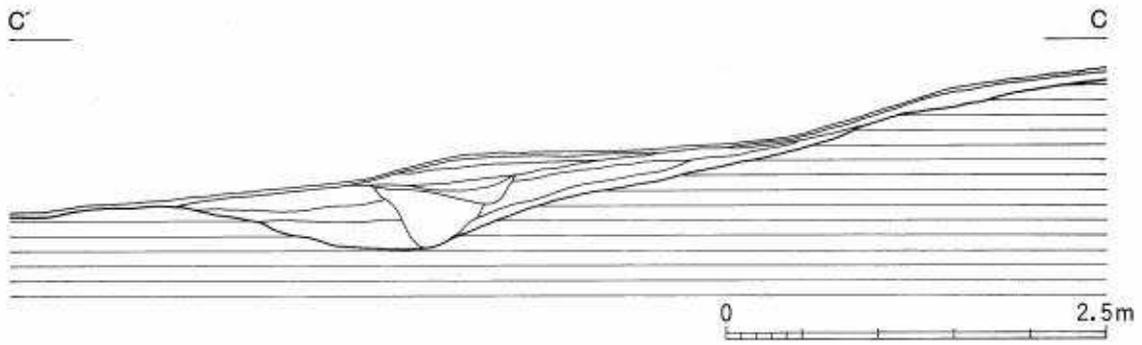
埴輪1（E44）は墳丘の最も北側で検出されたもので、長軸約35cm、短軸約25cm、深さ約5cmのほぼ楕円形の平面形状を呈する掘り方内に直径約20cmの円筒埴輪を埋置したもので、埴輪は1段目のタガ部分以下が残存していた。

埴輪2（E45）は埴輪1（E44）から芯々間距離で約1.1m南に位置している。直径約35cm、深さ約10cmのほぼ円形の平面形状を呈する掘り方内に直径約20cmの円筒埴輪を埋置したもので、埴輪は1段目のタガ部分以下が残存していた。また、埴輪の西側には埴輪片が掘り方の上面で転落した形で検出されている。

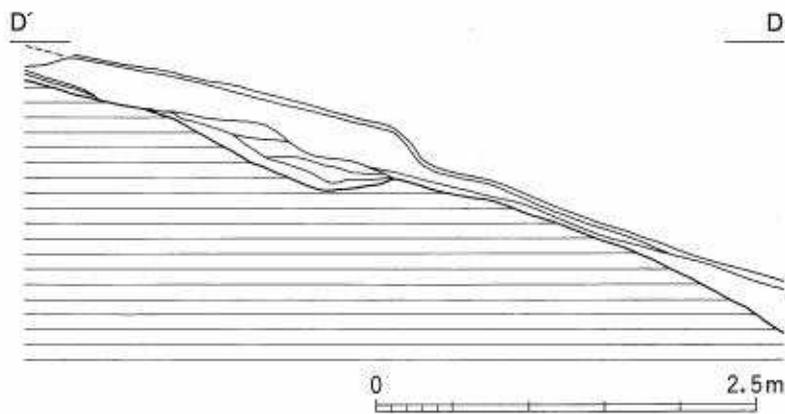
埴輪3（E46）は埴輪2（E45）から芯々間距離で約1.1m南に位置している。掘り方はすでに削平されて、調査時点では検出されなかったが、直径約20cmの円筒埴輪の基底部のみが、1/2程残存していた。

埴輪4（E47）は埴輪3（E46）からやや離れて、芯々間距離で約1.6m南に位置している。直径約35cm、深さ約10cmのほぼ円形の掘り方内に、直径約20cmの円筒埴輪を埋置したもので、埴輪の1段目のタガ部分以下が残存していた。

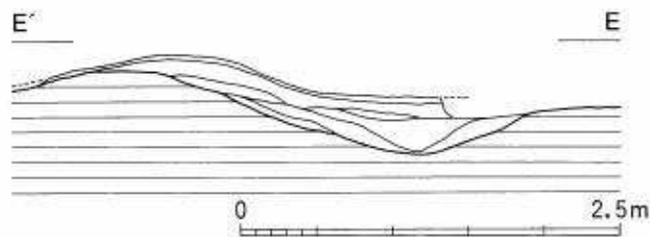
また、この他、埴輪4（E47）から約7m南の墳丘の南西部分でも、埴輪の抜き取り跡と考えられる、ビットが検出されている。



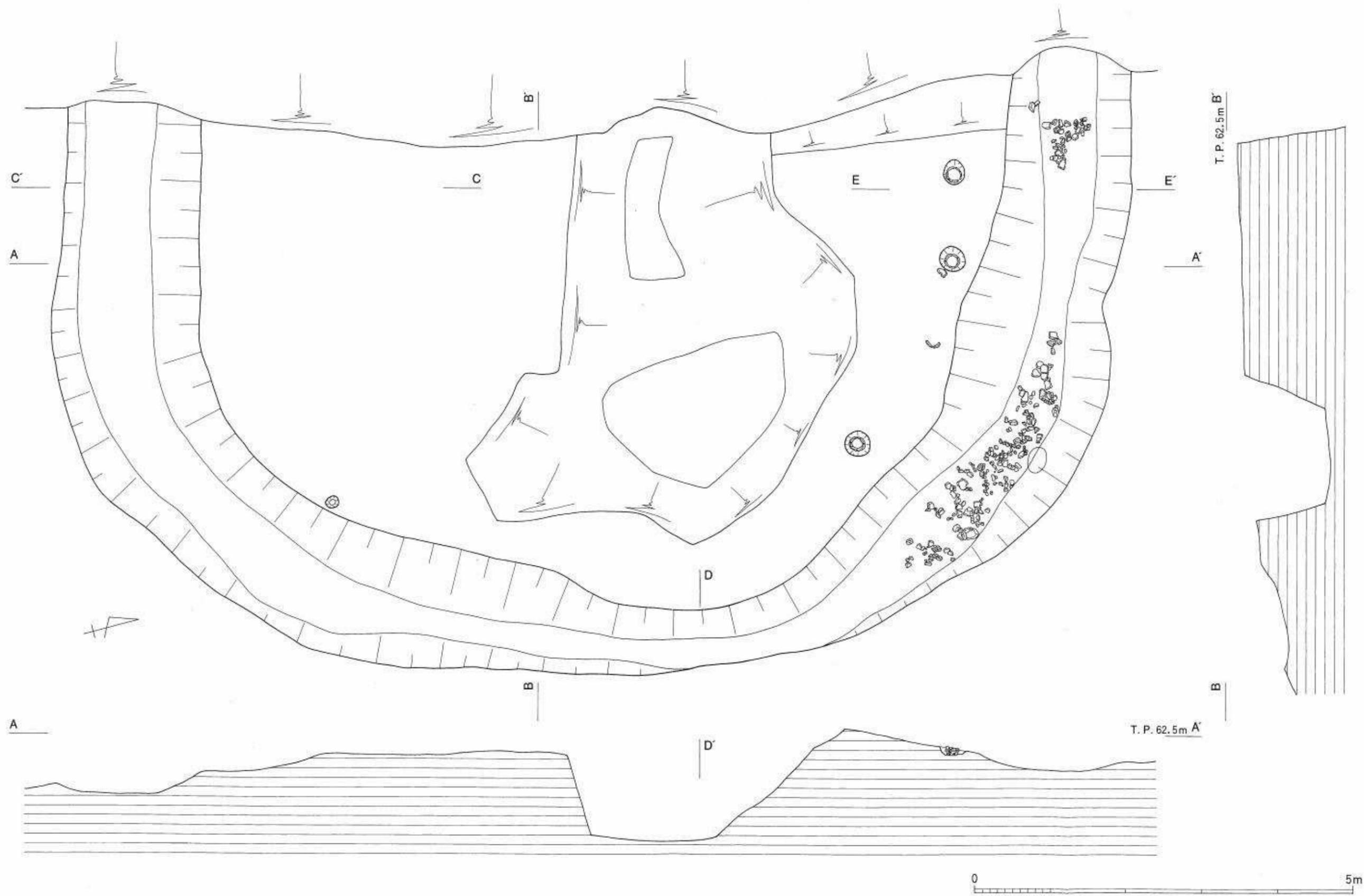
第30図 片島2号墳 墳丘断面図 (C-C'ライン)



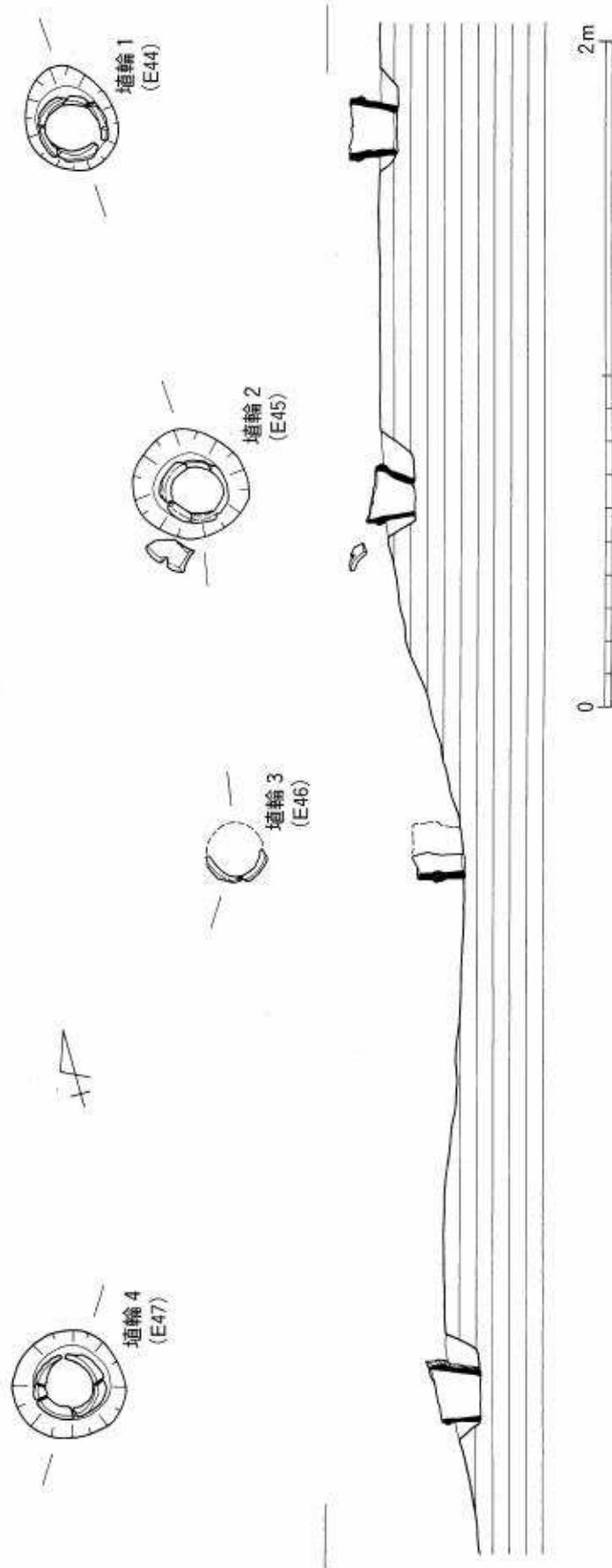
第31図 片島2号墳 墳丘断面図 (D-D'ライン)



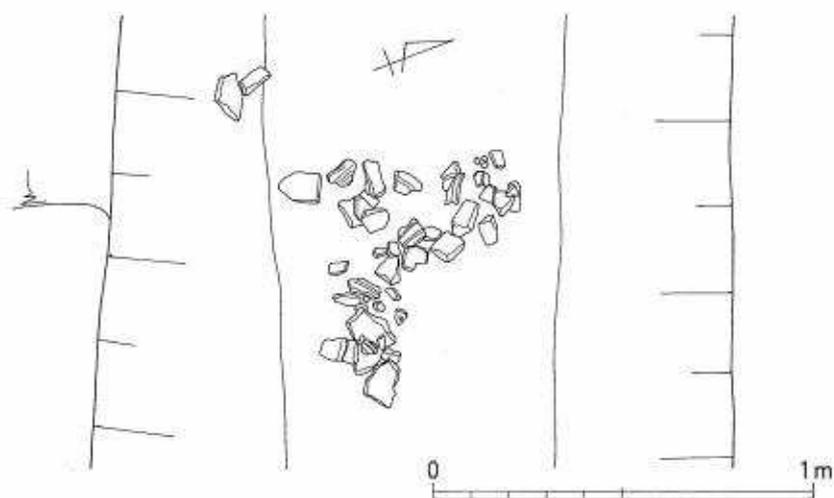
第32図 片島2号墳 墳丘断面図 (E-E'ライン)



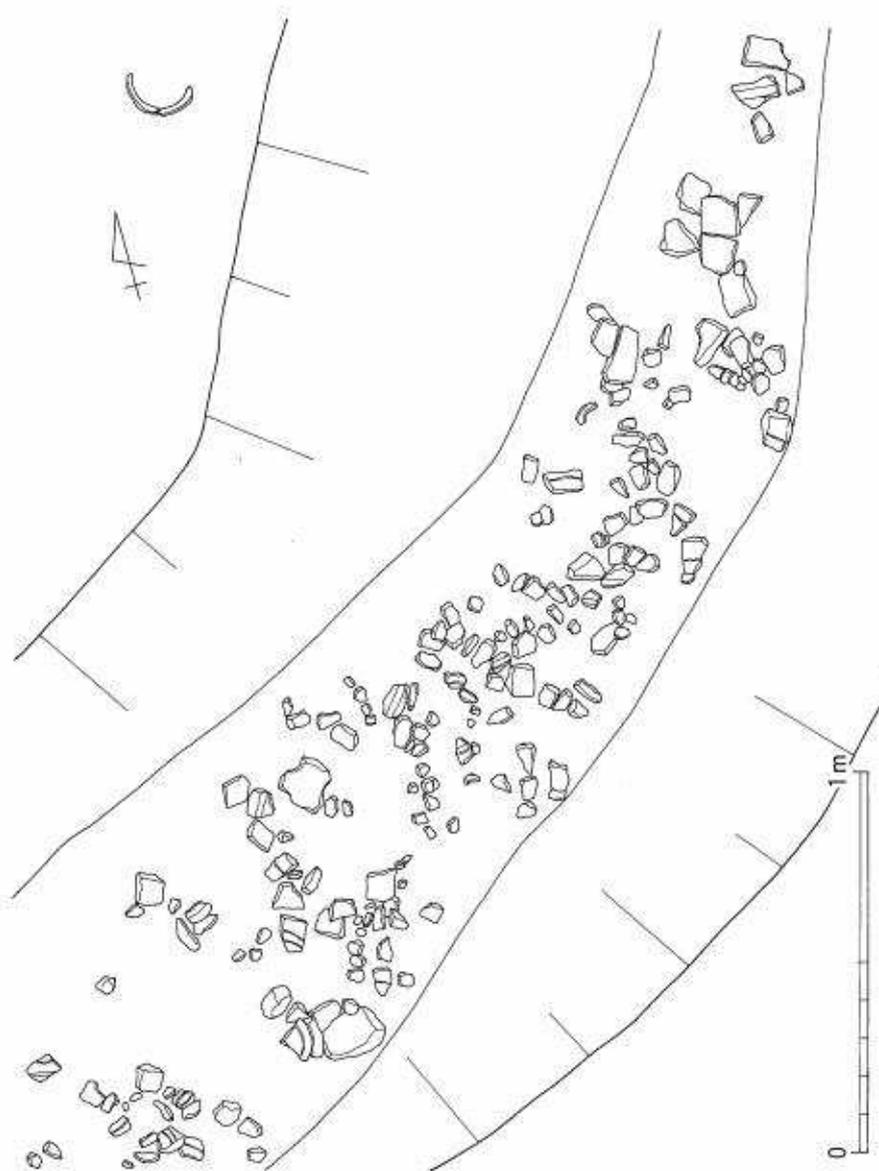
第33图 片島2号墳 遺構図



第34图 开 equal 2号埴 円筒埴輪配置图



第35图 片島2号墳 周溝内遺物出土状況図(1)



第36图 片島2号墳 周溝内遺物出土状況図(2)

このように、2号墳では、周溝の内側20～50cmの所に、ほぼ1.1～1.6m間隔で、ひとつずつ掘り方をもちた円筒埴輪が樹立されており、1号墳の埴輪列が溝状の掘り方内に密接して樹立されているのとは違っている。

2 埋葬施設

2号墳は牧場造成の際、墳丘の西側部分が大きく削平されているものの、東側部分は残存しており、墳丘全体の約1/2は残存している。しかし、墳頂部には、東西約5.5m、南北約4.5m、深さ1.5m以上にも及ぶ攪乱坑が掘られていて、主体部については不明である。

攪乱坑中には花崗岩の風化パイラン土が堆積しており、埋土中には遺物が含まれていない。このため、この攪乱坑がいつ掘られたかについては、明確にできなかった。

以上述べたように、2号墳は墳丘の西側半分を牧場の造成によって削平され、また、墳頂部も後世の攪乱坑によって大きく破壊され、内部主体が確認できないという非常に遺存状況の悪い状態で調査された。従って、この古墳の所属時期、埴輪列の当初の形態などについては、僅かに残された周溝内の須恵器片及び埴輪片などから復原せざるをえない。

まず、埴輪列であるが、ほぼ原位置を保っていると考えられる4本の埴輪は墳丘の北東部分の周溝の内側で検出されている。埴輪間隔は埴輪1(E44)から埴輪3(E46)はほぼ1.1mの等間隔で配置されているが、埴輪3(E46)と埴輪4(E47)の間隔は1.6mとやや広がっている。

1号墳のテラス面には円筒埴輪と朝顔形埴輪の2種類の埴輪が使用されており、2号墳の場合も埴輪1～3と埴輪4の種類が違う可能性もあるが、2号墳の場合、埴輪の遺存状況が1号墳に比べて悪く、全て基底部しか残存していないため、円筒埴輪か朝顔形埴輪かを区別することはできなかった。

また、当初の埴輪の個数であるが、現在、埴輪が残っている部分は墳丘全体のほぼ1/4にあたりと考えられる。従って、それから、全体を復原すると、ほぼ16本の埴輪列が1.1～1.6m間隔で配置されていた状況が復原できる。

次に、古墳の所属時期であるが、周溝内から検出された須恵器片から6世紀前半の時期が考えられる。1号墳が5世紀後半に比定されていることから、2号墳の被葬者には1号墳の被葬者の系譜を受け継いだ人物が想定できる。

3 出土遺物

(1) 埴輪

樹立円筒埴輪は、4個体の基部が出土している。転落埴輪E49・E50は、胎土、底径、器厚からみて樹立埴輪である可能性が高い。他の転落埴輪は、円筒埴輪の口縁部1個体、朝顔形円筒埴輪の口縁部1個体、また、朝顔形円筒埴輪のあまり張らない肩部分1個体であるが、後2者は器厚、胎土の点で同一個体と判断することができない。形象埴輪は、家形、蓋、冑の破片が多数出土している。特に蓋、冑の個体数は1号墳に比べ多い。分類については、1号墳を基に行う。

A. 円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪

(a) 形態と法量

底部径は、樹立円筒埴輪、転落円筒埴輪、共に12.4～15cmの間にある。これは、1号墳における最小値にはほぼ重なる。転落円筒埴輪の口縁径は22.8cm、朝顔形円筒埴輪の口縁径は39.8cmである。口縁径は1号墳と大差はないが、やや小さめの埴輪といえる。また、2号墳では、1号墳で述べたような2種類の円筒埴輪はなく、3条の突帯によって4段に区切られる円筒埴輪のみで構成されるようである。透孔については、E52にみ確認できる。その他、朝顔形円筒埴輪については、残存率が低いため、推定しえない。

1号墳との決定的な差は、須恵質の埴輪がまったく出土していないということである。

(b) 成 形

基部は、幅3.8～5.8cmの粘土帯で作られている。粘土帯接合部の確認は、樹立円筒埴輪のみ確認でき、全て右回りである。粘土帯上には、2～3.5cmの粘土紐を積み上げているが、積み上げ痕は、内外面調整によって殆ど消されている。

(c) 内外面調整

円筒埴輪の基底の外面調整は、「タテハケ、ヨコナデ」「タテハケ」の組み合わせのみだが、半数は磨滅のため調整不明である。転落円筒埴輪の口縁部（E52）は、ヨコハケのみ、体部はタテハケ後ヨコハケ調整を施している。朝顔形円筒埴輪E48は、タテハケのみである。E45、E52で使用されているヨコハケは、いわゆるB種ヨコハケである。工具を器壁から離さず、約6cm間隔で休止させており、基部、体部、口縁部に関係なく施されている。

内面調整は、転落円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪はヨコハケのみの調整を施し、それ以外は左上がりの指ナデ調整で、E44のみ右上がりのナデ調整を施しており、突帯接合部の内面には指頭圧痕が残る。

B. 形象埴輪

2号墳で出土した形象埴輪は家形埴輪、蓋形埴輪、甲形埴輪、冑形埴輪であり、全て破片である。

(a) 家形埴輪（K13・K14・K15・K16・K17）

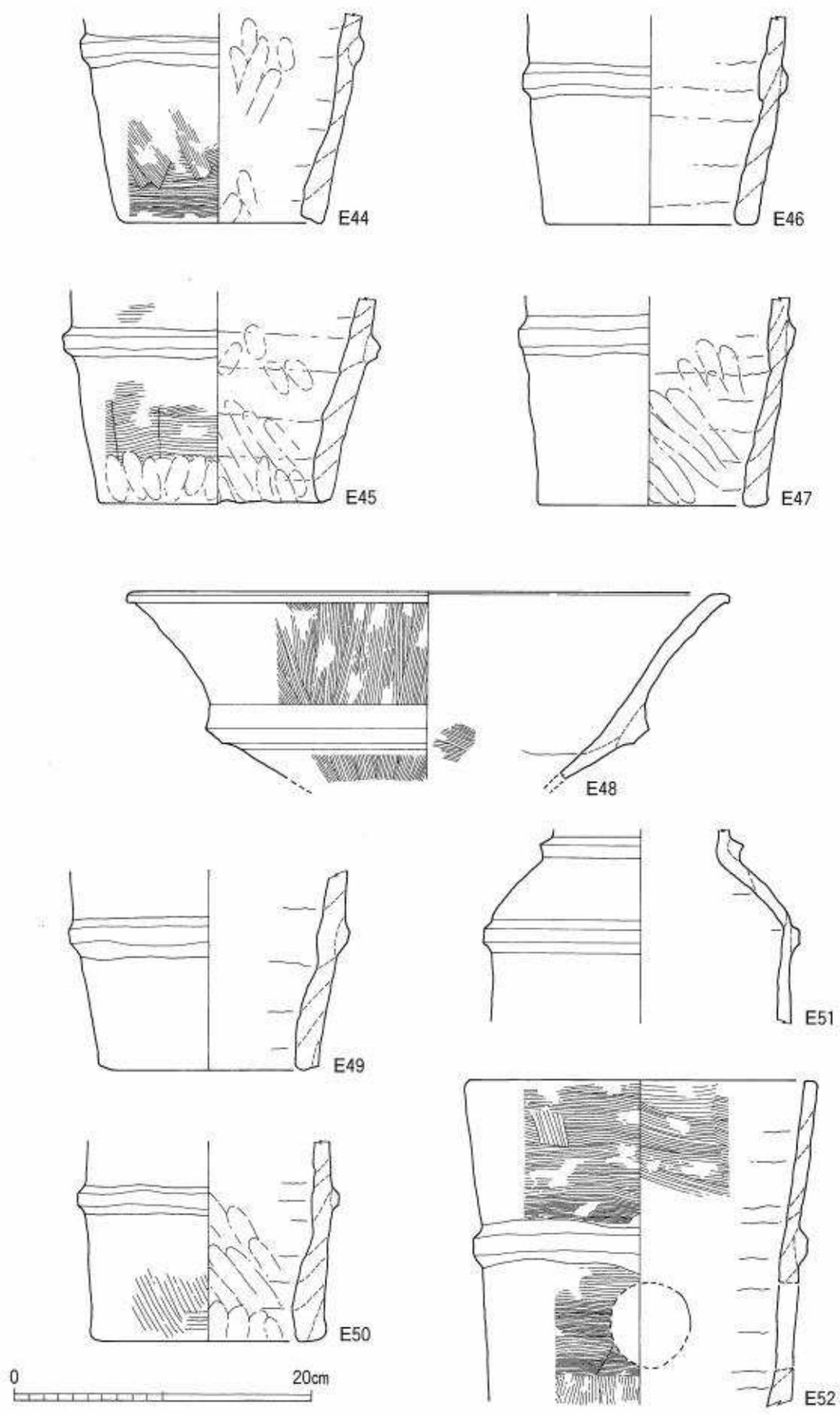
K13は、破風板に続く屋根頂部であるが、屋根頂部から左下へ一本一本の線刻があり、全面丁寧なナデ調整が施されている。屋根部と室部の痕跡がある。

K15は棟柱である。調整は確認できない。

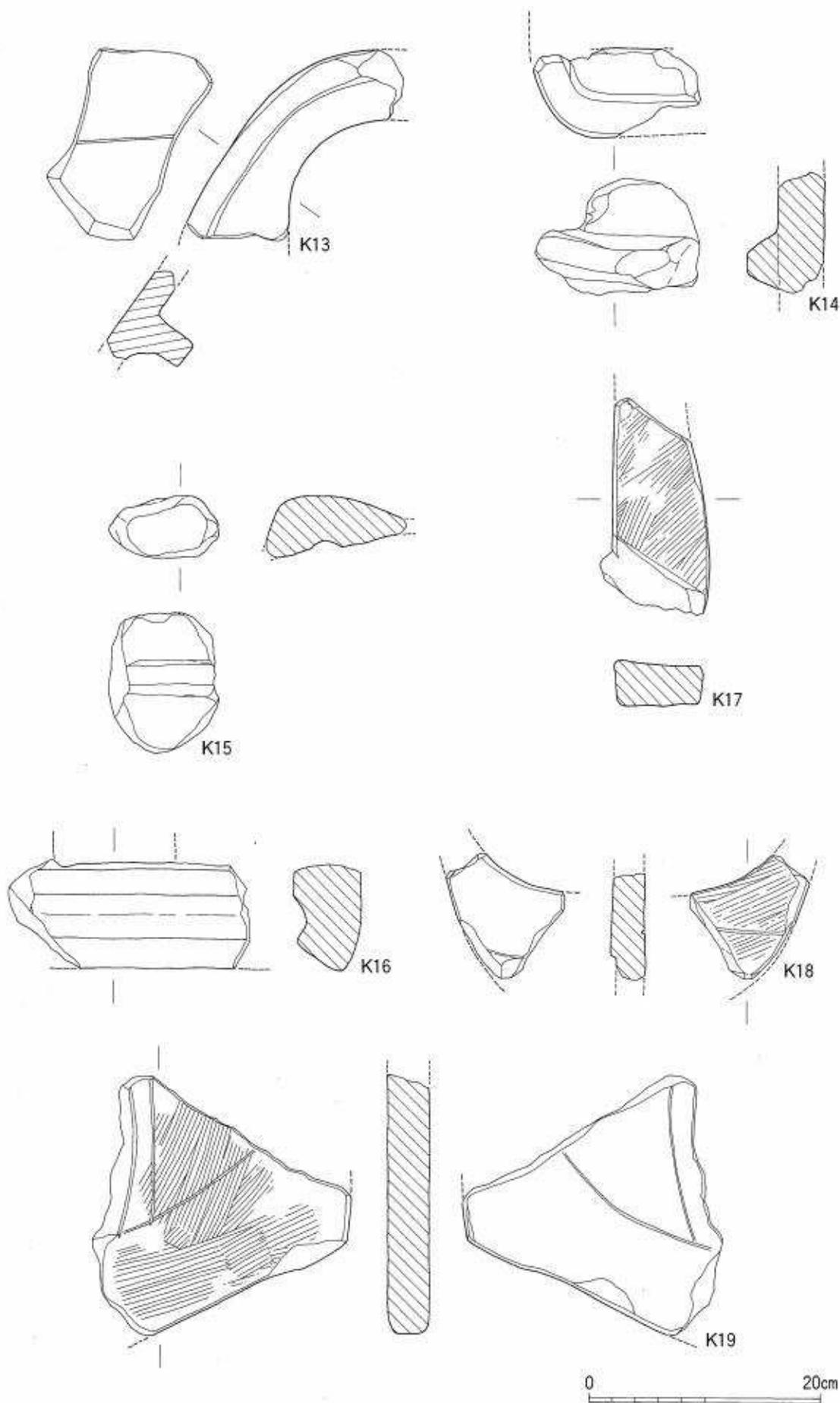
K15は基部のコーナー部分である。1号墳に比べ側板部分がかなりの丸みをもち、側板の下部側面が上向きに反っている。壁と側板の接合部は粗いナデ調整が施されている。

K17は壁に付随する柱と考えられる。外に接する面は、ナナメハケ調整が行われ、裏面は粗いナデ調整を施している。

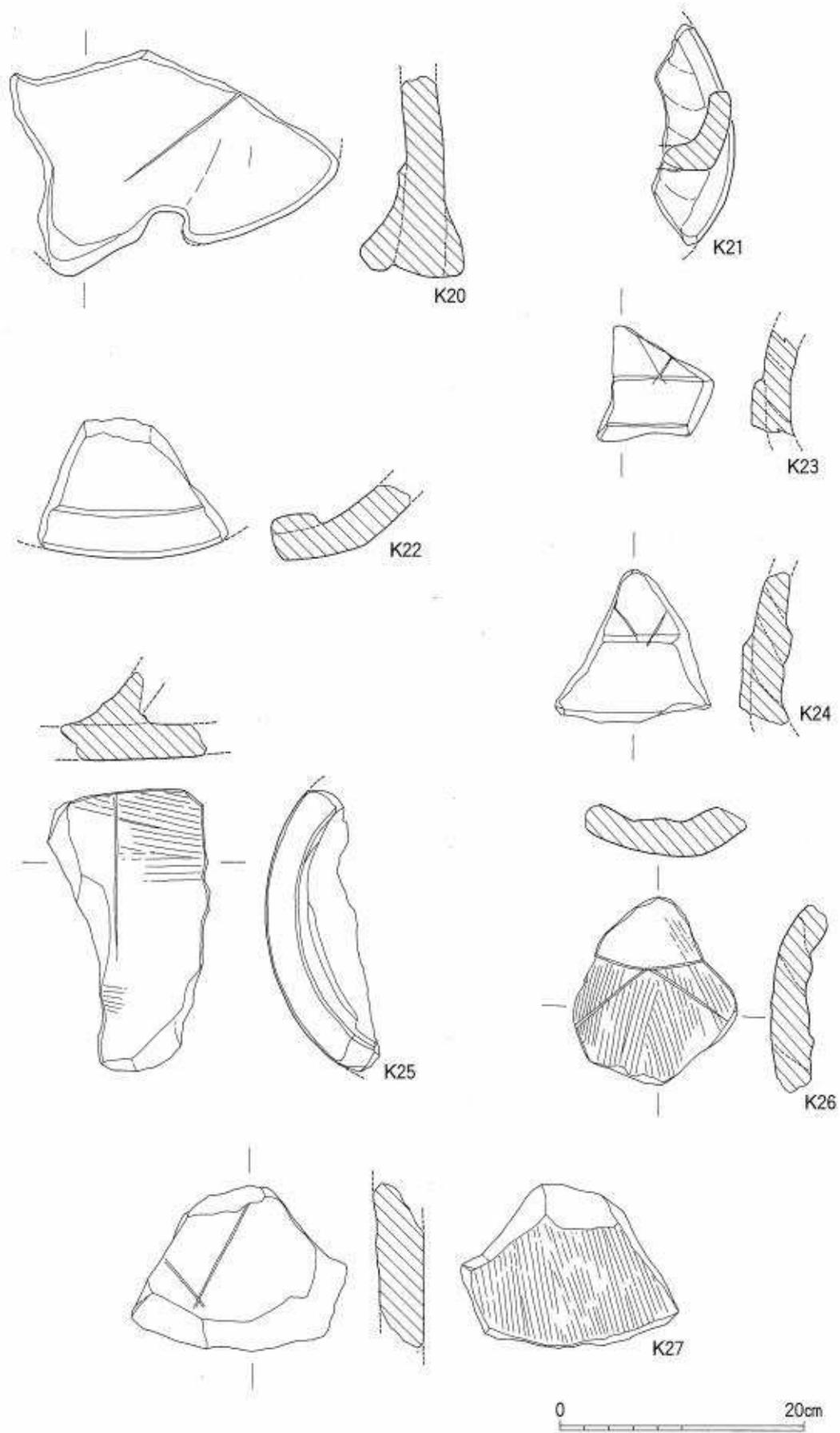
K16は基部である。側板上面の、向かって左端より2cmから右端より2.6cmの間5.1cmは、戸口の可能性が高い。他の基部とは異なり、基部最下部は上に反り、側板と壁の接合痕は見られないが、基部底面に何らかの接合痕が確認できる。角部分は、K15程丸みを帯びず、ナデによる調整で形成している。



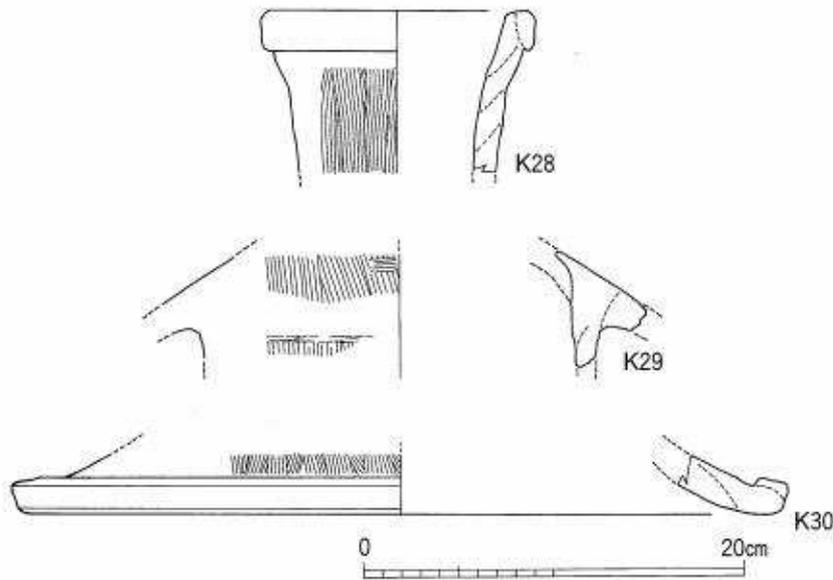
第37图 片島2号墳 円筒埴輪実測図



第38图 片岛2号墳 形象埴輪実測図(1)



第39図 片島2号墳 形象埴輪実測図(2)



第40図 片島2号墳 形象埴輪実測図(3)

側の側面は、平行に近いぐらいの曲線の刻線を配している。また、もう片面は、ハケ調整は見られず、ナデによるものと思われる。

K20は、飾り板の中心部に近い破片である。受部に近い中心部は、粗い指オサエ調整をしており、指頭圧痕が残る。受部と接する所は、板状工具によって凹面をつくり、ナデによって受部との対応面を調整したと考えられる。中心部から飾り板上部にかけて一本の刻線がある。それに対してもう片方の面は、指頭圧痕もなく、線刻もない。非常に分厚く、粗雑な作りである。受部は、立ち飾りの接する部分のみ残っており、それがK21である。中心部から外に向かっての右回りのナデ調整後、口縁部をヨコナデで調整している。

飾り板受部を受ける棟受部より以下の笠部まではK22、K28である。

K28の軸受部は、下端突帯は欠落しているが、約2分の1残存している。約2.2cm幅の粘土紐の積み上げをし、内面は指ナデ調整する。外面をタテハケ調整後、軸受部の上端部には1.6cm幅の粘土紐を巻き付け、上端面は丁寧なナデ調整によって接合痕は残っていない。次に、笠部と台部の接合部についてだが、内面の調整は、摩滅の為不明、笠部外面はタテハケ調整が施され、台部外面調整もタテハケで、その後笠部と台部のヨコ方向の指ナデ調整を施している。笠部下端部の内外面調整は、残存部が少ない為不明である。

笠部先端部のK22・K28は、両者とも先端に幅2cmの粘土紐を上部に貼り付け、ナデ調整を施す。

K22は、裏面先端部から内側約4.5cm幅の、ヨコ方向の指ナデを行っている為、内面は滑らかな曲線に描かず、「く」字形になる。内外面調整は、いずれも磨滅の為不明。

K28先端部は、粘土紐の貼り付けの為の強いヨコ方向のナデ調整の為、接合部がやや凹状になっている。ヨコ方向のナデ調整は、笠部の外面調整はタテハケ後施されている。

(c) 冑形埴輪 (K23・K24・K26)

K23・K24は衝角付冑の頭鎧と思われるが、K23、K24は、突帯の幅が明らかに違う為、同一個体と

(b) 蓋形埴輪

(K18・K19・K20・
K21・K22・K28)

K18は、立ち飾りの飾り板に付随する簷と考えられる。片面はハケ仕上げ、もう片面は磨滅のため不明である。両面とも簷の付け根部分に向かって一本の刻線がある。

K19は飾り板と考えられる。片面は方向の違うハケを施した後、曲線を線刻し、それを切る様な直線を施している。刻線の向かって左

は認めがたい。K23・K24は1.8cm程の粘土紐を接合し、内面をナデ調整、外面をナデ調整後頸鐙の突帯部を接合したものと考えられる。また、この突帯部を頂点とする、「V」字形の線刻が施されている。K26は、衝角付冑の頂部と考えられる。内面は、接合痕の残る粗いナデ調整を施し、外面はナデ調整後、タテ方向のハケ目後、三角板皮綴冑を表現したのか、鉢巻き状に一本の線刻を配し、その線刻を頂点とし、逆「V」字に広がる線刻を施している。

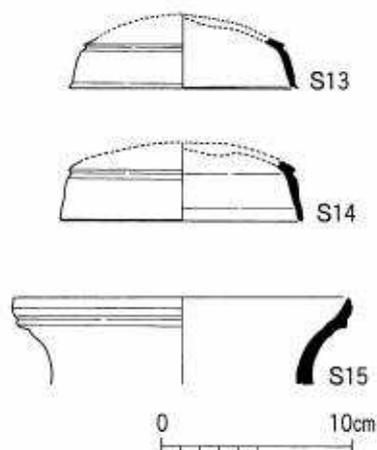
(2) 須 恵 器

S13、S14は須恵器の蓋で、小片のため坏蓋か有蓋高杯の蓋かをみきわめるのは困難であるが、とりあえず坏蓋であろうとして図示している。S15は中型甕であるが、口径を復元できるほどの破片でなく他遺跡を参考に口径を推測し、図示している。

S13は復原口径15.0cmで、天井部と口縁部を分ける凹線は明瞭で鋭い。口縁端部は明瞭な段をなす。S14は復原口径14.0cmで、天井部と口縁部を分ける凹線は明瞭である。口縁端部はS13のように段をなさず、口縁端面は稜角をなす。

S15は口縁部が外反し、口縁端部は肥厚し、そこに凹線をもつ。1号墳にみられた波状文や凸帯はすでに消失しみられない。

これらの須恵器の型式はTK23～TK47である。

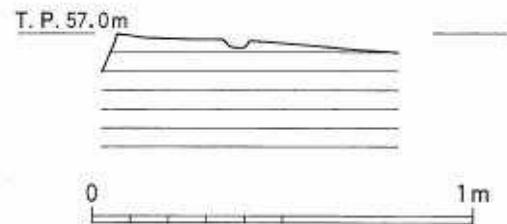
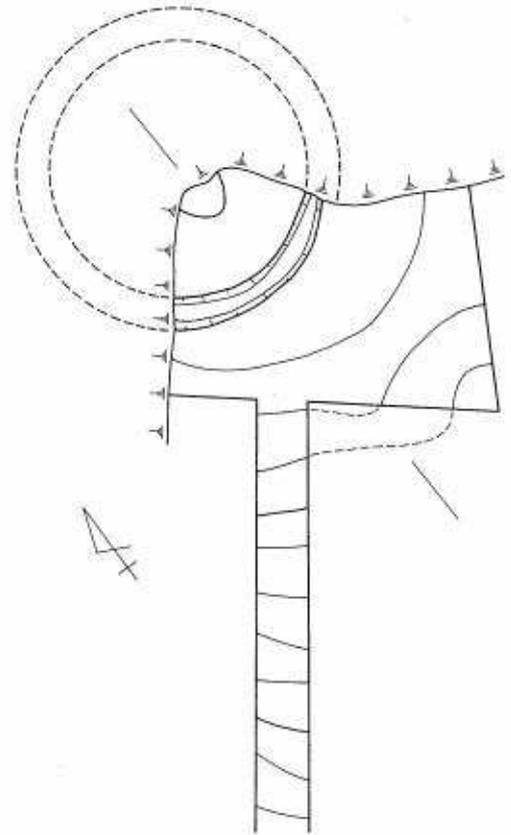


第41図 片島2号墳 須恵器実測図

第4節 片島3号墳の調査

今回の調査の対象地は当初は片島1・2号墳及び南山散布地の2ヶ所であった。しかし、調査の進展につれて、2号墳の南側の尾根上に、古墳の有無を確認するため、トレンチを入れた所、尾根上に弥生時代の高地性集落の存在が確認された。また、1号墳の北側の丘陵上にも、古墳状隆起の存在が認められたため、この地点(片島第4地点)にも確認調査を実施することになった。

片島4地点は片島1号墳とは鞍部を挟んで、北へ約50mの丘陵の頂部に位置している。調査地点の位置、外形から見て、小規模の円墳の存在が想定されたが、1号墳・2号墳同様、南山牧場造成の際、北側部分、西側部分が大きく削り取られて崖面となっており、かりに円墳が存在しても、全体の3/4程度は削平を受けていることが予想された。今回の調査では、残存する古墳状隆起の南側に、幅1m、長さ15mのトレンチを設定して、古墳の有無を確認した。その結果、トレンチ内で幅70cm、深さ20cmの古墳の周溝と考えられる溝が検出されたため、トレンチの北側を拡張して、東西約8.5m、南北約6m、面積約51㎡の部分について、全面調査を行った。調査の結果、溝はほぼ円形に巡ることが確認され、それを古墳の周溝と考えた場合、復原される古墳の規模は径7m前後の円墳であろうことが推定された。しかし、周溝の内側の墳丘部からは埋蔵施設は検出できず、また遺物の出土も全く見られなかった。したがって、これを、古墳と断定することはできないが、丘陵の頂部に位置していること、周溝と考えられる溝がほぼ円形に巡ること、調査以前に崖面から須恵器片が採集されていることなどから、古墳である可能性が高いと考え、片島3号墳とした。



第42図 片島3号墳 墳丘実測図

第5節 片島遺跡の調査 — 高地性集落の調査 —

1 遺跡の位置

片島遺跡は、揖保郡揖保川町方島に所在する弥生時代中期後半に営まれた臨時的・一時的な遺跡である。遺跡は現在の片島の集落の西側に位置する標高約40m～60mの低丘陵上に立地する。

低丘陵頂に立地する片島古墳群からみれば、片島2号墳から南東方向にのびる狭隘な尾根上に集落が営まれていた。いいかえれば、片島2号墳から片島の集落の方向にのびる狭隘な尾根上に遺跡が立地していることになる。この尾根の前方は谷状地形を呈しており、南北方向に別の丘陵尾根が張り出しており、現在の片島集落はその各々の山裾にあり、この谷状地形の入り口の南北をおさえているような形で位置している。

遺跡からの視界は限られており、片島の集落とその方向にある正條端付近の揖保川を指呼の間にとらえることができるのみである。これは、遺跡の立地する狭隘な尾根が、谷状地形の南北にある別の丘陵尾根にその視界がさえぎられているためである。

遺跡は片島集落との比高差は20～40mという数値を測る弥生時代の高地性の遺跡と捉えられる。

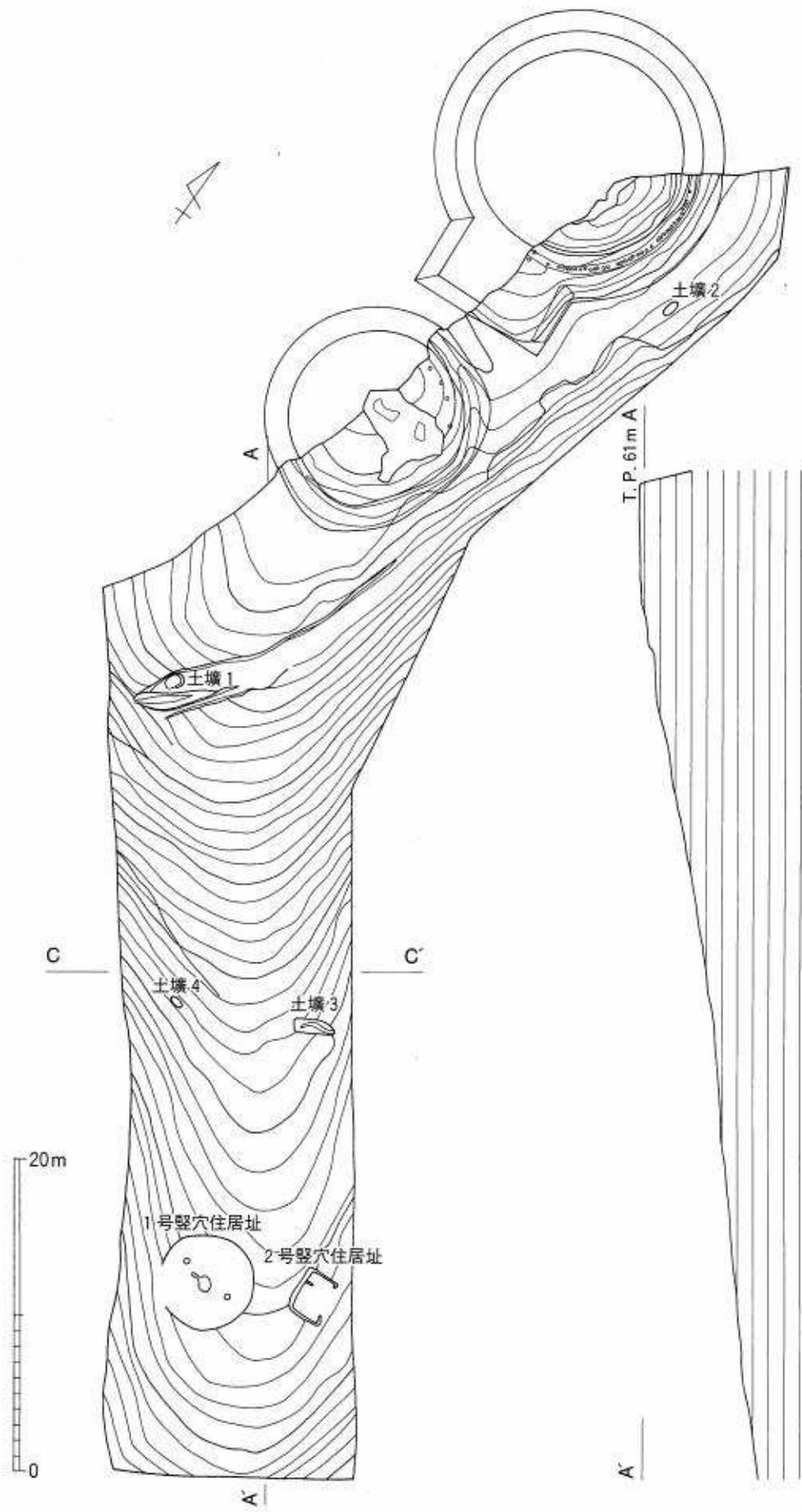
弥生時代の低地の遺跡としては、現片島集落と重なるように片島低地遺跡が周知されており、この遺跡の内容はいまひとつ明確でないが、広い範囲に土器が採集され、この地域の弥生時代の拠点集落とみられる。このようにみれば、片島低地遺跡が経営していた高地性集落ととらえることができるであろう。なお、片島遺跡からは揖西平野は丘陵に遮られまったく望見することができない。

2 遺 構

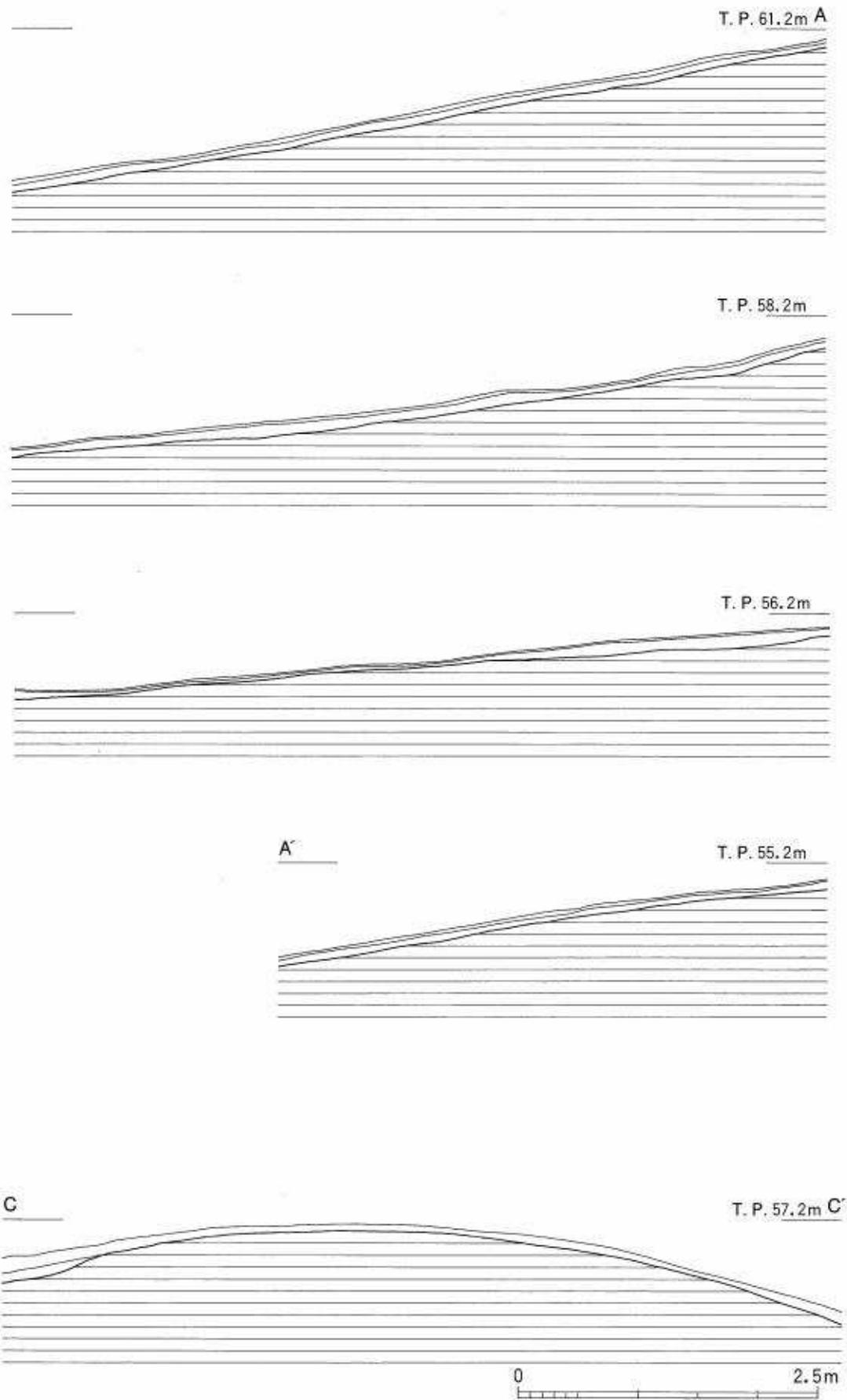
遺構としては、竪穴住居址2基、段状遺構1基、土壌4基が検出されたのみであり、遺物の出土量も約2,000㎡という比較的広範囲にわたって調査したにもかかわらずきわめて少量しか出土していない。遺構や遺物のこのような状況からみても、恒常的に居を構えた集落とは見られず、ある目的をもった一時的な集落ととらえることが妥当であろう。

遺構の配置は、丘陵から派生する狭隘な尾根の先端の標高40m付近に竪穴住居址2基を検出した。両住居址は尾根稜線をはずし東西に築かれている。1号竪穴住居址が西側に、2号竪穴住居址が東側につくられ、その間の距離は2.4mである。竪穴住居址から北西方向40m離れた高い地点に段状遺構1基と焼土壌1基を検出した。この地点は丘陵頂部と派生する尾根を分ける付け根部分にあたる。土壌3と土壌4は竪穴住居址と段状遺構のほぼ中間の尾根の東西斜面から検出し、土壌3は東斜面に、土壌4は西斜面である。土壌2は片島1号墳の西墳丘基底から1.8m離れた斜面から検出された。

段状遺構、土壌からは土器の出土がなく、厳密な意味での所属時期は明確でないが、この丘陵上には弥生時代の集落が営まれて以降、丘陵頂に古墳が築かれたのみで、それ以外に人間の活動の痕跡をとどめる遺物が出土していない。これらの遺構の配置から消去法をとって竪穴住居址と同じ弥生時代中期の所産と捉えている。



第43图 片島遺跡 遺構图



第44図 片島遺跡 土層断面図

(1) 1号竪穴住居址

1号竪穴住居址は尾根斜面の緩やかな傾斜地に、黄褐色地山層を掘り込んでつくられた円形の住居址である。壁体や壁溝の検出状況からその全景はほぼ把握できるが、傾斜地の竪穴住居址の通例として、低い方の南西部分の壁体や壁溝の一部や流失して遺存していなかった。また、この部分の床面には盛土による貼床的な手法によって床面（第45図網目部分）がつくられていることが認められた。その他の床面は地山面である。このことから類推して、遺存していない壁体も盛土によって形造られていたとみてよいであろう。

壁溝の検出状況から、この住居址は建て替え時に一部拡張を行っていたことがわかる。拡張前の壁溝の痕跡は北半分に認められるのみである。その壁溝はつながっておらず、途切れた状態で検出されている。これは拡張時に床面を少し深くしたのが原因しているかもしれない。東側の壁溝は一見直線的にみえるが、拡張後の南側の壁溝も直線的であること（第45図、図版18下）、拡張前の西側の壁溝が弧を描いていることなどから、拡張前の竪穴住居の平面形を方形と捉える必要はなく、拡張後と同じ円形の竪穴住居と捉えて間違いのないであろう。

この竪穴住居は、建て替えに伴い主柱穴の位置を変えず、北半分を一回り大きくしたとみられる。

拡張後の竪穴住居址は、径6.1m前後の規模で、床面積約29.2㎡である。拡張前は若干小さく約5.0mである。壁体の高さの良く遺存しているところは住居址の北部で、床面から約50cmの高さである。柱穴は2ヶ所で検出されたのみで、これを主柱穴とみるほかない。東側の主柱穴の規模は、上径32cm、底径18cmでその深さ47cm、西側の主柱穴では上径22cm、底径17cmで、その深さ38cmである、柱の太さは15cm前後と推定できる。柱間の距離は3.6mである。

このようにみれば、主柱は2本柱の構造により上屋構造を支えていたことになる。拡張に伴っても主柱の本数や位置は変えていない。このクラスの規模の円形竪穴住居址で主柱が2本というのは稀有の例であろう。

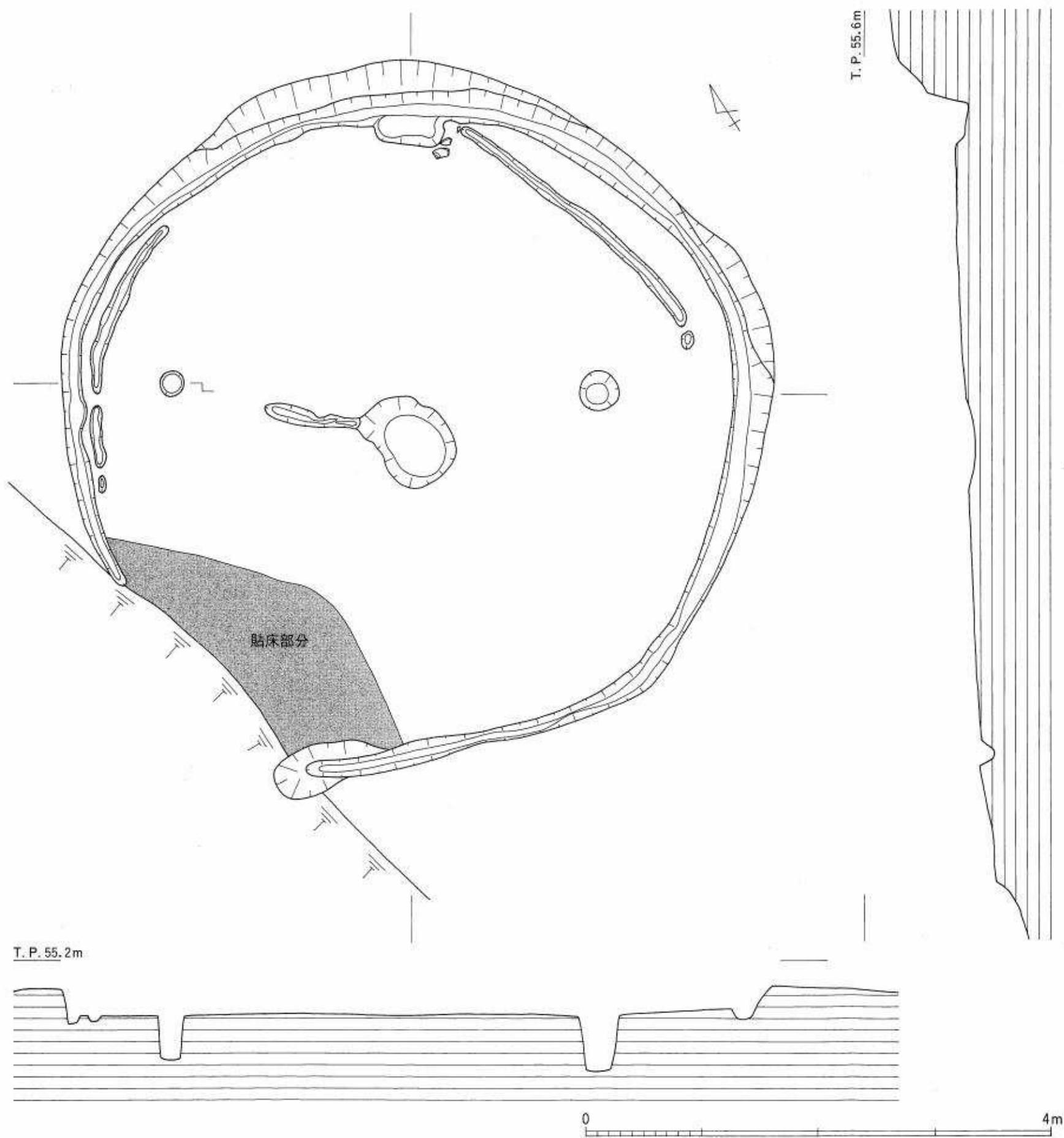
円形で2本柱で中央土壌を持つ竪穴住居といえ、[松菊里型]ではと連想するが、似て非なるものである。[松菊里型住居]という視点で見れば、この遺跡に近い揖西平野を見下ろす位置にある弥生時代中期後半の高地性集落である養久乙城山遺跡の竪穴住居址3は小型の方形の例であるが、中央土壌と柱穴の関係からみて、[松菊里型住居]の変容した姿とみれなくもないところである。

三田市・奈カリ与遺跡は本遺跡と同時代の高地性集落であり、約30棟竪穴住居址が調査されたが、2本柱をもつ住居址はいずれも7～17㎡の小型の住居址にしかみられない。この中には、養久乙城山遺跡の住居址と同じ構造をもつものがある。

神戸市西区・鍋谷池遺跡によく似た構造をもつ住居址の例がある。径5.0×4.8mの円形の竪穴住居址で規模は一回り小さいが、中央土壌と2本柱である。この遺跡も弥生時代中期後半の高地性集落で、約4,600㎡が調査されたが、竪穴住居址1、焼土壌、ピット等が検出されたのみの小規模な高地性集落である。

このようにみれば、小規模な高地性集落の竪穴住居址の例として、中規模の竪穴住居址の中に2本柱で上屋構造を支える住居址があり、この機能は棟支柱を支えるとみれば、このタイプの住居址は簡略な上屋構造であったと推測される。

屋内施設をみれば、住居址の中央に不整形な土壌があり、土壌の西端から、間仕切り溝とも呼称され



第45図 片島遺跡 1号住居址実測図

る細溝が延びているが、住居址内を越えるものではない。また、北北東の壁体際にも不整形な長方形を呈する土壌が検出された。

住居址中央の土壌は楕円形を呈するが、その深さはきわめて浅く、3～6mであり、住居址の中央土壌と呼称するには躊躇を覚える。内部には炭、灰の堆積もなく、土壌底面も焼けているという状況証拠は認められなかった。

間仕切り溝も幅8～10mほどのもので、検出された長さ82cmほどである。

壁際の長方形の土壌は長辺60cm、短辺26cm、深さ約10cmの浅くて、小規模な土壌である。土壌に接して土器底部が出土したのみで、その機能を推定できるものは何も検出できていない。

住居址からの出土遺物は土器のみで、それも破片のみである。土器の出土地点は、前述した長方形の土壌付近とそれより東2.2m離れた位置の床面直上、周溝上から土器片の一群が出土した。

(2) 2号竪穴住居址

2号竪穴住居址も斜面側である東辺の壁体及び壁溝の大部分は流失していることは傾斜地に築かれた竪穴住居址の通例といえるが、コーナー部分の壁溝の遺存により全体の形状は十分に復原可能である。

竪穴住居址は黄褐色地山土を掘り込んで築いている。尾根稜線上の西辺の壁体の遺存が最もよく、壁体は床面から高さ約30cmを検出でき、斜面地の東方向に行くほど順次その高さを減じており、東辺の壁体はまったく遺存していない。1号竪穴住居址と同じくこの部分の壁体は盛土によってつくられていたとしてよいであろう。

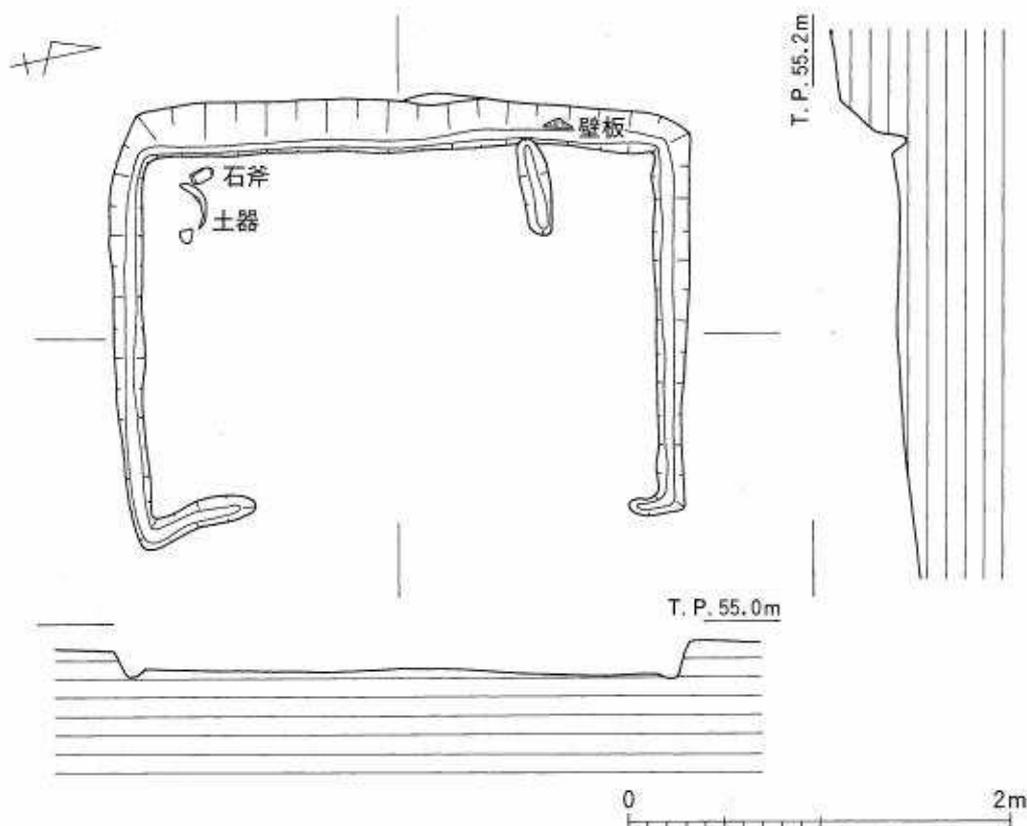
住居址の各辺は直線的に掘り込まれ、あるいは盛土によって形造られたとみられ、その平面形態は整いな長方形を呈している。その規模は長辺3.0m、短辺2.6mというきわめて小規模な竪穴住居址であり、その床面積は約5.9㎡である。

壁溝は幅15～20cmほどで深さも浅く5cmほどを測るのみであり、その断面形状は「U」字形である。なお、北辺の壁溝の北部分から東にのびる小溝が床面に検出され、その幅は15cm、深さ5cmで、長さは約50cmである。

柱穴は精査したが検出できなかった。地山層を床面としていることから、柱穴があればまず見落とすことのない土質であり、支柱穴をもたない上屋構造をもつ住居址例であると捉えられる。

このような住居址例として、弥生時代中期後半の高地性集落である三田市奈カリ与遺跡・山頂区1号住居址がある。住居址は4.1×3.0mの長方形を呈し、床面積は10㎡の小規模な竪穴住居であり、柱穴も中央土壌も設けられていない。奈カリ与遺跡の基本的なパターンの住居址とは異なっており、作業小屋的住居ではと報告されているが、今後、このような構造の住居址例の集成と集落内の位置や他の住居址の構造の比較によってその性格の検討をする必要がある。

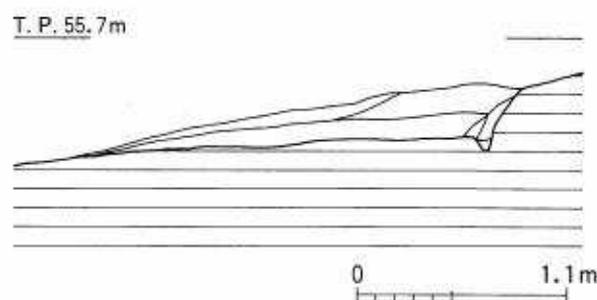
遺物は南東コーナー部分の床面直上に器台形土器、蛤刃石斧が出土した。器台形土器の出土状態は注目される。器台形土器は上半部は欠けているが、正置の状態を検出され、器台形土器の内側と外側に1～2cmほどの厚さで炭と焼土が堆積していた(図版21の上)。器台形土器の色調も二次的な火を受けた痕跡である赤褐色を呈しており、ここで器台形土器を利用して火を炊いたと捉えるほかない検出状況であった。蛤刃石斧は炭・焼土層の上に置かれた状態の出土であり、この火を利用した施設と直接関係しないと捉えている。なお、この住居址で火所とみられる痕跡を検出したのはこの箇所のみである。



第46図 片島遺跡 2号住居址実測図

この住居址でもう一つ注目されるのは東の壁体に残された炭化した壁板とみられる痕跡である。この痕跡は図版20に示しているが、木目は上下に走っているとみられる。鑑定は請けていないが、調査の記憶では針葉樹の柁目板材とみていたがその当否は明確にできない。

土層断面での堆積状況からこの竪穴住居の廃棄パターンは、放棄され、廃屋になりそのまま自然に埋没していったとみられる。第47図の暗黄色土Ⅲ内には炭が比較的多く認められている。



第47図 片島遺跡 2号住居址土層断面図

(3) 段状遺構と土壌

1. 段状遺構

竪穴住居址から約40m離れた北方向、すなわち、竪穴住居址よりは高い尾根上の位置に段状遺構が検出された。その比高差は5.2m前後である。段状遺構は溝状を呈している。

その微地形的位置を見れば、段状遺構は片島古墳群のある丘陵頂部から現片島集落に延びる尾根との傾斜変換点に位置する。

段状遺構は尾根稜線にあたる部分に対してほぼ直交して掘られており、検出した長さは8.2mである。掘削の長さはそれより若干超えるであろうが、尾根斜面部分にまでは及んでいないと捉えており、この数値を大きく超えるものではない。よく遺存している中央部では、その幅は2.2から2.5mであり、深さは浅いもので1.5cmから20cmほどである。両端は中央部より低いところに位置する関係から、その幅は当然狭くなっている。

段状遺構の断面形状は第48図に示しているとおりであり、B-B'が意図して掘削の形状を表現しているのであろう。平面図（第48図）は3条ほどの溝状遺構が切り合い関係であるような表現になっているが、溝底の深浅の表現にすぎないと捉えている。段状遺構から土器等の遺物は出土していない。

調査中や『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和56年度版—』の略報の段階では、地山整形遺構と呼称していたが、今回の報告では段状遺構に改めた。奈カリ与遺跡で段状遺構と呼称された遺構と同じような用途・機能をもつと捉えている。

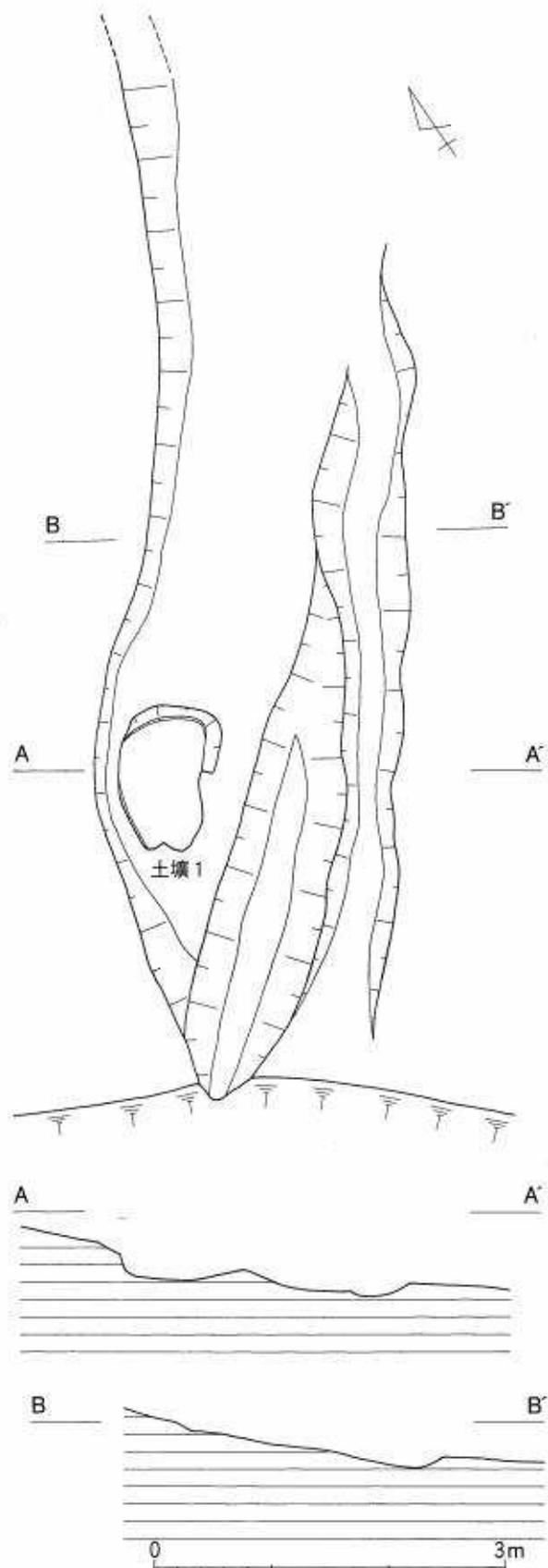
なお、段状遺構が埋没した段階で土壙2が築かれていた。

2. 土壙1

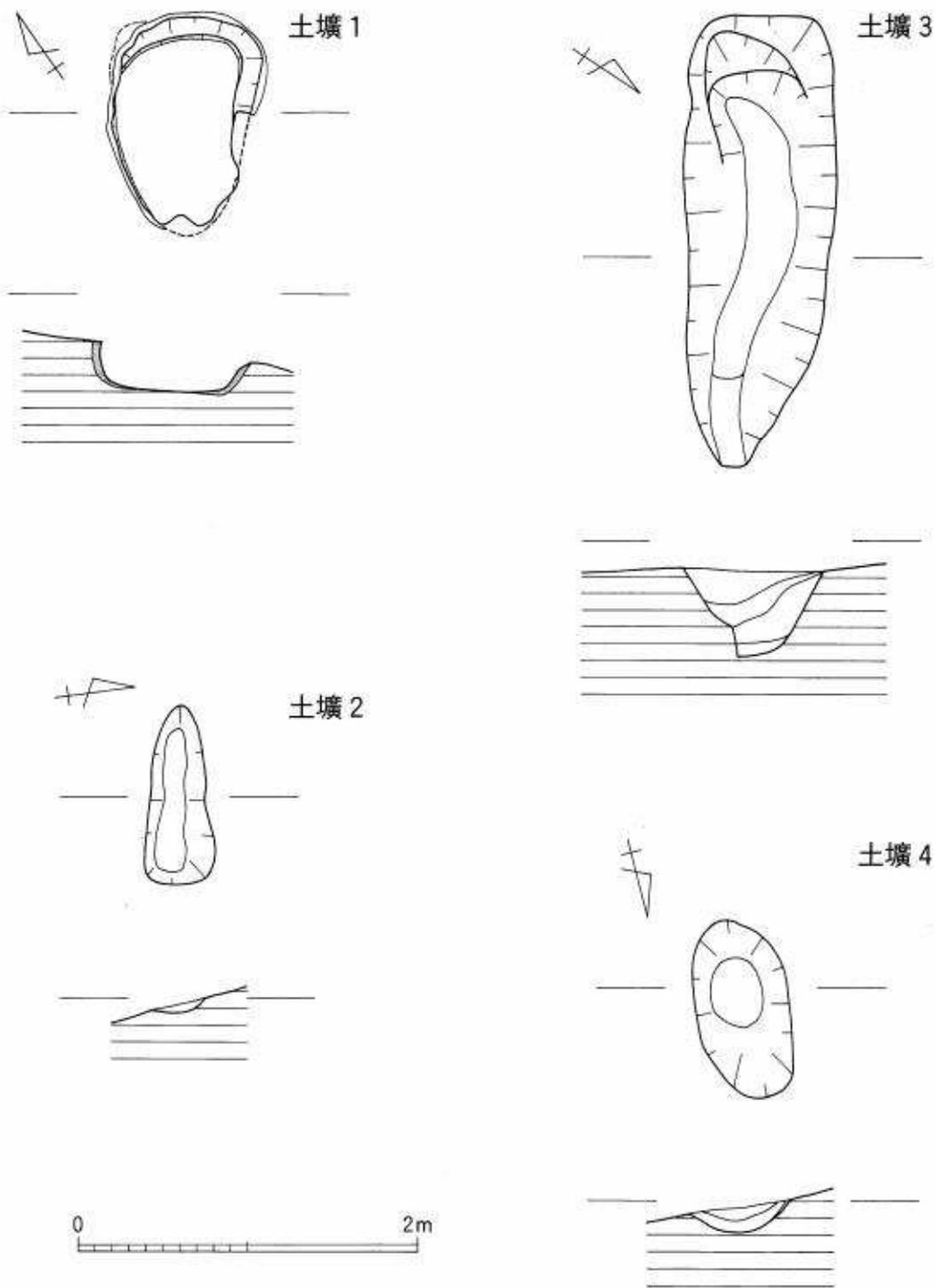
土壙1は段状遺構の東の位置に、その堆積土を掘り込んで築いている。壙壁はよく焼けて赤褐色に赤変（第49図上段左網目部分）しており、幅4～5cmの焼土壁を形成している。

この土壙は不整形な長楕円形の平面形態を示し、長径130cm、短径80cmの平面規模である。壙壁はかなり急な傾斜で、東側ではほぼ垂直を形成しており、一部には袋状に近い形状を示すところもある。この土壙も傾斜地にあり、急な角度で掘り込んでいるのは、ほぼ東半分の高い位置にあたる部分である。壙底はほぼ平坦な形状で、高い位置からの土壙の深さは深いところで41cmを測る。

土壙の最下層には炭・灰層が6cm前後堆積して



第48図 片島遺跡 段状遺構・土壙1 実測図



第49図 片島遺跡 土壌実測図

おり、この層中には炭化材も遺存していた。壙底も壙壁ほどに焼けてはいないが焼土面であり、炭・灰層のした、土壌の焼土面直上から骨片が出土し、壙底の南側に集中していた。また、北東隅と南西隅に鉄片が出土した。炭・灰層の上部の堆積層は土壌廃絶後自然に堆積した流入土とみており、その中では黄色土V・VI層には炭・灰が包含されていた。

このように土壌壁が強い火の痕跡を残すには壙内に火を循環さすところの天井部あるいはそれに相当

する施設の存在を想定しなければならないが、それに相当する施設の痕跡はまったく見出せていない。

土壙1の個別の遺構の時期を示す出土遺物も皆無である。

3. 土壙2

片島1号墳の東側の丘陵斜面に土壙2は築か

れており、竪穴住居址からは一番離れたところに位置する土壙である。竪穴住居址からは北方向に約70mの位置にあたる。

土壙1は不整形な楕円形の平面形態を示し、長径108cm、短径56cmである。断面形状は上径が下径よりも大きいスリパチ状を呈し、深さは16cmであるが、壙底の形状は判然としない。壙底・壙壁に沿ってかなり炭・灰層(6~8cm)が堆積していた。焼土面は斜面上側の土壙状端部のみに認められ、土壙1のような壙壁全体に厚く焼土面を形成しているという状況ではなかった。この土壙からも骨片が出土している。

4. 土壙3

土壙3と土壙4は尾根稜線をはずして東西の斜面に相対するような配置で築かれている。この配置は2基の竪穴住居址と似た配置の様相を示している。土壙3はその西側に築かれた土壙である。

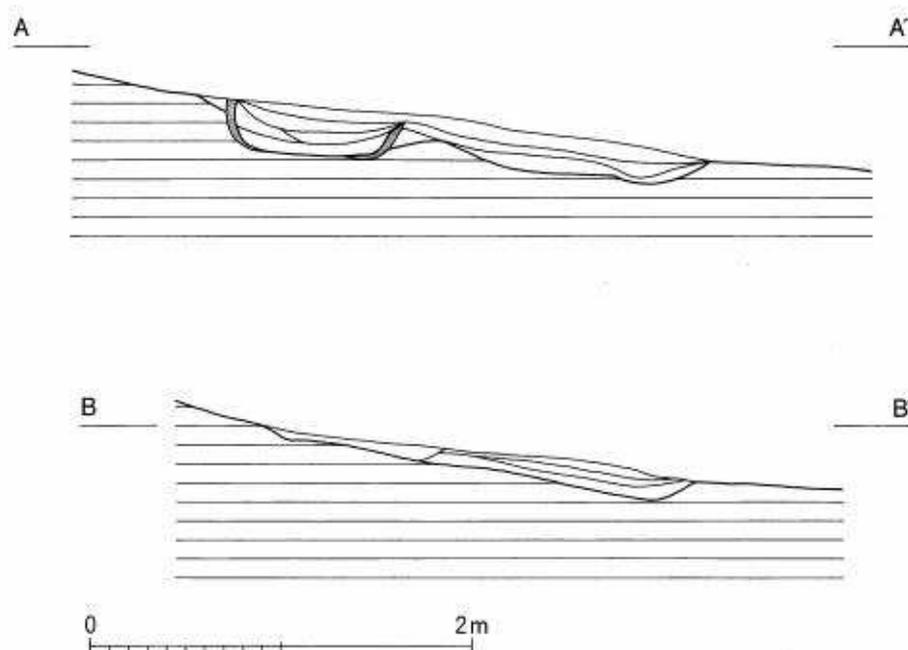
この土壙の平面形態はかなり不整形な細長い楕円形状を示し、長さ110cm、幅は35~40cmである。深さは浅いもので10cmばかりであり、壙底も平坦でなく凹凸がみられる。土壙内の堆積土は1層で、一面に炭を包含する暗黄色土であるが、土壙1・2にみられた炭・灰層のみの層は形成されていなかった。土壙上端には部分的に薄い焼土面が認められた。

この土壙からは中期後半の弥生土器の甕形土器片が一点のみ出土している。

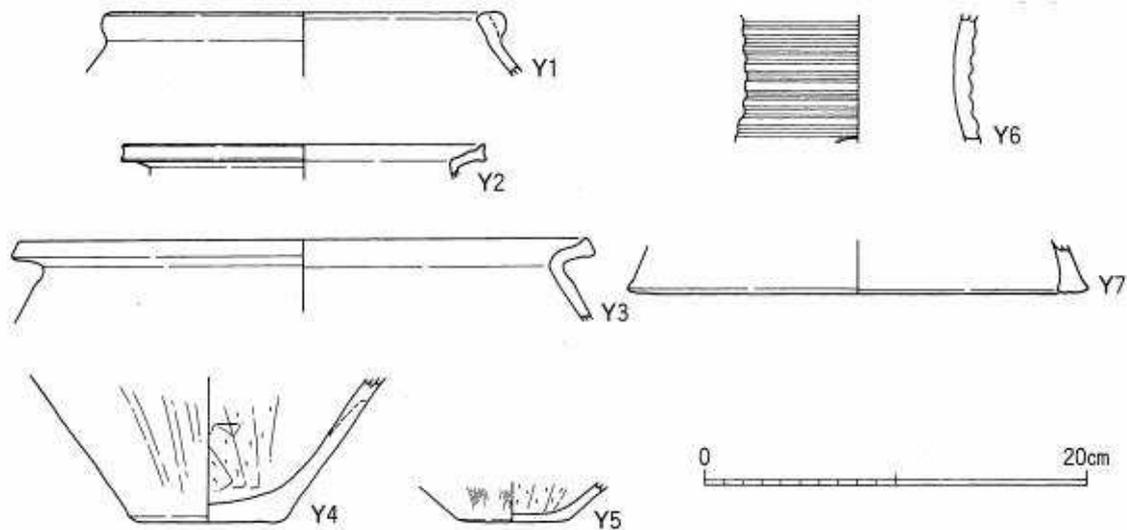
5. 土壙4

土壙3の反対斜面、すなわち東側斜面にある土壙である。土壙4は土壙3より規模も大きく深いが、炭や焼土面は認められなかった。

この土壙でも平面形態はかなり不整形な細長い形状を示し、長さ270cm、80~90cmであり、深さは50cmである。



第50図 片島遺跡 段状遺構・土壙1土層断面図



第51図 片島遺跡 弥生土器実測図

3 出土遺物

竪穴住居址2の器台形土器や蛤刃石斧が調査中に盗難に遭うという不幸な事件があったが、片島弥生遺跡から出土した遺物で図示できたものは第44・45図に示したもののみである。

Y1、Y3～Y5は竪穴住居址1、Y6・Y7は竪穴住居址2、Y2は土壙2からの出土である。石器は包含層からの出土である。

A. 弥生土器

Y1は段状口縁部をもついわゆる無頸壺形土器の口縁端の破片でその残存率は1/9ほどで、その復原径は20cmである。磨滅のため器面調整は不明である。

Y2は口縁端部が上下に拡張する中形の甕形土器の口縁端の破片でその残存率は1/4弱で、その復原径は18.9cmである。遺存部分はすべてヨコナデ調整が認められる。

Y3は口縁端部が上下に拡張する大形の甕形土器の口縁部の破片でその残存率は1/6弱で、その復原径は29.8cmである。磨滅のため器面調整は不明である。

Y4は底部の破片で、底径は8.3cmである。内面にタテ方向のヘラ削り、外面にタテ方向のヘラ磨きが認められ、壺形土器の底部と捉えている。

Y5も底部で、底径は5.9cmである。内面に縦方向のヘラ削り、外面にタテ方向のハケ目がみられる。

Y6は器台形土器の筒状部の破片で、破片の下端に円形の透かし孔がかりうじて遺存していた。筒状部には現状で7条の太い凹線文（B種）が観察できる。

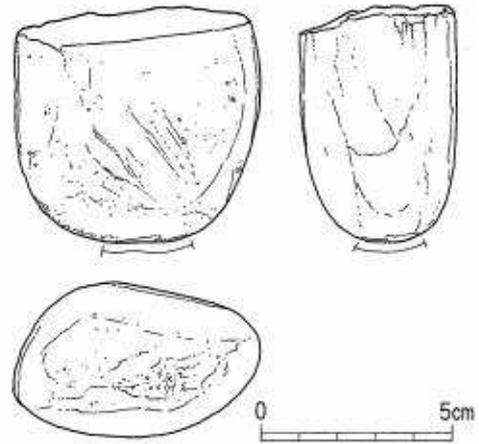
Y7は器台形土器の脚端部で、その残存率は1/12ほどで、その復原径は24cmである。脚端面にはかりうじてヨコナデ調整がみてとれるが他は磨滅のため器面調整は不明である。

これらの土器の胎土にはいずれもクサレ礫が観察される。

時期は器台形土器や無頸壺形土器の特徴などから弥生時代中期後半の第Ⅳ様式とみてよいであろう。

B. 石 器

この石器は包含層から出土している。石材は鑑定を請けていないが、火成岩の一種である。石器とするのに躊躇をおぼえていたが、残存する一端に使用による敲打痕が認められたので石器（敲石）として扱った。残存している長さ6.25cm、幅6.5cm、厚さ3.95cm、重さ250.3gである。



第52図 片島遺跡 石器実測図

4 小 結

片島遺跡の調査成果については、節を分けて報告してきた。ここではこの弥生遺跡の性格がいかなるものであるかを若干検討しておきたい。そこでこの遺跡の特徴を再度列記すれば下記のことが指摘できるであろう。

- (1) 標高40～60m前後の狭隘な丘陵の尾根上に立地し、平野部との比高差は20～40m前後である。
- (2) 遺跡規模は極めて小規模で、遺構としては竪穴住居址2棟、焼土壙3基、土壙1基、段状遺構1条が検出されたのみである。出土土器総量もコンテナ1箱にも満たないきわめて少量であることからみても、臨時的な短期間経営・維持された遺跡と捉えて間違いないところである。
- (3) 竪穴住居址をみても、径6mを超える住居址で主柱が2本しかない円形竪穴住居址や主柱のない小形の長方形竪穴住居址などは手を抜いた簡略な構造の竪穴住居址と言える。また、住居址中央に明確な火所をもつ施設の痕跡もないことも簡略な構造の竪穴住居址と関連するかもしれない。このことから、竪穴住居と呼称しているものは日常生活する住居ではなく、非日常的なある機能を付与された建物と見てよいであろう。
- (4) 焼土壙が通信的機能をもつ狼煙の施設であるという根拠は得られていないが、焼土壙の比率が高いことは指摘できる。
- (5) 時期は弥生時代中期後半（第Ⅳ様式）である。

このような特徴を指摘できる遺跡をどのように評価できるであろうか。

- (イ) は弥生時代集落の最も小規模な基礎的な単位、いわゆる世帯共同体の集落と言えるかどうかの問題である。
- (ロ) は拠点集落との関係である。
- (ハ) はこのような遺跡を高地性集落と捉えられるかという問題である。

これらの課題はいずれも有機的な関連をもち、切り離して別々に論じる性格のものではないが、とりあえず、(イ) からみていけば、(2) や (3) の示す事象は、炊飯などの消費生活を共有し、水田耕作などの生産の面においても行動をともにする基礎的な集団すなわち「単位集団」として独立的な集落を構成しているとみることは困難であろうと捉え、ある機能を分担したキャンプサイトの遺跡ではない

かと考えている。この解釈は多分に直観的なところを含んでいるが、あまりにも土器量が少ないこと、堅穴住居址の構造が一般的でないこと、後述する(口)の拠点集落との距離が近接していることなどがその根拠である。

しかし、近藤義郎や都出比呂志が指摘するように堅穴住居址2棟1組からなるグループを消費や生産を同じくする基礎的な最小単位の集団と捉え、このような「単位集団」が分村して集落を構成する基礎単位であると論じられている。この考えに異を唱える訳ではない。このような場合の特徴として、堅穴住居址は同形で、同規模で、規模による支柱穴の数も拠点集落と差がないことや高床倉庫が伴っていることが多い。このことだけを根拠に集落の性格の差異を論じるには躊躇をおぼえるが、片島遺跡のように単独で集落を構成しない遺跡があることの可能性を指摘して、将来の検討課題としておきたい。

片島遺跡での活動は、平地の拠点集落との緊密な結びつきのなかでしか理解できない。その点から(口)の拠点集落との関係については、揖保川流域の弥生集落の動態の中でその位置付けを行わなければならない。

揖保川下流域では拠点集落を中心として「農業共同体的結合」をなしたとみられる小地域的な集団が地形的な環境と遺跡とあわせて捉えると8単位ほどが推測できる。揖保川左岸で4集団、揖保川右岸で4集団とみている。

このような特徴をみれば、弥生時代の集落のひとつの類型である高地性集落と把握することが可能であろうとみられるが、異論がない訳ではない。高地性集落と捉えるにしても、多くの研究者が高地性集落を二つのタイプに分けている分類にあてはめれば、いわゆる広義の高地性集落あるいは準高地性集落というタイプのものとみられる。

この遺跡を高地性集落とするのに異論を提出しているのは岸本道昭氏である。氏は西播磨弥生社会を理解するために、揖保川下流域の「揖西地域」を「農業共同体的結合」となした地域的集団モデルと捉え、この地域をケーススタディとして、弥生集落の類型を主に立地と規模から、集落類型A=拠点的大規模集落、集落類型B=派生的中規模集落、集落類型C=山村の小規模集落、集落類型D=丘陵上小規模集落、集落類型E=高地性集落という5つの類型に分けている。

この分類の中で、片島遺跡を丘陵上の小規模集落と位置付け、集落類型Dと分類するが、その理解としては集落規模は最小単位の集落で、短期的・局所的な遺跡とみており、その出現の契機は農耕の定着・発展を基礎とした自然な人口増加による集団分岐ではなく、一時的な特殊事情から拠点集落(集落類型A・B)から分岐した集団と理解する。特殊な事情とは弥生中期後半の地域間抗争による緊張関係を背景に成立したと説く。集落類型Dの機能をこのように捉えれば、広義の高地性集落と捉え呼称している遺跡となんら変わるところがない。

岸本氏の高地性集落(集落類型E)の理解は平地との比高差150m以上の高所に位置する小集落、すなわち、狭義の高地性集落のみに限っていることから、呼称としての高地性集落を採用していないという違いである。

なお、高地性集落の片島遺跡は「揖西地域」の集落と捉えているが、これはあてはまらず「半田地域」の「農業共同体的結合」となした地域的な集団の遺跡であることは前述したとおりである。

ここでこれまでの高地性集落の定義をみておく必要があるであろう。弥生時代は水稲耕作を中心に発達した初期農耕社会である。この社会の中で水稲農耕を行うに極めて不便な可耕地から遠く隔たった高地に立地する遺跡がある。例えば、瀬戸内海野の島嶼の標高200mを超える山頂に立地する香川県心経

山遺跡や兵庫県大山遺跡などがその典型例である。

都出比呂志によれば、高地性集落とは「沖積平野で水稻耕作に携われる人々にとって不便と思われ高地に立地し、水稻耕作民の集落としては異常と考えられる場所にある集落」の総称であると定義し、高地性集落を平野との比高差を基にAタイプとBタイプとに分ける。

Aタイプは「平野からの比高が100mを超える急峻な山頂や尾根上に立地して水稻栽培には極めて不便な場所にある」集落とし、いわゆる狭義の高地性集落である。

Bタイプは「平野からの比高が20から30m前後、平野との距離は特別に遠くないが、丘陵上の先端など自然の要害とも言うべき位置あるいは見晴らしのきく場所に集落を構え、平野部の集落とは区別すべき」集落とし、これはいわゆる広義の高地性集落あるいは準高地性集落にあたるとする。

都出のように高地性集落を二大別する分類は最近の傾向であり、石野博信の山稜性・丘陵性、寺沢薫の①類型・②類型、森格也のⅠ型・Ⅱ型と分類し、いずれも前者が狭義の高地性集落に該当し、その理解に異論がないが、問題は後者の広義の高地性集落の捉え方である。丘陵上にある集落をすべて広義の高地性集落と捉えるかという問題である。もちろん丘陵上にある集落をすべてを広義の高地性集落とみる訳にはいかない。

森岡秀人は高地性集落の広域調査例が増加したことから、これまでの立地論からの脱却を目指して、集落規模の面から、主に竪穴住居址の数からA～D型に分類している。A型は1～2棟の竪穴住居址からなるきわめて小規模な高地性集落、D型は広範囲な丘陵上に20棟を超える集住形態をとる高地性集落とし、B・Cはその中間形態とする。この分類でいけば、A型の小規模な高地性集落と把握することができる。

拠点集落から分村というかたちで弥生中期前半に丘陵上に進出する一般的な集落があることは、原口正三が摂津の三島地域で早くに指摘されており、多くの地域でみられる現象である。これを寺沢は「農耕集落の丘陵上進出は西日本の中期以降の弥生集落にみられる一般的傾向」と指摘している。岸本もこの延長線上にたって広義の高地性集落を設定しない立場をとっている。

なお、橋口達也の研究によれば、北部九州では弥生前期後半～中期前半に集落が丘陵上に進出する遺跡が急増し、中期中頃に急激に廃絶する。この現象と呼応するかのように同時期に甕棺等の棺内から剣・戈の切先が出土する例が急増し、戦いによる犠牲者とみる。そして、争乱の要因として人口増による土地、水をめぐる争奪戦という地域紛争が丘陵上に集落を進出させたと説く。ただし、橋口は丘陵上の遺跡を高地性集落とは規定していない。

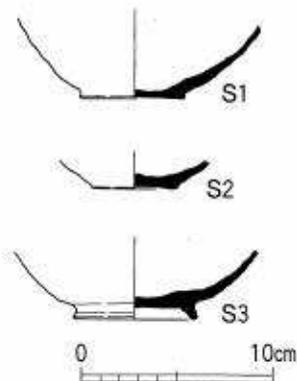
このようにみれば、すでに都出も指摘しているように、一般に集落の立地条件は地域差が大きく、高地の高地性集落と一般の丘陵上の集落の分別は、集落の時期、規模、平地の拠点集落との関係など地域に則したきめ細かい分析が必要であることは言を待たないであろう。

片島高地遺跡も揖保川流域の弥生集落の動態の中でその位置付けを行ってから、詳細に評価、検討をしなければならぬが、とりあえずここでは、片島弥生遺跡から指呼の間に臨むことができる低地の拠点集落と目される片島低地遺跡の集団が一時的に経営した情報伝達の手段としての見張りの機能などの役割を担った遺跡であると捉えている。見張りはあくまで低地の片島遺跡の集団に情報を知らせるのが目的であろう。言い換えれば、拠点集落の低地の片島遺跡の一機能を分担した遺跡で、弥生集落としては酒井龍一が提唱する基礎地域システムである「半田地域」の拠点集落である低地の片島遺跡システムの中に取り込まれている遺跡（地点）と言える。

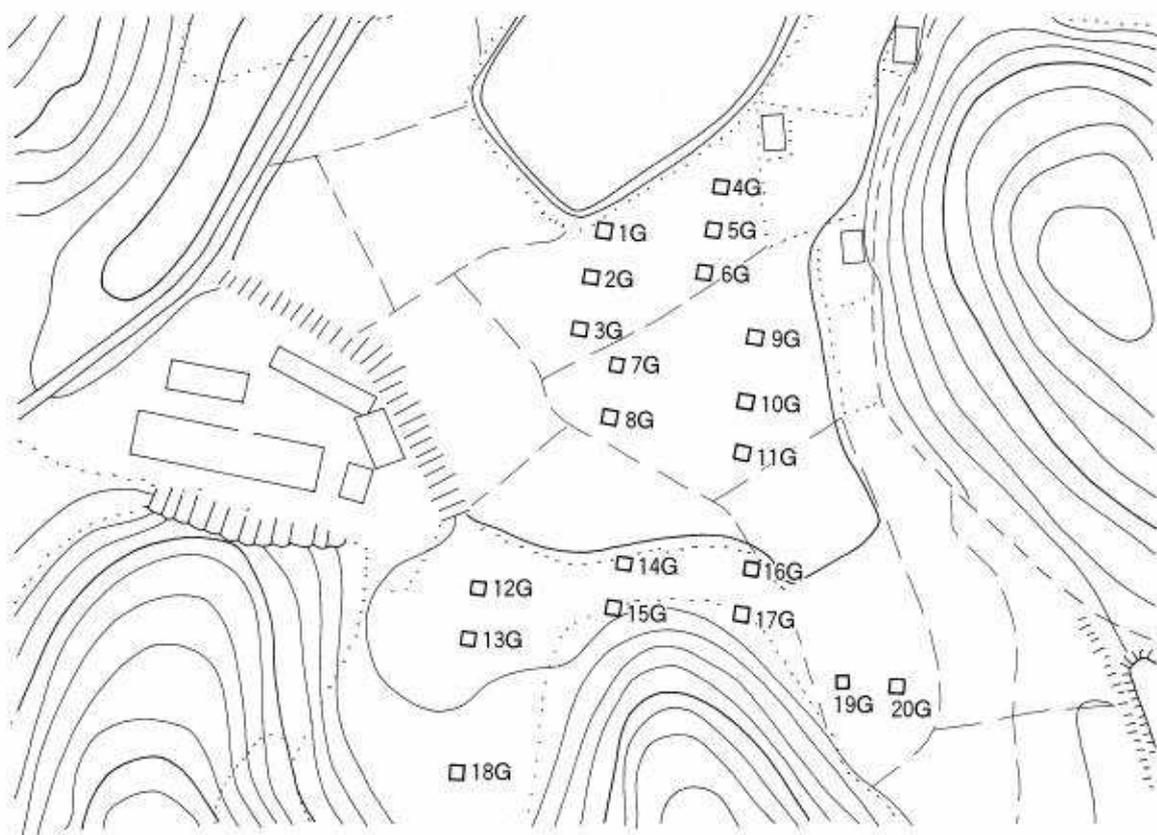
第6節 南山散布地の調査

南山散布地は片島古墳群から北西に約300m離れた谷部に位置し、調査時点では水田であった。今回の調査では、当該地点で、遺物が採集されていたため、当該地に2m×2mのグリッドを南北にほぼ10m、東西にほぼ15m間隔で、計20ヶ所設定して調査を行った。主なグリッドの土層堆積は、個々のグリッドでは若干の違いはあるものの、基本的にはⅠ層耕土、Ⅱ層床土、Ⅲ層黄褐色～茶褐色砂質土、Ⅳ層灰褐色～茶褐色シルト、Ⅴ層黄灰色～青灰色粘質土の順に堆積が認められた。

各グリッドではⅡ～Ⅳ層中から、極少量の須恵器片などの遺物が見られたものの、遺構あるいは遺構面の存在は確認できなかった。S1は須恵器碗の底部で、粘土紐巻き上げ成形の後、ロクロナデ整形を施している。底部は若干高台を作りだし、底部外面には糸切り痕が残る。S2も同様に須恵器碗の底部であるが、S1に比べさらに高台が退化している。底部外面には糸切り痕が残る。S3は外側に開く輪高台を貼り付けた須恵器碗の底部である。底部外面にはS1・S2と同じく、糸切り痕が認められる。S1・S2は東播系須恵器と考えられ、底部の形態から、12世紀後半～13世紀前半の時期が考えられる。S3は産地は明確ではないが、高台の形態から考えて、8世紀後半～9世紀前半の時期が考えられる。



第53図 南山散布地
遺物実測図



第54図 南山散布地 グリッド配置図

参 考 文 献

- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群』 平安学園考古学クラブ
- 上田哲也・島田 清 1965 『印南野 — その考古学的研究 1 加古川工業用水ダム古墳群発掘調査報告』
- 喜谷美宜 1985 『加古川市・カンス塚古墳発掘調査概要』 加古川市教育委員会
- 松本正信・加藤史郎ほか 1970 『宮山古墳発掘調査概報』 姫路市教育委員会
- 松本正信・加藤史郎 1972 『宮山古墳第2次発掘調査概報』 姫路市教育委員会
- 中間研志 1987 「松菊型住居 — 我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究 —」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』
- 井守徳男・西尾知恵子ほか 1983 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ-1 奈カリ与遺跡 2 釜屋城跡 3 五良谷11号墳』 兵庫県文化財調査報告書 第16冊

第4章 片島1・2号墳出土埴輪の砂礫

奥田 尚

1. はじめに

竜野市と太子町を境する丘陵地に造営された片島1号墳、片島2号墳の埴輪列の円筒埴輪の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。元位置が確認できる円筒埴輪は殆どすべてが底部で、1～3段目までの突起がみられる。1号墳の試料番号はくびれ部から後円部にかけての順である。埴輪の観察は、最初に裸眼で全体を観察し、次に、観察良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。観察の目安としては砂礫の粒径・粒形・種類・量等である。粒径は目測によりmm単位で行った。粒形は角、亜角、亜円、円の4段階に目測により行った。量は非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの6段階に区分した。種類は石種と鉱物種、生物片等に区分した。石種は破片の一部による判断であるため、全体が分かれば異なることがある。例えば、流紋岩としたものであっても、大きな塊であれば溶結しており、溶結凝灰岩となる場合もある。また、石英と長石、黒雲母が噛み合っているため、花崗岩としても、大きな塊であれば片麻状を示すことがあるため片麻岩となる場合もある。

観察した砂礫から判断すれば、観察した埴輪の殆ど全てが流紋岩質岩起源の砂礫を主とし、安山岩質岩起源の砂礫を僅かに含む播磨西部の砂礫種構成である。1号墳の埴輪には比較的流紋岩が多く含まれるのに比べ、2号墳の埴輪には石英が多く含まれ、胎土の採取地が明らかに異なるといえる。

2. 砂礫の特徴

埴輪の表面に見られる砂礫種は閃緑岩、流紋岩、砂岩、泥岩、チャート、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃岩、輝石である。これら砂礫種の特徴について述べる。

閃緑岩：色は灰色、粒形が角、粒径が最大0.7mmである。長石と角閃岩が噛み合っている。

流紋岩：色は白色、灰白色、灰色、暗灰色、赤褐色、淡赤色、茶色、淡茶色、茶褐色、赤茶色、淡茶色、褐色と様々である。粒形は角、亜角で、粒径が最大10mmである。石基はガラス質で、石英の斑晶が見られるものもある。

砂岩：色は暗灰色、茶褐色で、粒形が角、粒径が最大6mmである。細粒砂からなる。

泥岩：色は茶褐色、褐色、黒色で、粒形が亜角、粒径が最大6mmである。熱変質したようなものもある。

チャート：色は茶褐色、灰色、暗灰色で、粒形が亜角、粒径が最大3mmである。

火山ガラス：無色透明で、粒径が最大0.3mmである。貝殻状をなす。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大4mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものもある。

長石：無色透明、灰白色透明、灰白色、白色と様々である。粒形が角、粒径が最大2mmである。

黒雲母：金色の金属光沢があり、板状で、粒径が最大0.5mmである。

角閃石：黒色、粒形が角、亜角で、粒径が最大0.3mmである。粒状である。

輝石：黒色透明、褐色透明で、粒形が角、亜角で、粒径が最大0.2mmである。柱状、粒状で自形をなすものがある。

3. 類型区分

主を占める砂礫種は流紋岩質起源の岩片や自形の石英、長石であり、僅かに安山岩質岩起源と推定される輝石や角閃石が含まれる。また、10試料に砂岩や泥岩の碎屑岩、チャートもみられる。砂礫種構成から類型区分すれば、全てIV類型に属し、僅かに含まれる砂礫を考慮すればIVbn類型、IVe類型、IVeg類型、IVg類型、IVgn類型、IVn類型に細分される。各類型について述べる。

IV類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

- 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、角閃石を僅かに含む砂礫からなる ……………IVbn類型
- 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる ……………IVe類型
- 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩を僅かに含む砂礫からなる ……………IVeg類型
- 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、泥岩、チャートを僅かに含む砂礫からなる ……………IVg類型
- 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩、泥岩、他形の角閃石や輝石を僅かに含む砂礫からなる ……………IVgn類型
- 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石や輝石を僅かに含む砂礫からなる ……………IVn類型

以上のように砂礫構成をもとに区分すれば、IVn類型に属する埴輪が17本、IVgn類型の埴輪が7本、IVe類型の埴輪が9本、IVg類型の埴輪が3本、IVbn類型とIVeg類型の埴輪がそれぞれ各1本となる。古墳毎にみれば、2号墳の埴輪は全てIVe類型に属する。

4. 砂礫の採取地

古墳造営地を中心とする播磨付近には流紋岩質岩が広く分布し、砂岩や泥岩からなる中生代の地層が北部に分布する。花崗岩は部分的に点在して分布する。このような岩石分布の影響をうけて、平野へ流れ出す河川の砂礫は流紋岩質岩起源の砂礫を主とする。河川の砂礫には砂岩や泥岩、チャートが含まれる。

砂礫構成の類似性からみれば、1号墳の埴輪は流紋岩質岩の破片が多いのに比べ、2号墳の埴輪は自形の石英が非常に多く、質が均質化しており、同亜類型に属するもののみである。

砂礫構成からみれば、砂岩や泥岩、チャートのような流紋岩質岩とは全く異なる砂礫が1号墳の埴輪には含まれるものもあることから、碎屑岩を含むものは沖積地の土を使用したと推定され、流紋岩質岩起源の砂礫のみからなるものは流紋岩質岩分布地から流出した谷近くの土、あるいは砂礫を混和して胎土したと推定される。このような判断にたてば、観察した1号墳の埴輪は、少なくとも2地点以上で土を採取して製作されたものである。また、2号墳の埴輪は1ヶ所で採取された土で製作されたものと推定される。何れの地点も古墳造営地付近とは推定されるが、場所は限定できない。

5. おわりに

観察できた埴輪に含まれる砂礫から、播磨西部で製作された埴輪であると推定される。砂礫構成の類似性からすれば同じ場所で製作されたのではなく、少なくとも1号墳の埴輪は2地点以上で製作されているといえ、2号墳の埴輪は少なくとも1地点で製作されたと推定される。5世紀後半の埴輪について河内でみれば、応神陵古墳の埴輪では少なくとも5地点以上で土が採取されている。古市古墳群の古墳の埴輪と百舌鳥古墳群の古墳の埴輪とを比べれば古市の古墳の埴輪は古市付近の土で、百舌鳥古墳群の埴輪は百舌鳥古墳群付近の土で製作されているものが多いが、大きな古墳になれば古市付近の砂礫構成を示す埴輪は百舌鳥古墳群の中にもみられる。今回、観察できたような小さな古墳の埴輪ではその地域で製作され、使用されていると推定されるが、大きな古墳ではより広い範囲での埴輪の移動がある可能性がある。

第2表 増輪の表面に見られる砂礫(1)

試料番号	器種	岩										鉱物										海綿の骨片	類型											
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩・泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石				雲母		角閃石		輝石						
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍			裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍					
片島1号 E1	円筒増輪			L-稀 亜角	L-僅 角			M-微 亜角										M-僅 E中	30倍	M-中 E中	裸眼					S-中	30倍	S-微	30倍	S-稀	30倍			IVgn 増密
片島1号 E2	円筒増輪			M-稀 亜角	M-僅 角			L-稀 角										M-中 E中	30倍	M-中	裸眼					M-中	30倍	S-稀						IVgn 増密
片島1号 E3	円筒増輪			L-稀 角	L-多 亜角													L-中 E中	30倍	L-中 E中	裸眼					M-僅 S-中	30倍	S-微						IVn 増密
片島1号 E4	円筒増輪			L-僅 亜角	L-僅 角			L-稀 角										M-中 E中	30倍	M-中 E中	裸眼					L-中	30倍							IVg 増密
片島1号 E5	円筒増輪			L-僅 角	L-多 亜角			L-稀 亜角										M-中 E多	30倍	M-中 E多	裸眼					S-稀	30倍	M-微						IVeg 増密
片島1号 E6	円筒増輪			M-僅 角	L-中 角													M-微 E多	30倍	M-中 E多	裸眼					M-微 S-中	30倍	S-稀						IVn 増密
片島1号 E7	円筒増輪			L-微 角	L-中 角			M-稀 角										M-中 E中	30倍	M-中 E中	裸眼					M-僅 S-僅	30倍	S-稀						IVgn 増密
片島1号 E8	円筒増輪			L-僅 亜角	L-中 角													M-中 E中	30倍	M-中 E中	裸眼					S-中	30倍	S-稀 E非						IVe 増密
片島1号 E9	円筒増輪			L-微 角	L-多 角													M-中 E多	30倍	M-中 E多	裸眼					S-微 S-中	30倍							IVg 増密
片島1号 E10	円筒増輪			L-僅 角	L-中 角													M-中 E多	30倍	M-中 E多	裸眼					M-微 S-中	30倍	S-稀						IVn 増密
片島1号 E11	円筒増輪			L-僅 角	L-中 角													M-中 E中	30倍	M-中 E中	裸眼					M-僅 L-中	30倍	S-稀						IVn 増密
片島1号 E12	円筒増輪			L-微 角	L-中 角			M-稀 角										M-中 E多	30倍	M-中 E多	裸眼					M-僅 S-中	30倍	S-稀						IVgn 増密
片島1号 E13	円筒増輪			L-僅 角	M-微 角													S-中 E中	30倍	S-中 E中	裸眼					M-稀 S-多	30倍	S-稀 板						IVn 増密
片島1号 E14	円筒増輪			L-稀 角	L-僅 角													L-僅 E中	30倍	L-僅 E中	裸眼					M-微 M-僅	30倍	S-微						IVn 増密

第4表 埴輪の表面に見られる砂礫(3)

試料番号	器種	岩										石										鉱物						海綿の骨片	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩・泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石	石英	長石	雲母	角閃石	輝石	石					
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍								裸眼	30倍	裸眼		
片島1号 E36	円筒埴輪			M-僅 角	L-中 角													M-僅	L-中 E中	M-中 M-中	S-微 板		S-稀	S-稀 E非			IVc 播磨		
片島1号 E37	円筒埴輪			M-微 角	M-僅 角													M-稀	M-中 E僅	M-中			S-稀			IVa 播磨			
片島1号 E38	円筒埴輪			L-稀 角	L-僅 亜角													L-多	L-中 E多				S-稀			IVa 播磨			
片島2号 E44	円筒埴輪			L-僅 角	L-僅 角													L-多 E多	L-多 E多	L-僅 M-僅			S-稀 E中			IVc 播磨			
片島2号 E45	円筒埴輪			L-僅 亜角	L-中 角													L-多 E多	L-多 E多	M-稀 M-僅			S-稀 E僅			IVc 播磨			
片島2号 E46	円筒埴輪			L-中 角	L-僅 亜角													L-中 E多	L-中 E中	M-微			S-稀 E中			IVc 播磨			
片島2号 E47	円筒埴輪			L-中 角	L-中 角													L-多 E中	L-多 E多	M-稀			S-微 E僅			IVc 播磨			
片島2号 E49	円筒埴輪			L-中 角	L-中 角													L-多 E中	L-多 E多	M-稀			S-微 E僅			IVc 播磨			
片島2号 E50	円筒埴輪			L-中 角	L-僅 角													L-多 E多	L-多 E多	S-稀			S-稀 E中			IVc 播磨			
片島2号 E52	円筒埴輪			L-中 角	L-中 亜角													L-多 E僅	L-多 E多	M-僅 S-微			S-稀 E中			IVc 播磨			

裸眼による観察：L=粒径2m以上、M=粒径2mm未満0.5mm以上、S=粒径0.5mm未満。
 非=量が非常に多い、多=量が多い、中=量が中、僅=量が僅か、微=量がごく僅か、
 稀=量がごくごく僅か。
 実体鏡による観察：L=粒径1m以上、M=1mm未満0.5mm以上、S=粒径が0.5mm未満。
 量は裸眼に同じ。実体鏡の倍率が30倍。
 'L'以下の粒径がある。E=自形、EF=結晶面がある。
 W=白雲母が含まれる。板=板状、貝=貝殻状、東=東状、フ=フジツボ状。

第5章 まとめにかえて

第1節 片島1・2号墳の埴輪について

1. 円筒埴輪の規格について

第5表「円筒埴輪の形態・法量・調整の関係」を参考に、円筒埴輪の規格について気づいた点を記すことにする。

まず底径については、13.6～15.0cmを「小」、15.6～17.0cmを「中」、17.6～23.0cmを「大」と3種類に分類している。「小」・「中」各々における最小径と最大径の差には、いずれも1.4cmという数値の開きが存在するが、この数値は、成立過程に於いて生じる誤差の中で捉えられると判断できる。

第5表 樹立円筒埴輪の形態・法量・調整の関係

番号	形態と法量						調整			
	底部	突帯	透孔	基部	体部	底径	内面	基部外面	体部外面	ハケ条数
E1				C		中	h	d		5. 10
E2		h				中	a	d	d	10
E9	a					大	b	b		10
E12	c	i		E		中	b	b		10
E13						大	a	b		10
E15						大	c	b		13
E16	c					中		i		7. 10
E18	b	i	l	C		小	c	b	b	9
E19		g		D		小	a	b	e	8
E20	b	g	l	D		大	c	d	d	12
E21	c	j	l	C		中	c	b	d	12
E22	c	l	l	A		大	g	e	e	13
E24	b	g	k	E		中	a	f	f	5. 7. 13
E25	c	j	k	B	B	小	a	e	e	4. 6. 10
E26	a	g	k	A		中	a	g	d	5. 8. 10
E28	b	i	l	A		中	b	d	e	5. 7
E29	a	h	k	C		中	a	b	e	9
E30	c	i	l	D		小		b	e	8
E31	c	h	l	D	C	小	c	e	e	8
E32		h	l	C	B	中	a	b	b	8
E33		j		E		小	b	b	d	10
E34		h	k	B	B	小	c	b	e	8
E35						小	a	b		7
E36	c	g	k	D	C	中	a	e	e	8
E37	a	i	l	B		中	a	b	d	8
E42						小	c	a		

※ 第22図～第25図の分類図参照。

「大」に関しても、底径23.0cmの円筒埴輪を除外すれば、17.6～18.4cmとその差は0.8cmに収まる。これらのことから、底部の規模は、3種類の規格に基づいて決定されたと言える。ただし、底径23.0cmの円筒埴輪については、現時点では明確な解釈ができない。

次の突帯間の幅については、A～Eの5種類に分類している。基部はA～Eの全てが使用され、また、体部の突帯間の幅には、B・Cのみを使用するという規格が存在すると言える。これは、他の転落円筒埴輪の突帯間の幅についても適用されていることから妥当な判断であろう。体部の規格と、基部の高さとの関係については、第1段が基部の高さと同じか、それより大きくても1cm以内に収まるという点を除けば明確ではない。

2. 調整について

次に内外面の調整においてはどうかだろうが。内面調整は「ナデ」「タテハケ後ナデ」「タテハケ」の3種に分かれ、ハケの条数に関しても、4～5条/cm、7～8条/cm、9～10条/cm、12～13条/cmの4種がある。

外面調整においては、1段につき何種類かの条数をもつものが見受けられる。例えば、E13は5条/cm、7条/cm、13条/cmの3種、E15は5条/cm、8条/cm、10条/cmの3種、E16は5条/cm、7条/cmの2種などがあり、ハケ単位が錯綜している。つまり工人間でのハケの共有があったのではないかと推測される。

3. 時期について

また、外面の2次調整では、第1段にまでB種ヨコハケを施しているものが数点（E9、E14、E19、E24）確認できることや、底部調整がみられないことにより、1号墳の円筒埴輪に関しては、川西宏幸の編年による第Ⅳ期併行と判断できる。実年代については、5世紀中葉および後葉と考えられる。

また、2号墳に関しては資料が少ないために、分類・考察の対象にすることは難しい。ただし、樹立円筒埴輪の中には底部を親指を内に他指を外にし、摘むように調整しているものがあり、また、底面が「V」字形に近い面をしていることなどから、1号墳より少し新しく、5世紀後葉頃の所産と推定される。

4. 小 結

以上のことから、円筒埴輪には確かに工人集団の差が出ているといえ、1つの埴輪において異なる種類の粘土が使用されていることにより、粘土を調達する者と埴輪を成形する者が別だったといえる。また、小工程の中における4種類の差があることにより、分業が行われ、かつ複数の工人が関わっていたと考えられる。

第2節 揖保川流域の高地性集落について

1. 高地性集落は、それ自体のみの研究をいくら深化させても、弥生時代の集落論やその分析に基づく社会構造論には展開してはいけない。高地性集落がこの時代の社会を研究していく重要なキーワードであるが。

高地性集落は、低地の拠点集落の動向と不可分に連結した弥生集落の一つの類型である。弥生時代の初期農業共同体の集団関係は、低地の拠点集落を中心に展開されていると把握してまず間違いない。

高地性集落は、低地の拠点集落に社会的混乱や不安定、あるいは、政治的混乱等が生じた非常事態時に出現する現象であると理解される。そのような意味で、低地の拠点集落を中心に展開する小宇宙が日常的社会であると規定されるとすると、高地性集落は非日常時に現出した社会状況と規定できる。

高地性集落は拠点集落の関連で捉えてはじめてその意義が生き生きとしたものになる。

2. 揖保川下流域の平野の形成をみれば、片島遺跡のある右岸地域の沖積平野は北から、播磨山地に連なる鶏籠山、独立丘陵の半田山、養久山墳墓群がある養久山丘陵、金剛山6号墳や宝記山8号墳が位置する金剛山・宝記山丘陵、権現山50・51号墳が立地する権現山丘陵、御津町朝臣の北の丘陵などによって守られ、弥生時代の揖保川の氾濫が低地の地形形成にまでおよぼす影響を受けるような大災害を受けない地形的に恵まれた環境を有する地域である。といっても揖保川の氾濫によって床上浸水等というような洪水の被害をまのがれた訳ではない。このような洪水の被害は既往最大の洪水である明治25年の記録によって窺い知れる。いずれにしても、揖保川右岸地域は左岸地域の比較すれば、恵まれた自然環境のなかで弥生人が暮らしてきた地域と言える。

それにひきかえ、揖保川左岸地域の弥生人は、揖保川の氾濫によって、絶えずと言っても過言でないほどの、自分達が集落を営んでいる沖積微高地を洪水によって深く埋もれることを経験してきたことであろう。このことは、『龍野市史』第一巻の揖保川の氾濫の復元図をみれば明らかである。

3. 筆者は明石川中流域の玉津田中遺跡の発掘調査時に、洪水の凄まじさを肌身にしみて経験した。玉津田中遺跡では地形を变形するような大洪水は弥生時代の中では二度起こっている。

一度目は弥生時代前期前半のある時点である。この洪水によって「亀ノ郷微高地」と仮称していた播磨地域に最初に水稻農業を定着させ、発展させようとした人々が、住み慣れた居住地と水田域を放棄しなければ成らない事態に追い込まれた。しかし、この時の大洪水は未だ玉津田中遺跡の弥生人にとっては、とりよによっては、まだ被害が少ないものであった。何故なら、「亀ノ郷微高地」から300~400m離れた地点に自分達が居住できる、より大きな紡錘形微高地が形成されていたからである。この微高地を私達は「竹添微高地」と仮称した。この居住地を変えなければならないような洪水によって、明石川流域の弥生時代前期前半と前期後半の様々な事象が分別できるとみている。この復旧に要した時間と物質的、精神的な努力はいかばかりであったろうか。この経験が弥生時代前期前半と後半の社会を弁別できる指標と捉えている。

蛇足であるが、この難局を切り抜けたのは、伝統の呪縛から自由であった若いリーダーの存在であったと思考している。人間集団が難局をのり越えるには、若い人々の叡知と物おじしない、伝統に囚わ

れることのない自由な発想の中にこそ活路が見いだせるのである。そして、そのことが、集団を守る決断と不可欠に結びいた社会のみが未来を所有できるのである。今後、考古学はもっと社会集団心理学の応用を学ぶべきであろう。

この流域の中核的な拠点集落である新方遺跡も例外ではなかった。新方遺跡の弥生前期前半は、新方遺跡西河原地点と呼称しているところに集落を構えており、この地点を中心に弥生時代前期前半の居住地は大きく発展している。この地点には前期前半の土器は出土するのみで、前期後半の土器は出土しない。明石川下流域の新方遺跡もこの洪水によって、西側に出来た新たな微高地に居住地を移して、弥生時代を発展させていったのである。

考古学史の中では、無視しえない播磨吉田遺跡は、この混乱の中で一時的に高位段丘に居住地を移した集団の痕跡に過ぎない。しかしながら、吉田遺跡の土器は確かに新方遺跡や玉津田中遺跡の前期前半の土器よりも一段階古い土器を所有している。これは農耕集落を受け入れるという大きな流れから外れた縄文集団の中にかいに入り込むかと思っていた西方から来たフロンティアの集団の痕跡であり、このことが記憶として残っていたので、災害時に、新方遺跡の集団も玉津田中遺跡の集団も一時的に高位段丘に一時的に居を移したのである。明石川流域の弥生時代にとって、吉田遺跡の存在は明石川の初期農業共同体の中にあってはそのような位置である、記憶としての遺跡であるが、重要な遺跡ではないのである。なお、この弥生時代前期前半の社会的混乱の中からは高地性集落は出現しなかった。

4. 次の二度目の明石川の氾濫は玉津田中遺跡の人間集団にとっては未曾有の氾濫であった。この明石川の大氾濫は畿内第Ⅳ様式併行の後半期のことである。

それまでの明石川が明石平野の中央を流れていた流路を今とほぼ近い西側の高位段丘下に流れをかえるほどの出来事であった。

「竹添微高地」の居住地とその周囲に開拓された水田は1m越える洪水砂で埋めつくされ、途方にくれている玉津田中遺跡の弥生人の姿が彷彿と浮かべることが出来る。

このとき、社会的な混乱がこの地域に起こったのである。このとき、明石川の拠点集落の玉津田中遺跡の集団は高地性集落に移行することを選択したのである。すべてが、この未曾有の地形を変えたほどの大氾濫が高地性集落に居住地を変えた原因とは言わないが、この明石川の集団にとっては未曾有の一大事の出来事であったのは想像に難くない。丁度、この時の前後から進行しつつあった、生産用具の石から鉄の変化がこのことを余計に助長したし、後述するよう奴国が後漢の冊封体制に組み込まれた前後の時代であり、政治状況の中に巻き込まれる状況が醸しだされつつある時代であった。この現象は社会的混乱に加えて政治的状況のなかに否応でも対処せざるを得ない序章の前後の出来事であった。

5. 視点を変えれば、この時代、東アジアの盟主である中国は前漢代の皇帝が滅び、新の王莽の代に移り、新代も短命であったが、しかし、この新代に製作された貨幣である「貨泉」は意外と西日本に広く流布しており、相対年代の土器様式と実年代を繋ぐキーになっている。「貨泉」と共伴する土器が後期初頭の土器と伴出しており、この時代の実年代を確定するキーになっている。

【後漢書】によれば、健武中元二年（紀元57年）、北部九州にあった王国の奴国が後漢の光武帝に奉賀朝貢しており、その時、後漢の皇帝から印授を受ける。日本列島が当時東アジアに覇権を確立して

いた後漢帝国の冊封体制に組み込まれるのである。この印授が福岡県の志賀島で発見されている。奴国が冊封体制に組み込まれるということは、日本列島も政治状況の中に巻き込まれたことを意味する。奴国は日本列島の盟主として、その地位と威信をかけて行動せざるを得ない状況が醸成されたのである。このことを正確に把握できない西日本の集団が奴国の行動に対して、その意味が理解されず、政治的混乱が生まれても不思議ではない。

この時代、播磨地域にも北部九州の威信財が流入している。半田山遺跡や白鷺山墳墓群等の九州型の弥生小型倣製鏡等である。

弥生時代中期末から後期前半の高地性集落の出現がこのことを表現している社会事象と捉えている。

6. 西播磨地域の高地性集落の研究は、松本正信氏が精力的に取り組まれている。氏は「比高が100m以上もあるような、眺望のよい山頂」に立地する遺跡を高地性集落と把握され、片島遺跡のような低丘陵に立地する遺跡は高地性集落とは別の視点が必要とされる。この見解は、岸本道昭氏にも引き継がれていることは第3章第5節で前述した。

松本氏は家島群島の男鹿島にある大山遺跡（標高220m）や揖保郡太子町と姫路市勝原区にまたがる檀特山遺跡（標高165m）、龍野市・片山東山遺跡（標高225m）、姫路市・飾西東山遺跡（標高103m）、姫路市・甲山遺跡（標高98m）などの典型的な高地性集落の眺望関係を整理され、争乱状況に対処するための情報伝達としてのネットワークが存在したとされる。このネットワークのキーステーションが大山遺跡であると認識される。そして、大山遺跡の西の眺望が家島や西島に遮られているに対し、東の眺望は明石海峡まで何の障害もないことを理由に、このネットワークを支えた集団は「近畿の政治勢力との緊張関係に備えた」とその政治的意義に言及されている。

なお、これらの高地性集落で本格的な発掘調査を実施された大山遺跡だけであり、多くは崖崩れ等で採集された弥生土器等が知られているのみである。それらの弥生土器をみれば、檀特山遺跡は中期中葉（畿内第Ⅲ様式古段階平行）からはじまり、中期末までは継続せずに終わっているようである。飾西東山遺跡や甲山遺跡は中期後葉（畿内第Ⅲ様式新段階平行）であり、これらの土器は西播磨地域の弥生土器の特徴を示している。これに比して、大山遺跡の弥生土器は様相が異なり、どちらか言えば尼崎市・田能遺跡の摂津色の特徴が強いのではないかと見られる。

このことなどから、松本氏の政治的見解の当否は、この地域の高地性集落から出土する弥生土器の詳細な検討と中期末に地域的变化するこの地域の弥生土器の意味することを見きわめてから再検討する必要がある。このことは揖保川流域より西に位置する相生市の高地性集落である奥ノ山遺跡と野々山遺跡の弥生土器を比較しても言えることであり、前者が西播磨地域の土器の特徴を示しているが、後者は大山遺跡と同じように、摂津的色合いの濃い様相を示しているのである。

片島遺跡と同じような低丘陵に立地する遺跡として、竜野市・養久乙城山遺跡や養久山前地遺跡等が知られている。両者は揖西平野を見下ろす位置に立地している遺跡であり、弥生土器の様相は摂津色の強い土器である。拠点集落と密接に結びついた、拠点集落の里山にあたる場所に立地する高地性集落は中期末に出現し、土器は摂津色をおびるという特徴が指摘できそうである。

西播磨地域の高地性集落は中期の中で終焉するとも言える状況であるが、市川流域の姫路市・兼田遺跡は後期前半の低丘陵に立地する高地性集落である。

第3節 揖保川流域における古墳の動向

1. 片島古墳群を和田晴吾氏の古墳編年の時期区分に準拠すれば、片島1号墳が中期の8期に、片島2号墳は後期の9期に位置し、古墳時代中期末葉から後期初頭に形成されたことが判る。

2. ここでは、片島古墳群の位置する揖保川流域の古墳の動向をみていきたい。

古墳時代の時期区分については、前期、中期、後期、終末期の編年を用い、その小期の編年細分については、先の和田晴吾氏の編年に準拠している。和田氏は前期を1～4期、中期を5～8期に、後期を9～11期に、終末期を12期と細分している。

3. 揖保川流域の中には地形的まとまりからみて、大津茂川流域を含めて古墳の動向をみていくのが合理的と判断しており、ここでは大津茂川流域も揖保川流域の中に包括して古墳の動向を検討していくことにする。

揖保川流域の有力な古墳の位置的条件をみれば、その下流域に集中していることは、播磨地域の他の流域と同じ傾向である。そして、この下流域には前方後円（方）墳が多く存在するところであり、中でも古墳時代前期の前方後円（方）墳が集中しているということが特徴の一つに挙げられる。このことは古代から海上交通の要であった瀬戸内海路の関連で捉えることが重要である。

総じて、古墳の立地が海路だけではなく河川の道や陸路という交通路の要衝の地に関連して築造されていることが多く、交通路の関連で古墳の立地を分析していく視点は重要である。

揖保川の中流域と上流域は、それぞれ下流域とは別の地理的にまとまりのある小地域を形成しており、古墳の分布からみてもそれぞれ別個の地域集団であると捉えておきたい。古代律令制下でいえば、中・下流域が揖保郡に、上流域が宍粟郡にほぼ相当する地域である。

4. 揖保川下流域の古墳をみれば、前期前葉の1期の前方後円（方）墳が、揖保川流域と大津茂川流域によって形成された東西約9.5km、南北約7.5kmの平野の四方の丘陵や丘陵裾に数多く築造されていることが知られており、古墳出現期には重要な地域であると認識することができる。

1期の大型前方後円墳である丁瓢塚古墳は、この平野の東の丘陵裾の平地に築かれている。丁瓢塚古墳は全長101mで、前方部がいわゆるバチ形に開く最古型式の前方後円墳である。後円部墳頂平坦面の南東隅にかたよって粗い割石積みの小型の竪穴式石室が露出しているが、主体の埋葬施設ではない。立地・墳形の形態は奈良県・箸墓古墳とさわめて類似している。

100m規模の前方後円墳に次ぐ1期の古墳は、50mクラスの前方向後方墳が確認されている。権現山50号墳（全長55m）と権現山51号墳（全長48m）の両古墳で、この平野の西側の丘陵頂部に築かれており、あたかも丁瓢塚古墳と対面するような配置であり、丁瓢塚古墳との距離は約4.2mを測る。

発掘調査された権現山51号墳は、特殊埴輪と三角縁神獣鏡が共伴した列島で唯一の古墳であり、前方向後方墳である。後円部には竪穴式石室が築かれ、舶載三角縁神獣鏡5面のほか多くの副葬品が出土した。また、発掘調査前に後円部から吉備地域の特徴をもつ古式土師器の二重口縁壺形土器が採集されており、搬入土器の可能性が高い土器である。

1期でさらに小規模な前方後円(方)墳としては、30mクラスの古墳が指摘できる。30m規模の古墳では、前方後円墳と前方後方墳の両方の墳形が認められる。前方後円墳としては、養久山1号墳(全長31m)と金剛山6号墳(全長28m)が発掘調査や墳形実測図が作成されていてほぼ確実な例であり、他にも墳形の形態から1期の可能性をもつ古墳として、池の谷2号墳(前方後方墳、全長22m)、宝記山8号墳(前方後円墳、全長28m)が候補としてあげられる。

発掘調査された養久山1号墳は、後円部中央よりかたよる位置に構築された中心埋葬の竪穴式石室とその周囲に箱式石棺5基の埋葬施設が検出され、弥生墳丘墓的な複数埋葬のあり方である。竪穴式石室は長さ4mであり、割竹形木棺が納められていた。副葬品としては、小型の優品の四獣鏡と鉄槍があった。金剛山6号墳はかなり大型の割石も含めて不揃いの割石で貼石状ともいえる状態で割石を墳丘上に葺いている。この両古墳は平野の西部の丘陵にそれぞれ分かれて築かれており、それぞれ異なる小集団の首長墓であろう。

検討してきたことが正鵠を得ていれば、揖保川下流域には古墳開始の1期の段階に大形、中形、小形という前方後円(方)墳がヒエラルキシュな構成をもって出現しており、そこにはこの地域を代表する丁瓢塚古墳の被葬者である大首長のもとに、地域の中小首長が政治的に結合している状況が窺え、そして、すでに首長層の中に階層制が形成されていたことを表しているのであろう。ここには、揖保川流域中流域の吉島古墳も政治的な結合の中に参画していたであろう。

言い換えれば、100mクラスの丁瓢塚古墳を筆頭に、50mクラスの権現山51号墳、権現山50号墳、30mクラスでは養久山1号墳、金剛山6号墳、吉島古墳というヒエラルキーを形成して前方後円(方)墳が出現しているということになる。そして100mクラスの大形古墳と30mクラスの小形古墳の被葬者が前方後円墳を採用し、50mクラスの中形古墳が前方後方墳を採用しているということが指摘できる。このような状況は吉備地域の1期の古墳のあり方にも認められる。備前地域の古墳の構成をみれば、最大の浦間茶臼山古墳(全長138m)を筆頭に70mを超える大形古墳は前方後円墳を採用し、50m以下の古墳では前方後円墳と前方後方墳を採用している。備中地域では120mの中山茶臼山古墳は前方後円墳を採用し、50m以下の古墳では前方後円墳と前方後方墳がみられる。美作地域でも備中地域と似た様相を示している。

このことは、地域の最大の古墳は前方後円墳を採用することが原則でありこと、70mを超える古墳も前方後円墳の墳形をとり、50m以下の中形古墳、小形古墳は前方後円墳あるいは前方後方墳を採用しておりその選択はそれぞれの政治集団の内部の事情によるのでであろう。揖保川流域と備中地域では50mクラスの古墳は前方後方墳を採用することの方が優勢である。いずれにしても、墳形の選択にある法則性があることは理解できるであろう。

古墳成立期の1期段階に、さきにみたような備前・備中・美作の3地域には揖保川流域と同じような前方後円(方)墳がヒエラルキカルな構成をもって出現しており、その規模は備前地域の浦間茶臼山古墳が最大であり、吉備地域の方が重厚な構成である。このことを解釈すれば、吉備地域にはすでに浦間茶臼山古墳の被葬者の大首長のもとに地域首長連合体制というものすでに形成されており、揖保川流域の首長もこの連合体制に参画していたとみるのが妥当であろう。

すなわち、この地域連合体制を代表する大首長は備前地域の浦間茶臼山古墳の被葬者であり、その下に四つの地域政治勢力の首長層がつながり、地域政治勢力を代表する有力首長は70mを超える前方後円墳の被葬者達であり、首長連合体制の首長会議というものを想定すれば、70mを超える前方後円

墳の被葬者である有力首長によって開催されたのであろう。

なお、この吉備の首長連合体制の上位には、大和東南部の大和・柳本古墳群の大首長がおり、その頂点は全長294mの前方後円墳の箸墓古墳の大王とも目される被葬者であり、浦間茶臼山古墳の被葬者も上記の諸集団の政治勢力をバックに参画していたのであろう。

5. 2期の古墳は明確でないが、可能性として1期とみた権現山50号墳や養久山18号墳（前方後円墳、全長30m）をその候補としてあげられる程度である。

3期では奥塚古墳と龍子三つ塚1号墳が有力な前方後円墳としてあげられる。

奥塚古墳は眼下に瀬戸内海をみおろす海岸に突き出た丘陵上に築造されており、その立地は兵庫県下最大の五色塚古墳と同じで、前方部を瀬戸内海に向けているのも同じであり、五色塚古墳とともに海上交通の要衝の位置に占地した臨海性の古墳である。周濠はないが、葺石、埴輪は採用している。埴輪は三角形の透かしをもつ川西埴輪編年のⅡ期の円筒埴輪が採集されており、揖保川流域で畿内的な埴輪の採用はこの古墳が嚆矢である。後円部に板石を使用した整備で長大な竪穴式石室が構築されていた。奥塚古墳は揖保川流域では丁瓢塚古墳に次ぐ大形前方後円墳であるが、その古墳の内容から丁瓢塚古墳の系譜に連なる古墳とは把握が困難で、別の意図をもって海上交通の要衝に地に築かれた古墳と理解している。なお、奥塚古墳が築かれた3期には1期の首長連合体制は解体していると捉えている。

龍子三つ塚1号墳は全長38mの前方後円墳であり、後円部に竪穴式石室を構築し、三角縁神獸鏡、鉄製の武器類や農工具類が副葬されていた。1期に揖保川下流域に前方後円（方）墳がつくられる範囲における有力な3期の前方後円墳の存在はこの古墳のみである。

6. 奥塚古墳、龍子三つ塚1号墳が築造されて以後、この揖保川下流域には、後期の10期の西宮山古墳が築かれるまで全く前方後円墳が築かれなくなるという特異な現象が指摘できる。

7. 前期後半（3期）から中期前半（5期）の小規模な古墳としては、龍子三つ塚2号墳（円墳、径約20m）、松田山古墳（円墳、径約20m）、鳥坂3号墳（円墳、径12m）、権現山9号墳（長方形墳、長辺15m）などである。龍子三つ塚2号墳からは斜縁四獸鏡、キ鳳鏡が出土している。松田山古墳（3期）は割石の簡略な竪穴式石室で、舶載斜縁二神二獸鏡、筒形銅器、銅鏃などが出土している。権現山9号墳は割石積みの礫床構造をもつ粗い竪穴式石室で、小形珠文鏡が出土している。鳥坂3号墳（4～5期）は粘土槨で四獸鏡、竪槨などが副葬されていた。

8. 次に比較的規模の大きい古墳が築かれるのは中期後半（7～8期）の時期で、帆立貝式古墳や大形円墳として現れる。造り出し付き円墳の宿禰塚古墳（径約42m）、馬蹄形周濠を帆立貝式古墳の塚森古墳（全長約60m）、帆立貝式古墳の片島1号墳（全長21.6m）、大形円墳の綾部山1号墳などである。大形円墳の時代ともいえるような状況を呈している。宿禰塚古墳（8期）は造り出し部からTK73型式の須恵器が、綾部山1号墳（8期）は墳丘からTK208型式の須恵器が採集されている。片島1号墳は後円部二段、前方部一段築成の帆立貝式古墳で、後円部上段と前方部にのみ葺石を葺き、後円部テラス面に円筒埴輪を樹立していたことは本報告のとおりである。塚森古墳は籬の低い川西編年のⅣ期

の埴輪が採集されており、周濠の形態から8期の築造でいいであろう。

9. 後期の10期には再び前方後円墳が築造されるが、一代のみで継続して前方後円墳を造ることはない。

西宮山古墳(10期)は全長34.6mの前方後円墳であり、古式の穹窿形の片袖式横穴式石室を埋葬施設とし、変形四獣鏡、優品の金銅製馬具類、金製の垂飾付耳飾り、金銅製胡祿など多くの優品が副葬されていた。須恵器には装飾須恵器も多くMT15型式からTK10型式の土器が出土している。

後期の群集墳では、長尾タイ山古墳群が古式群集墳で、丁古墳群は横穴式石室を主体とする新式群集墳の様相を呈し、同じく横穴式石室を主体とする権現山古墳群は新式群集墳から終末期の横穴式石室を含むであろう。終末期群集墳では西脇古墳群があり、いずれも100基を超える大型の群集墳である。

10. 揖保川中流域の古墳では、吉島古墳(1期)が著名であり、ながらく揖保川流域の最古の前方後円墳と把握され、吉島古墳の出現を契機にこの流域の古墳の展開が論じられてきたが、前述の下流域の1期の古墳の実態からみれば、再検討が必要であろう。

吉島古墳は全長30mの前方後円墳で、後円部に割石積みの竪穴式石室が築かれ、石室は粘土棺床をもたないタイプである。副葬品では、舶載三角縁神獣鏡4面、舶載方格規矩鏡1面、舶載内行花文鏡1面、鉄製武器類等が出土している。吉島古墳の位置している地理的条件からみて、威信財としての鏡、鉄素材、塩などの必要物資や情報の入手にしても南部の下流域の集団を通じてしか入手するのは困難な環境であり、下流域に丁瓢塚古墳を頂点とする政治的な地域集団が形成されている状況から判断して、その影響下にあった中流域の地域集団の小首長と捉えていいであろう。

吉島古墳に継続する首長墓は、同規模墳の市野保裏山古墳であろう。柄鏡式の前方後円墳(全長30m)で、後円部には割石を使用した竪穴式石室とみられる埋葬施設がある。

中期には顕著な古墳の存在は知られていない。

後期には、横穴式石室を主体とする新式群集墳が数多く築かれており、市野保裏山古墳群(83基)、馬立古墳群(32基)、はっちょう塚古墳群と馬立南山下古墳群は同一の古墳群とみてよく計27基で構成されるなど、新宮町のみでも250基を超える横穴式石室が築かれている。墳丘20m前後の後期の大型古墳も7基以上を数え下流域を凌駕するほどの状況である。古式の穹窿形の横穴式石室は馬立1号墳(姥塚古墳)、馬立5号墳、新田山古墳などがあり、一辺26mの方墳で、玄室長3.4m、幅2.25mの大型横穴式石室は終末期に位置付けされる。

11. 揖保川上流域の古墳をみれば、前期後半から中期の古墳群として、この流域の小平野を望む丘陵に築かれた12基の古墳からなる伊和中山古墳群がある。伊和中山1号墳は上流域では唯一の前方後円墳である。墳形は地形の制約を受け、左右対象ではなくいびつな墳形を呈しているが、全長62mの大形に属する前方後円墳である。後円部には割石を使用した長さ5.5mの長大な竪穴式石室を構築し、墓壙は中央をU字形に掘り込む前期竪穴式石室の中では新しいタイプの構造である。倣製方格鏡、素環頭太刀、堅櫛などが副葬されており、4期の築造とみておきたい。伊和中山4号墳は伊和中山1号墳より先行する可能性のある円墳であるが、実際はいびつな楕円形(径38m)を呈し、丁瓢塚古墳からも出土がみられる竹管文を施した山陰系の特殊な埴輪が採集されている。伊和中山古墳群はこの地域

の安定した同族の首長達が比較的長くに築いた古墳群と評価できる。

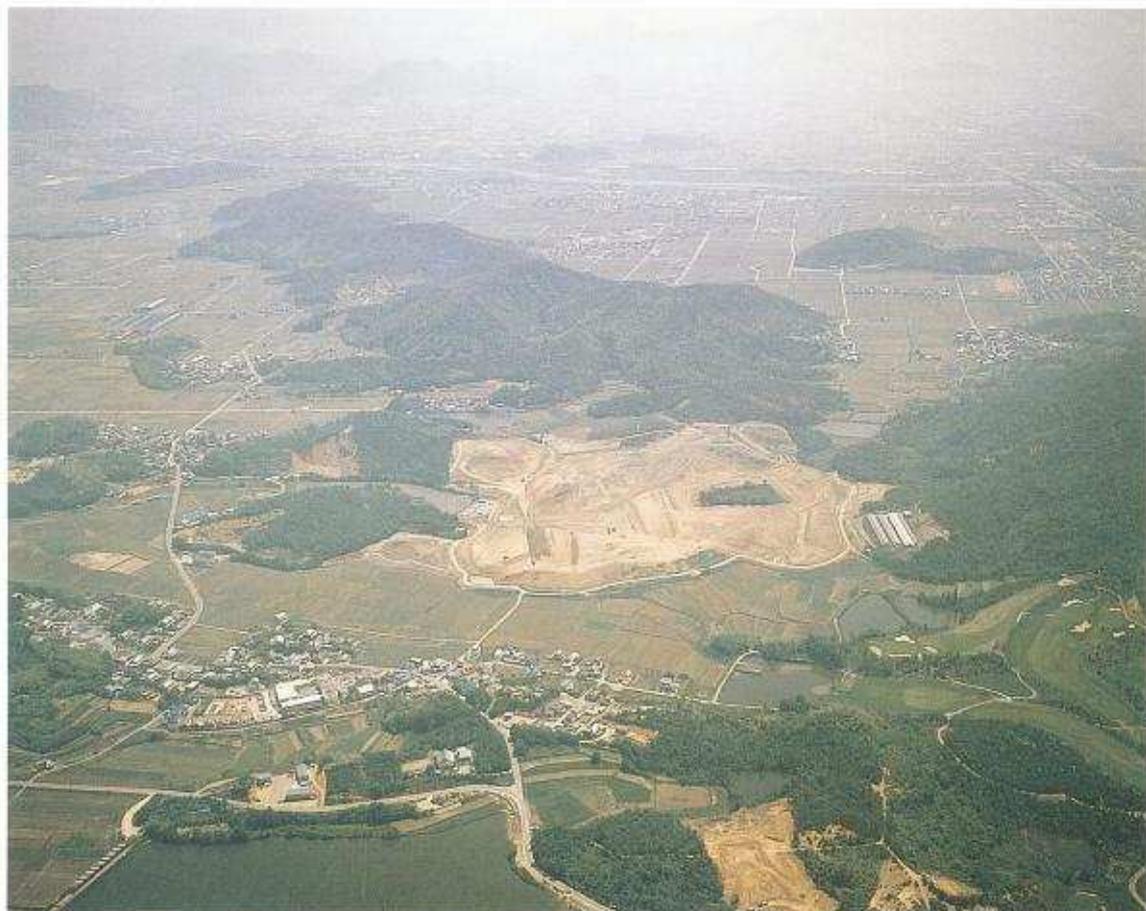
中期後半には、安黒御山5号墳（8期）が築かれ、横矧板鋌留短甲、三環鈴、珠文鏡とみられる小形倣製鏡、長頸鎌などが出土しているが、墳形や埋葬施設はいまひとつ明確でない。

後期では、横穴式石室を主体とする20基未満の古墳で構成される小規模な群集墳がみられるが、中流域のような後期古墳の展開はしない地域である。

参考文献

- 山本三郎 1992 「玉津田中遺跡」『兵庫県史』考古資料編
- 直良信夫・小林行雄 1932 「播磨田吉田史前遺蹟研究」『考古学』第3巻第5号
- 森岡秀人 1985 「弥生時代歴年代論をめぐる近畿第V様式の時間幅」『信濃』第37巻第4号
- 寺沢 薫 1985 「弥生時代船載製品の東方流入」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ
- 松本正信 1978 「考古学からみた龍野」『龍野市史』第1巻
- 松本正信・加藤史郎 1982 「兼田—弥生遺跡と古墳群の調査—」(姫路市文化財報告Ⅶ)
- 和田晴香 1987 「古墳時代の時期区分をめぐる」『考古学研究』第34巻第2号
- 岸本直文 「丁瓢塚古墳測量報告」(前掲)
- 近藤義郎ほか 「権現山51号墳」(前掲)
- 近藤義郎ほか 「養久山墳墓群」(前掲)
- 是川 長 1977 「揖保川水系の前半期古墳について」『神戸女子大学論集』68号
- 近藤義郎編 1991 「前方後円墳集成—中国・四国編—」
- 都出比呂志 「農業共同体と首長権」(前掲)
- 梅原末治 「龍子の三ツ塚古墳」(前掲)
- 松本正信 1984 「龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史』第4巻
- 八賀 晋 1982 「富雄丸山古墳 西宮山古墳出土遺物」京都国立博物館
- 山本三郎ほか 「揖保郡御津町権現山8・9号墳」『兵庫考古』第20号 兵庫考古研究会
- 水口富夫・渡辺 昇ほか 1984 「烏坂古墳群」龍野市文化財調査報告書Ⅴ
- 山本雅和 1983 「綾部山1号墳採集の遺物」『兵庫考古』18号
- 上田哲也・山本雅和ほか 「長尾タイ山古墳群」龍野市文化財調査報告書Ⅲ
- 上田哲也・河原隆彦ほか 1963 「姫路丁古墳群」東洋大学附属姫路高等学校考古学教室
- 近藤義郎・松本正信ほか 「吉島古墳」(前掲)
- 松本正信・加藤史郎ほか 1987 「市野保裏山1号墳 上笹古墳群」新宮町文化財調査報告8
- 新宮町教育委員会編 1992 「埋蔵文化財分布地図」新宮町文化財調査報告15
- 垣内 章 1986 「伊和中山古墳群Ⅰ—1・2号墳発掘調査概要報告—」一宮町文化財調査報告3

写真図版



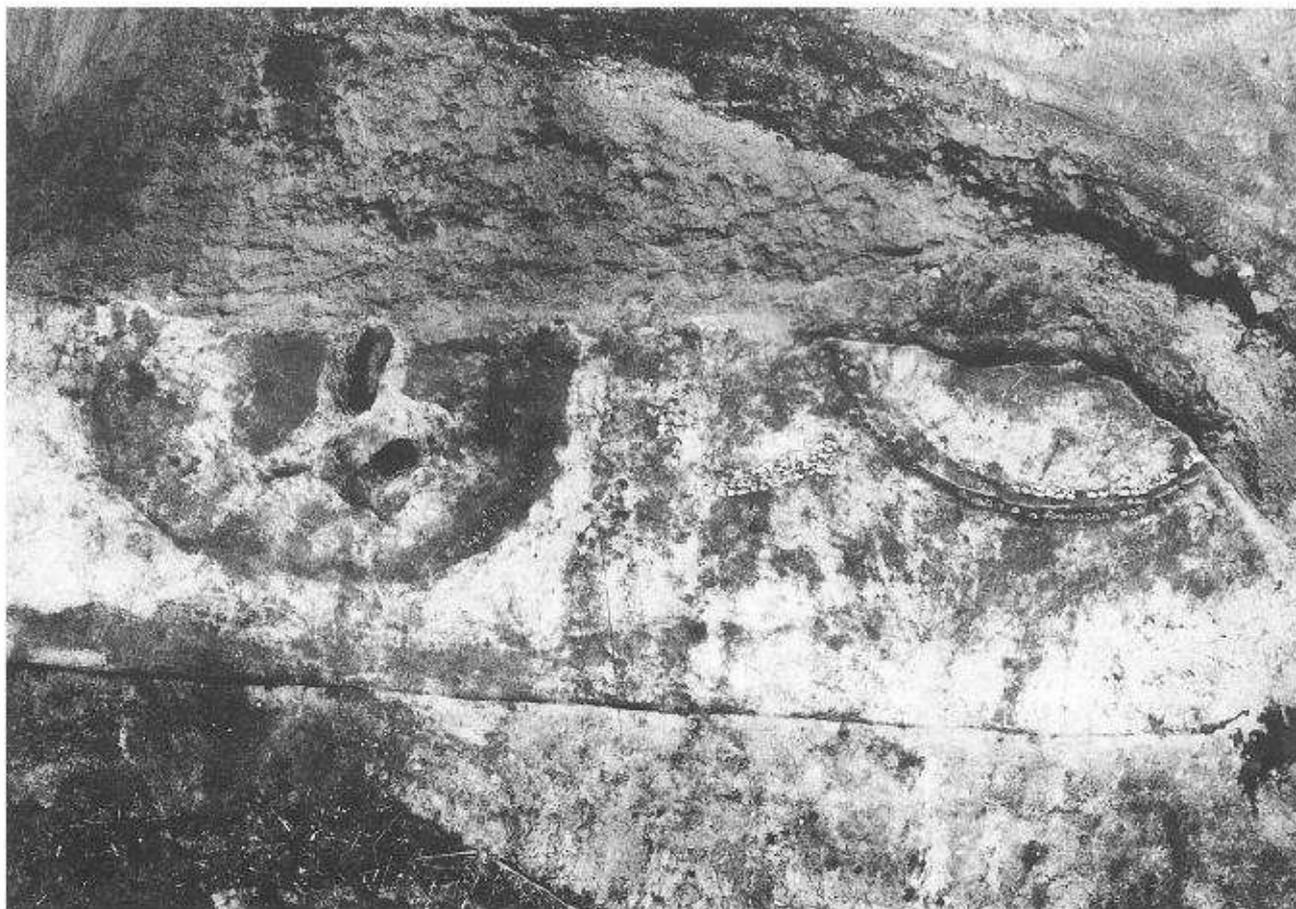
南上空からみた遺跡の景観



南西上空から遺跡と揖西平野を望む



南上空からみた片島古墳群・片島遺跡



上空からみた調査後の片島1・2号墳



上空からみた調査後の片島1号墳



上空からみた調査後の片島2号墳



調査前の状況（北から）



調査前の状況（南東から）



調査後の片島1号墳の側面の状況



南からみた片島1号墳の墳丘構造



前方部と後円部の地輪樹立の遺存状況



前方部の土輪の出土状況(1)



前方部の土輪の出土状況(2)



後円部の埴輪列と上段葺石の関係 (1)



後円部の埴輪列と上段葺石の関係 (2)



前方部葺石とくびれ部の状況



前方部葺石



前方部の葺石除去後の状況



後円部上段の墳丘盛土の断面



後円部上段の墳丘盛土の断面と葬石



墳丘構造と流出土の関係



後円部の墳丘構造と流出土の関係



前方部の掘割断面と葺石と後世盛土の関係



前方部掘削の土層断面



前方部の土層断面と葺石（1）



前方部の土層断面と葺石（2）



前方部掘削内の須恵器出土状態（1）



前方部掘削内の須恵器出土状態（2）



墳丘と周溝



墳丘の地輪樹立の遺存状況と周溝内の埴輪出土状態



周溝内埴輪の出土状態 (1)



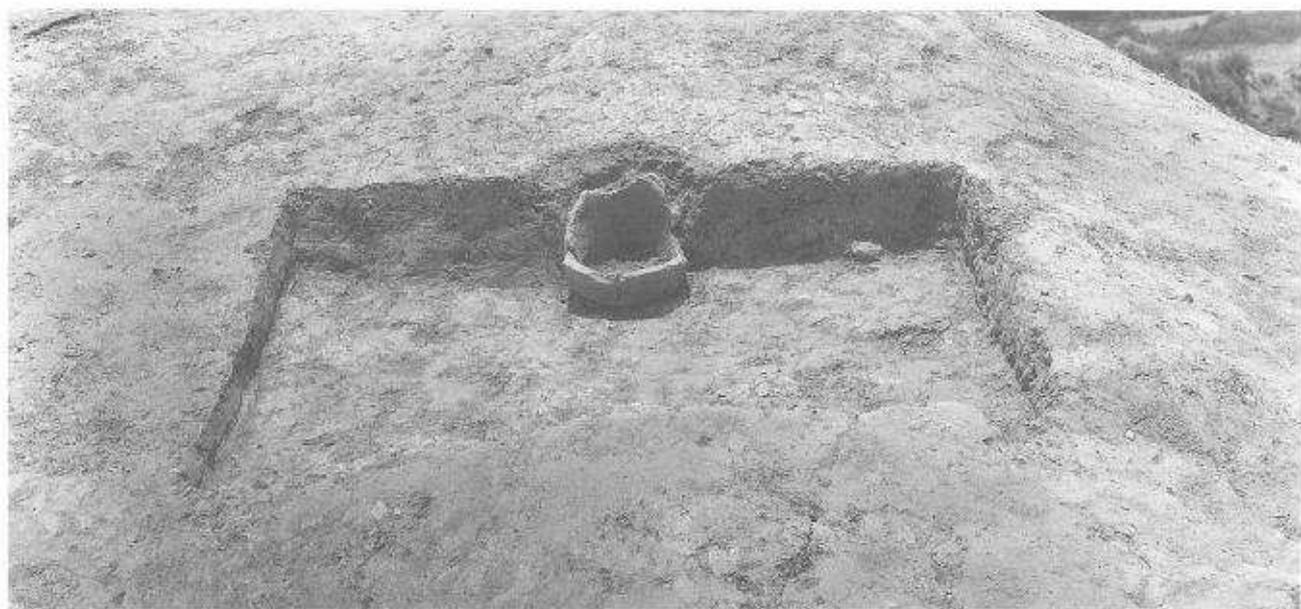
周溝内埴輪の出土状態 (2)



墳丘土層断面（1）



墳丘土層断面（2）



樹立埴輪の掘り方



遺跡と遺構の配置



竪穴住居址の配置



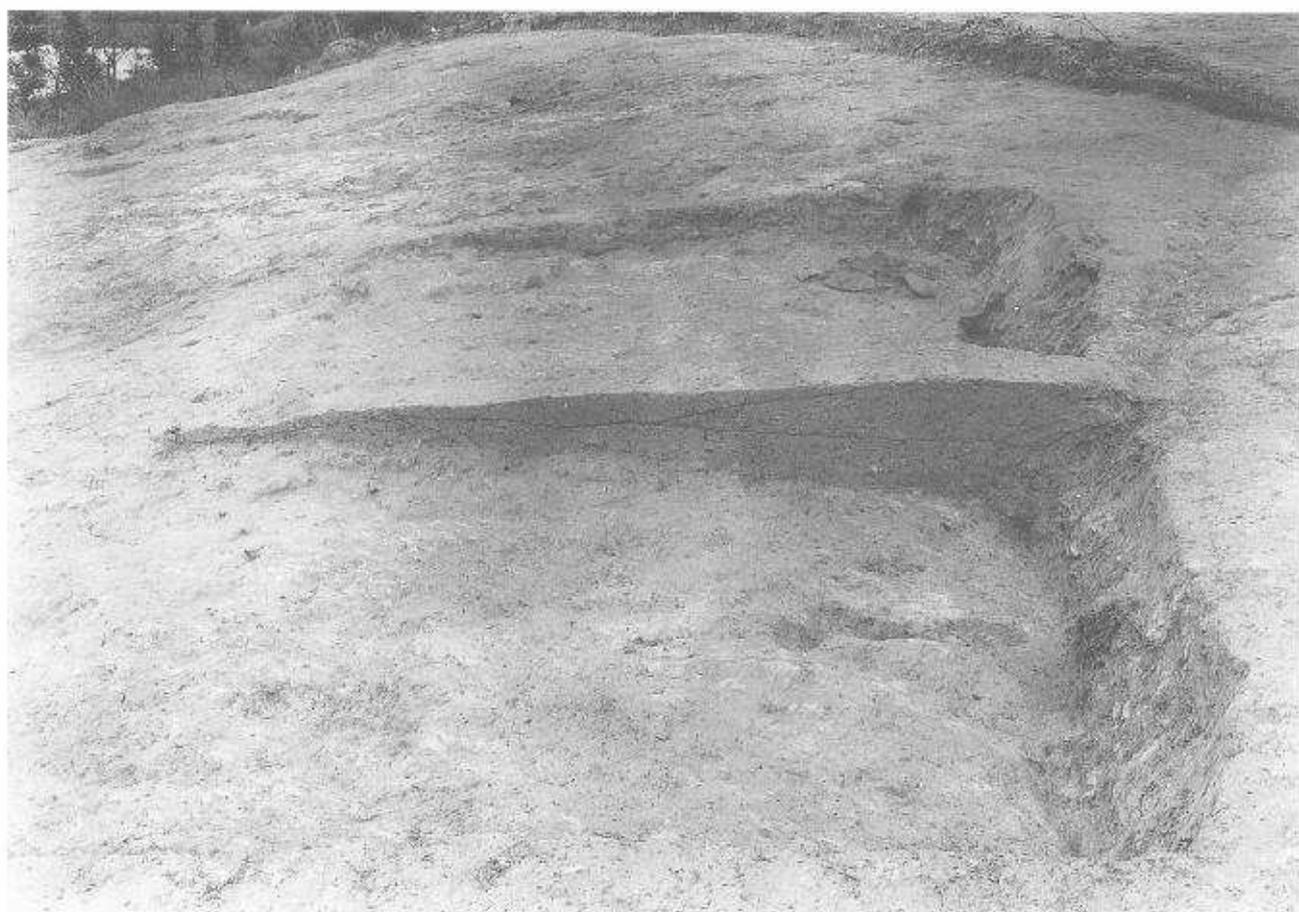
1号竪穴住居址



1号竪穴住居址の弥生土器出土状態



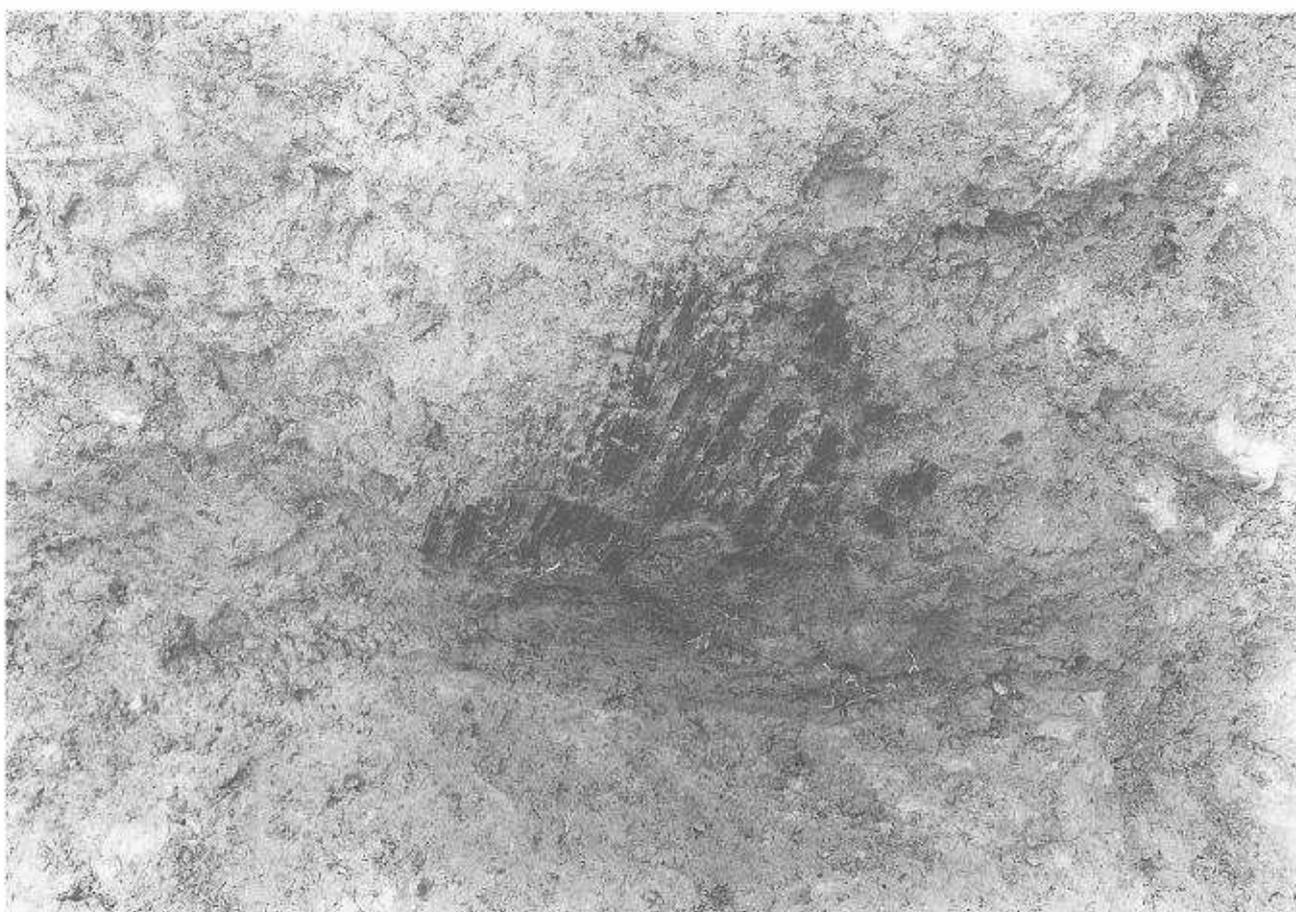
2号竪穴住居址



2号竪穴住居址の土層断面



2号竪穴住居址の壁体の矢板痕跡 (1)



2号竪穴住居址の壁体の矢板痕跡 (2)



2号竪穴住居址の弥生土器と蛤刃石斧出土状態



土坑1と段状遺構



E 2



E 9



E 3



E 10



E 4



E 11



E 8



E 12

円筒地輪(1)



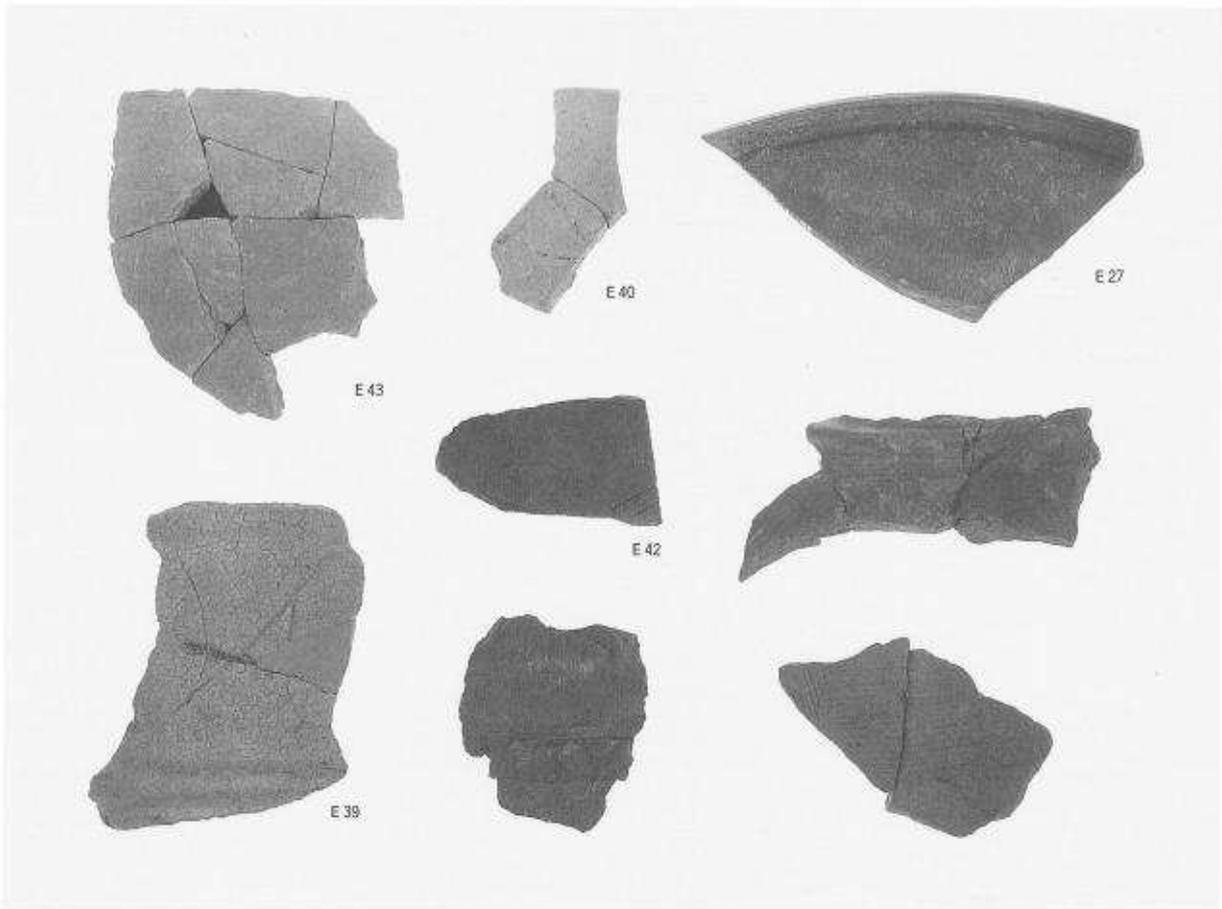
円筒埴輪(2)



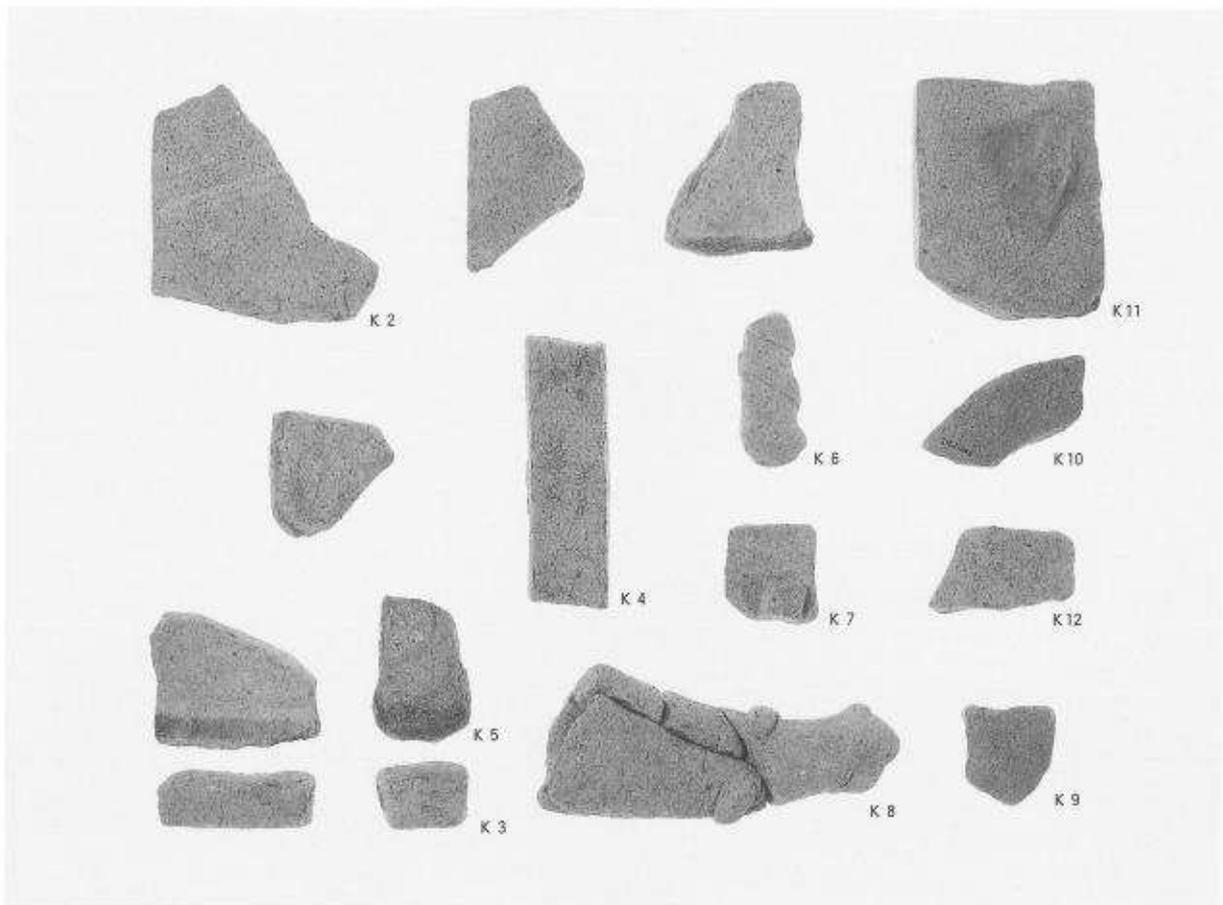
円筒埴輪 (3)



円筒埴輪(4)



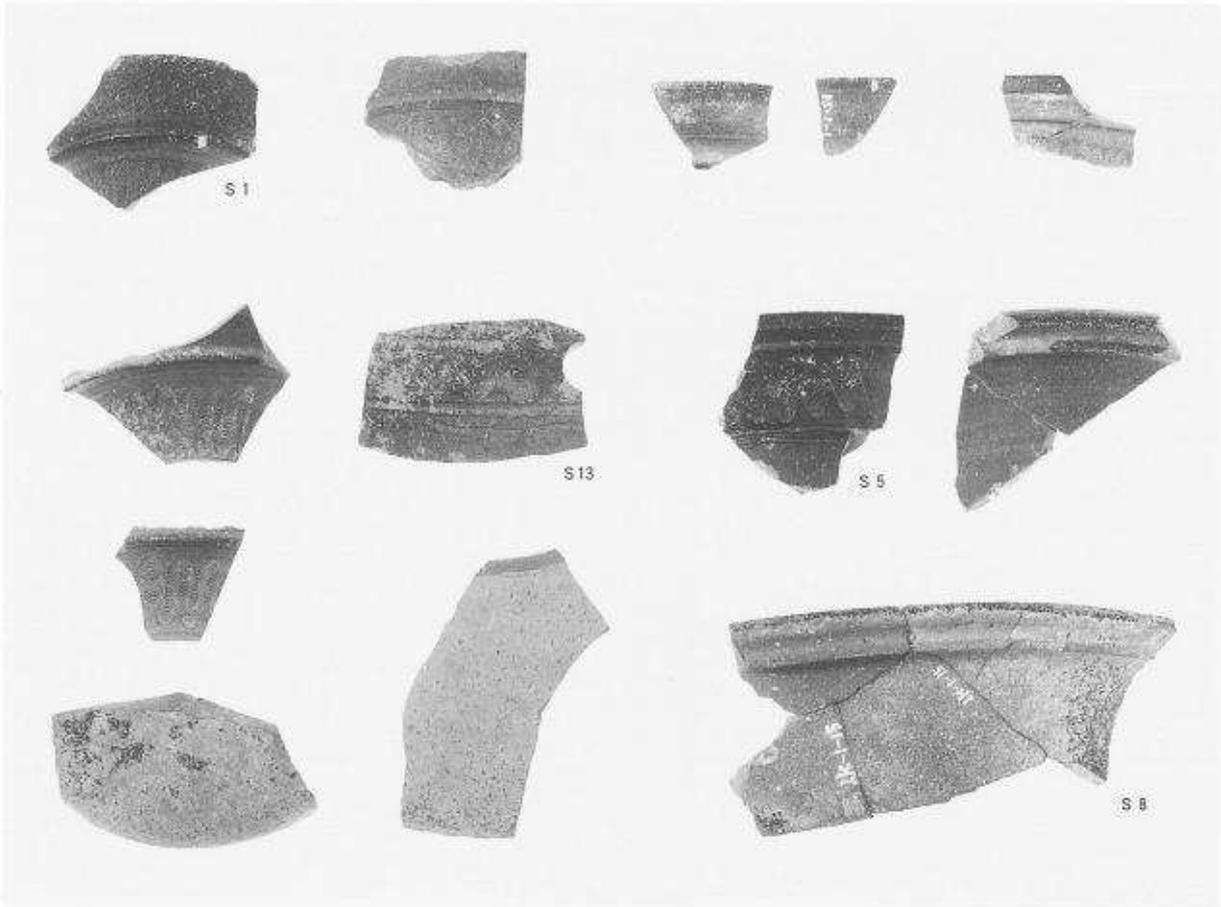
円筒埴輪 (5)



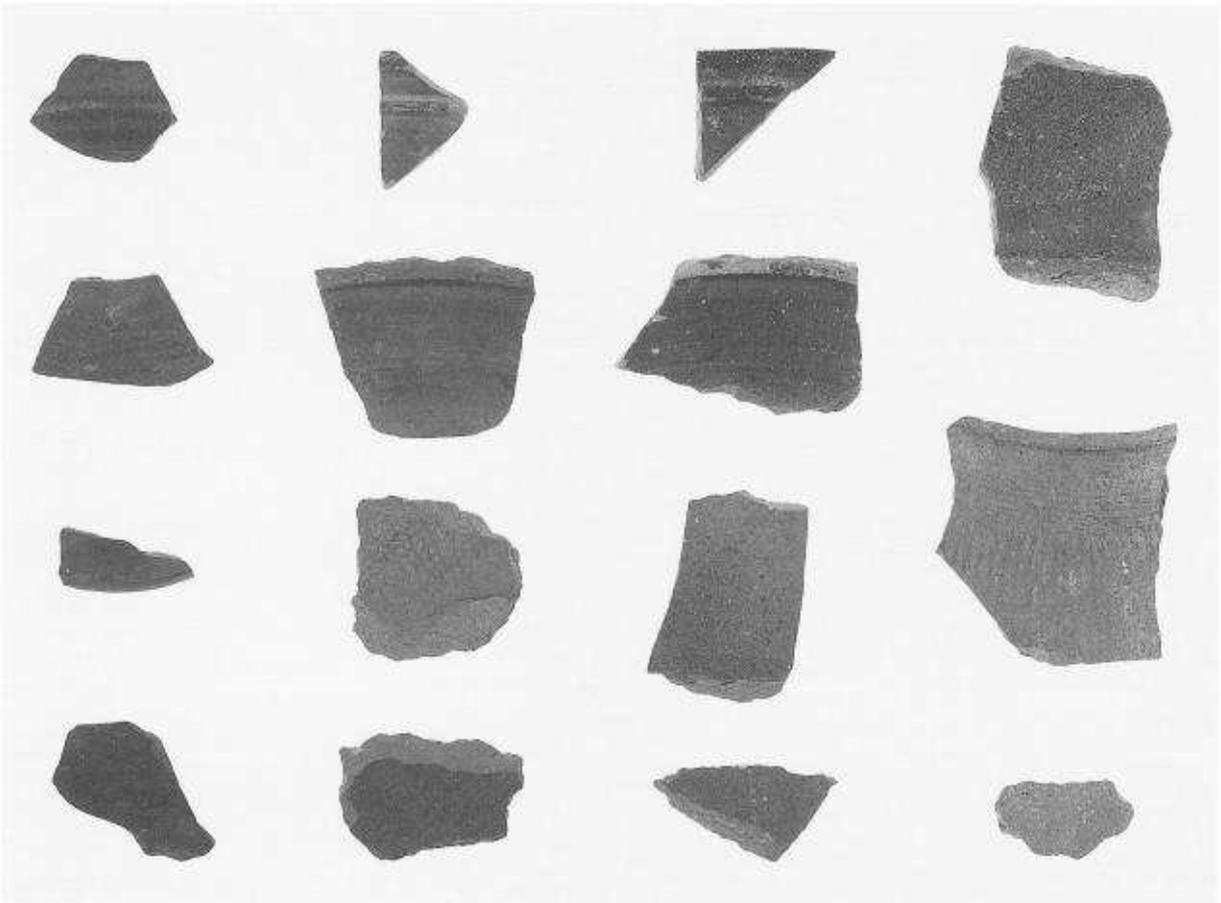
形象埴輪 (1)



形象埴輪(2)・須恵器(1)



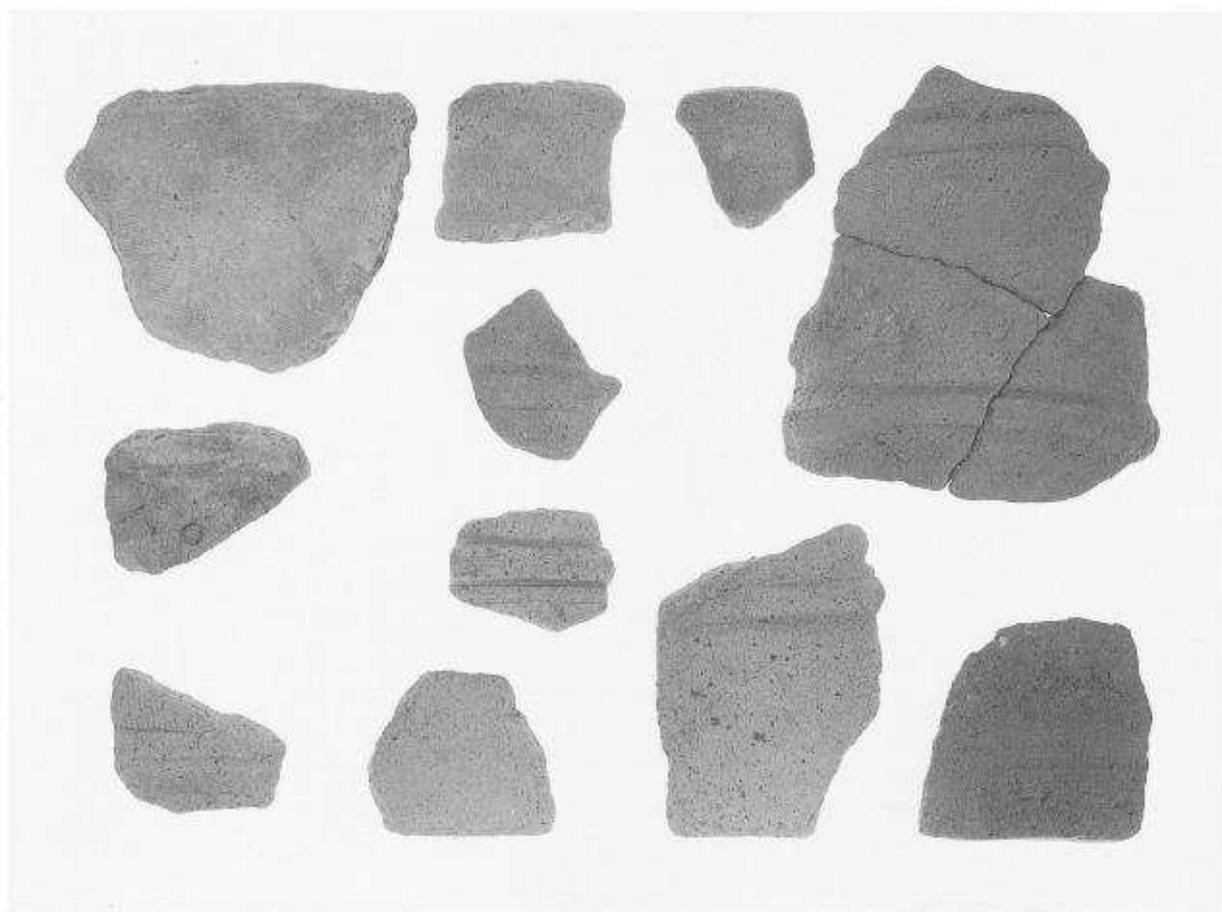
須恵器(2)



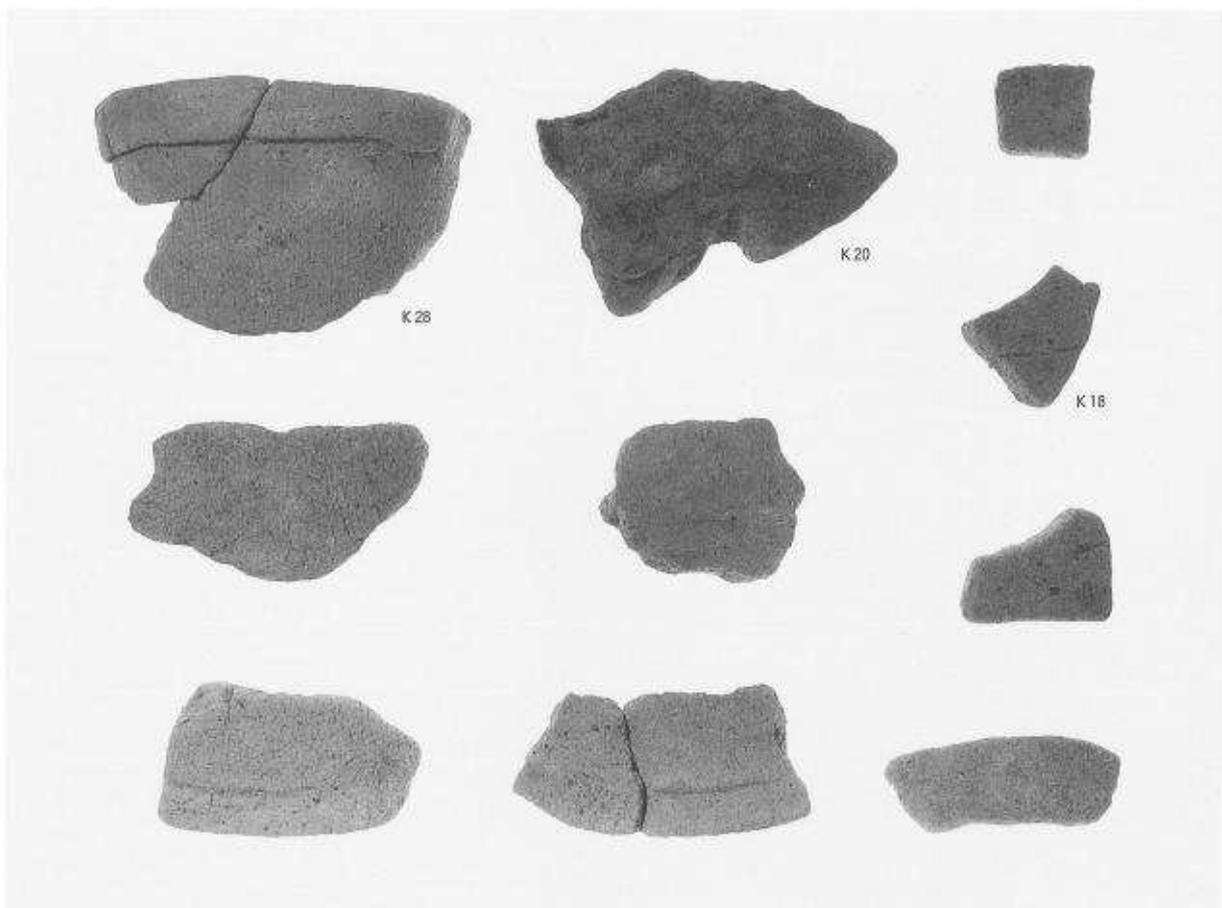
須恵器(3)



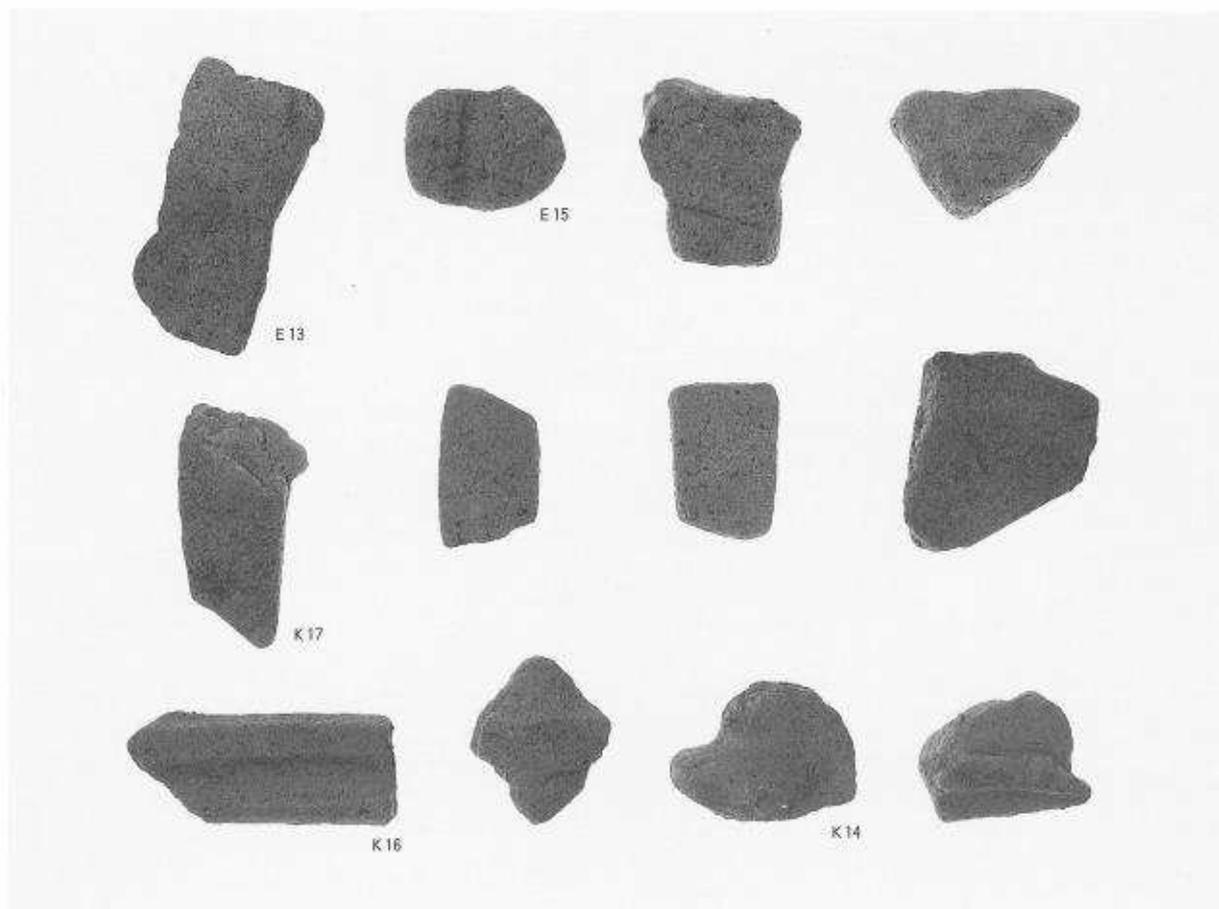
円筒埴輪(1)



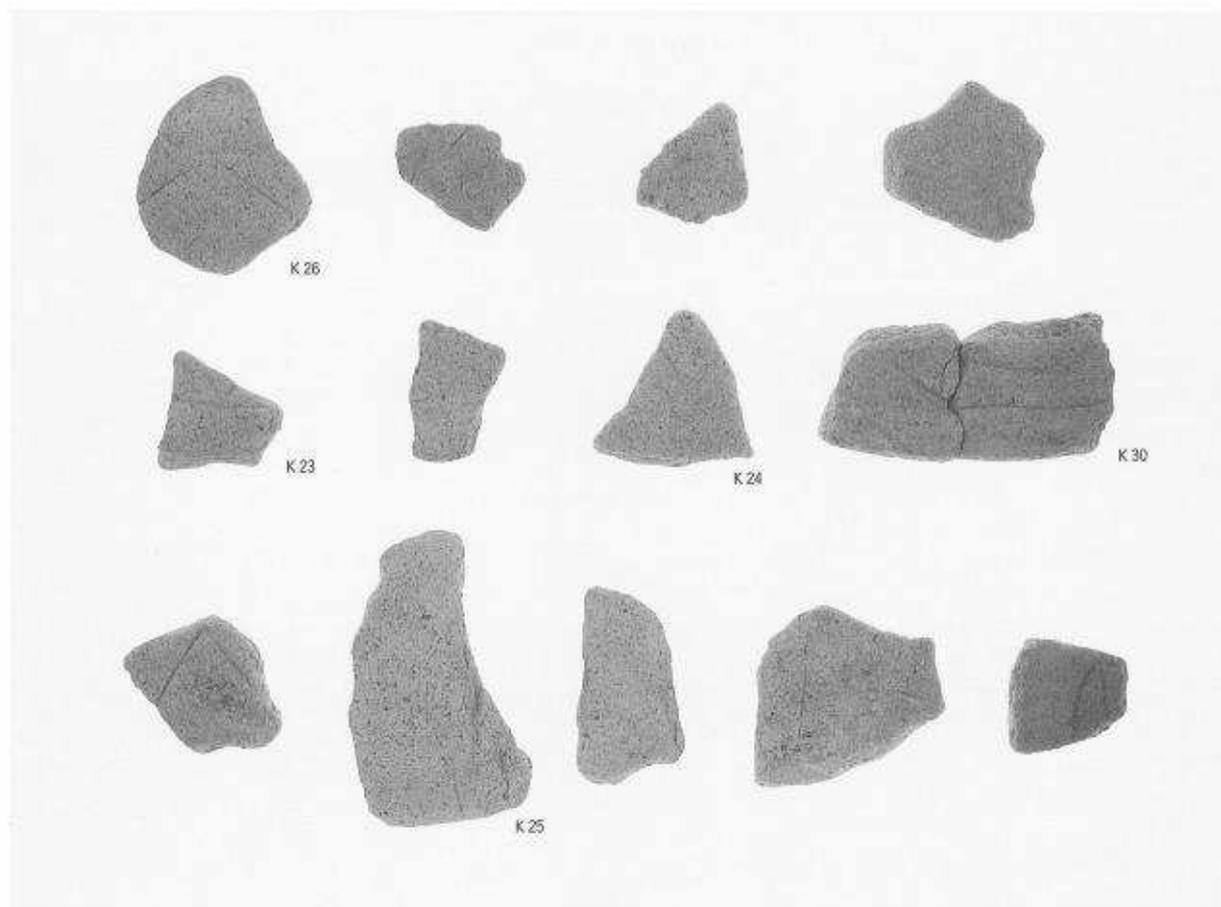
円筒埴輪(2)



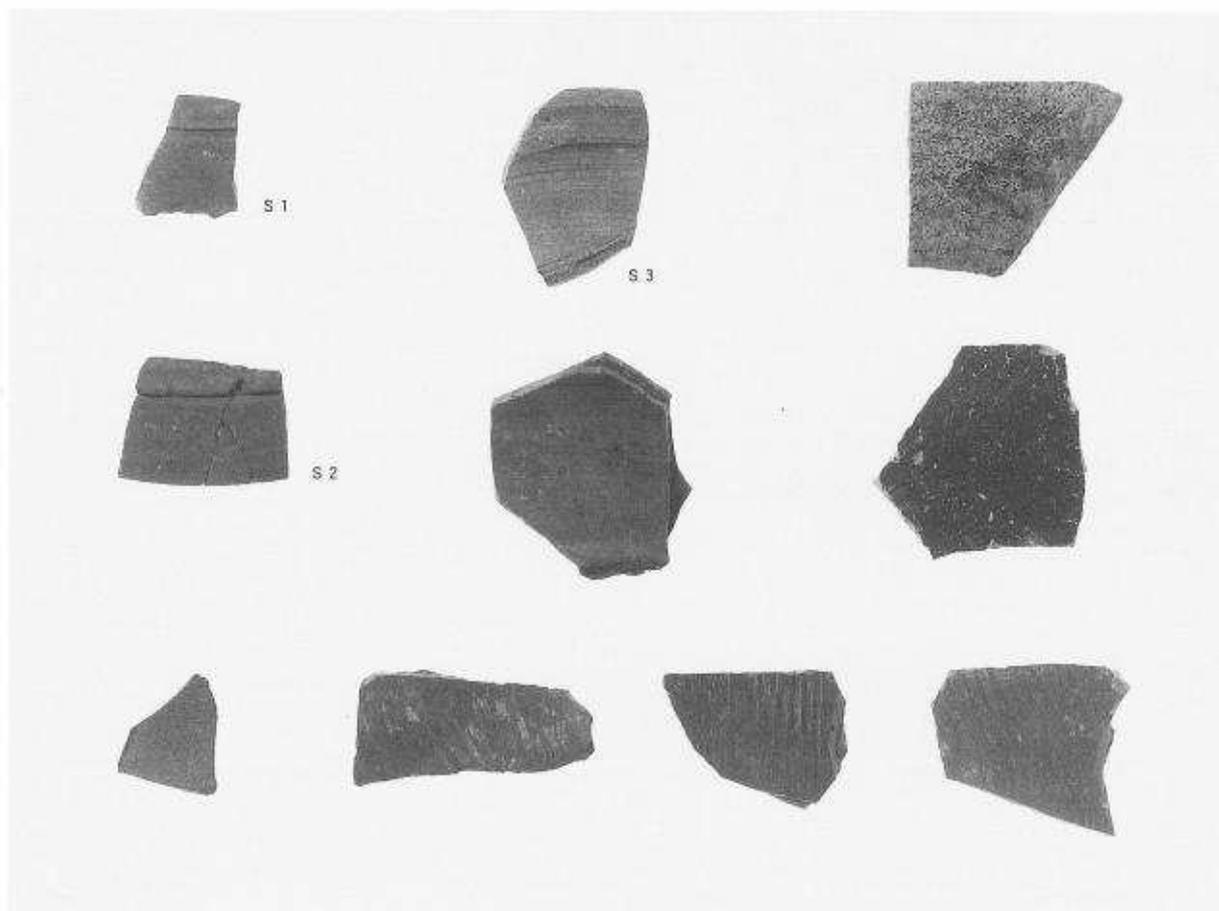
形象埴輪(1)



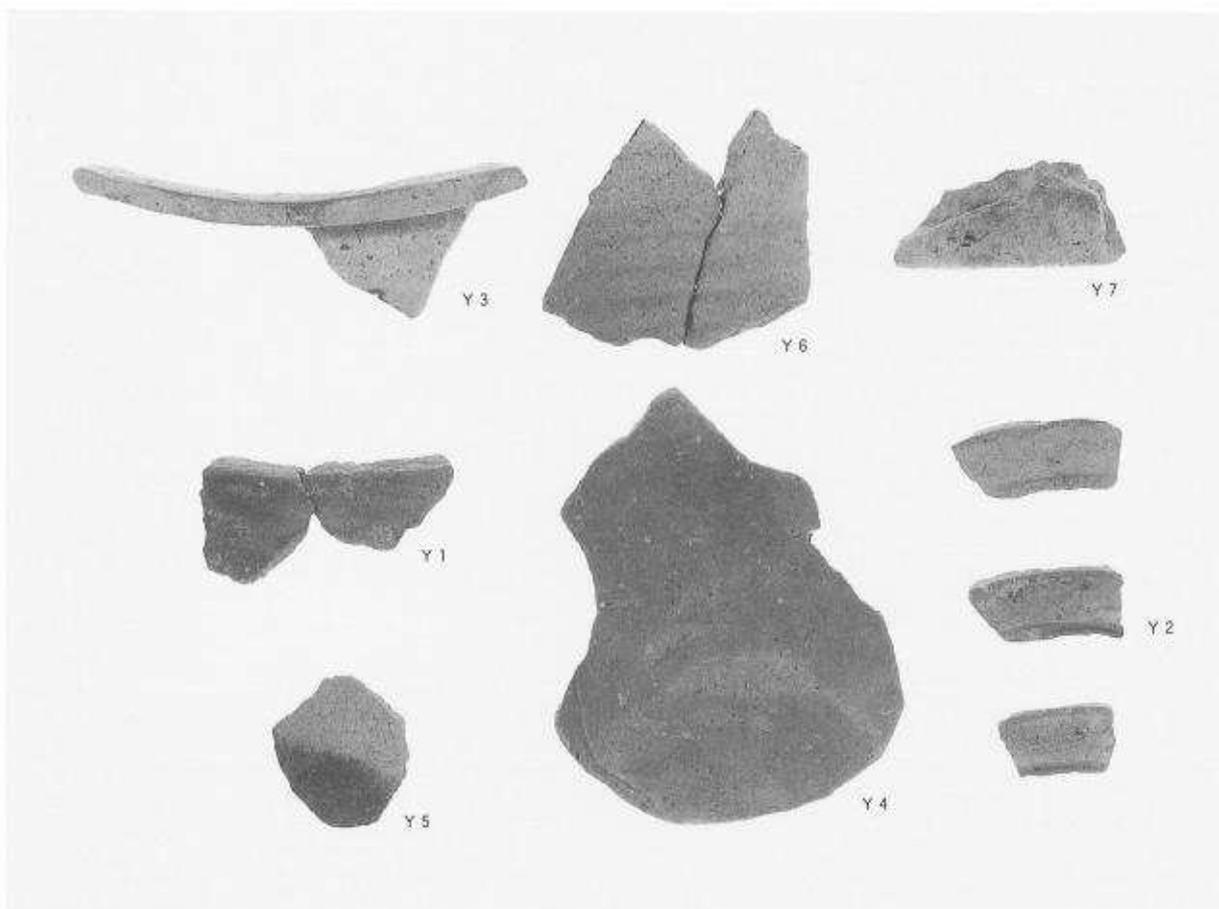
形象埴輪(2)



形象埴輪(3)



須恵器



弥生土器

兵庫県文化財調査報告 第143冊

片島古墳群・片島遺跡発掘調査報告書

— 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XⅦ —

平成7年3月31日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 水山産業株式会社

〒653 神戸市長田区二番町3丁目4番1号



この冊子は、古紙100%の再生紙を使用しています。